

校注附例「荻生徂徠『譯文筌蹄』」(三)

坂本具償^{*1}

財木美樹^{*2}

An Annotated Modern Japanese Translation of "Yakubun-Sentei" by Ogyu Sorai (3)

Tomotsugu SAKAMOTO

Miki ZAIKI

本稿は、前稿の続きである。荻生徂徠『譯文筌蹄』のキの部、クの部、ケの部、コの部、サの部、シの部に対して本文を平仮名、現代仮名遣いに直し、句読点を施したテキストを作成し、引用する例の用例を附したものである。『譯文筌蹄』はいわゆる同訓異字について解説したもので名著である。原本は稀観本に属し、影印本も昨今では入手しにくい。また本文には句読点がなく、片仮名で書かれおり、今の人にとっては読みにくく、理解するのもむつかしい。したがって本稿を参考としてこの名著を少しでも多くの方に読んでいただければ幸いである。今後、スの部以降も継続して掲載する予定である。

キーワード

同訓異字 小泉秀之助 吉有鄰

*1 香川高等専門学校名誉教授

*2 比治山大学非常勤講師

校注附例 「荻生徂徠『譯文筌蹄』」(三)

坂本具償
財木美樹

はじめに

荻生徂徠『譯文筌蹄』はいわゆる同訓異字について解説したものである。しかし原本は稀覯本に属し、影印本も昨今では入手しにくい。また本文には句読点がなく、片仮名で書かれおり、今の人のとっては読みにくく、理解するのもむづかしい。そこで本文を平仮名、現代仮名遣いに直し、句読点を施したテキストを作成し、引用する例の用例を附した。日本語は語彙が少ないので、同訓異字が多く、語彙の選択をあやまる場合が多々ある。その同訓異字に関する名著といわれるのが荻生徂徠『譯文筌蹄』と伊藤東涯『操觚字訣』である。しかしそのような名著があまり知られず、読まれていないことが残念であり、言葉や文章に興味を有する人にすこしでも知ってもらいたい、文章を作成執筆するのに参考としてもらいたく思い、本稿を作成した。今回は「キの部」から「シの部」までの部分を収める。今年度も昨今の事情により一部の図書館や大学図書館が閲覧利用できない状態が続き、調べきれないところもあったが、事情が改善されれば続けて増補を施したい。

版本

- ・『譯文筌蹄初編』六卷 正徳四年(一七一四)正月・正徳五年(一七一五)寶暦二年(一七五三)再版
 - ・『譯文筌蹄後編』三卷 寛政八年(一七九六)九月
 - ・『譯文筌蹄初編後編』 文政八年(一八二五)再版
- 明治九年(一八七六)九月再版

影印本

- ・『荻生徂徠全集』第二卷言語篇 みすず書房 一九七四・八
- ・『荻生徂徠全集』第五卷 河出書房新社 一九七七・一
- ・『漢語文典叢書』第三卷 汲古書院 一九八九・三

活字本

- ・『譯文筌蹄附東涯「用字格」』 小泉秀之助 須原屋書店 明治四十一年(一九〇八)一月

影印本

- ・名著普及會 昭和六十二年(一九八七)

*臺灣にも影印本あり

凡例

- 一、本稿は荻生徂徠『譯文筌蹄』のキの部からシの部に対して校註附例を施したものである。
- 一、本稿は荻生徂徠『譯文筌蹄附東涯「用字格」』須原屋書店を底本とし、刊本を用いて校正する。
- 一、底本には句読点がなく、片仮名表記であるが、いま句読点を切り、片仮名を平仮名にあらため、ルビを増補する。
- 一、引用文は返り点、送り仮名を附しているが、書き下し文に改める。
- 一、引用文、術語には「」を施す。
- 一、語の左右にルビがあるものがあるが、左訓は語の下に「」を附して下にいれる。
- 一、註は原文に引く引用文、術語に対してその用例を挙げたが、用例はかならずし

も初出のものではなく、代表的なものでもなく、また未詳なもの、見当違いなもの、取捨不適なものなどがあると思われるが、本文を理解する上で参考としてもらえれば幸いである。

一、註に引く用例の該当する部分に傍線を引く。

一、一部の古語は原文のニュアンスを残すため、簡単な訳語を「」に附して下に
いれる。

一、底本の順序は発音順と称するが、かならずしも五十音順になっていない。ただ
底本との整合性を保つため項目の順序は底本のままとし、「索引」を作成して
冒頭に附す。

一、見出し語の下に「(一、三十五号表)」、「(後二、十七号裏)」などあるのは、
刊本の巻数と葉数、および裏か表をあらわす。また「後」は後編をあらわす。

索引 (下記の数字は本文の順序である。本文はかならずしも五十音順になってい
ないが、入れ替えると原本との整合性がなくなるので、そのままとし本索引を作
成した。見出し語も原本の仮名のままとしたので、「くはし」「くらふ」などの
順序に注意されたい)

『譯文筌蹄』

キの部

○きく	聽聞聆聆可肯……………	5
○きはむ	極致窮究研基鞫鞫……………	2
○きゆ	消滅亡喪泯湮熄……………	3
○きよし	清澄淨潔白爽廉……………	1
○きる	截切斫剪斬……………	4

クの部

○くさる	腐朽……………	5
○くだく	碎摧挫折……………	3
○くだる	降下落墮墜隕類墮貶……………	7
○くつがへる	顛覆翻飄……………	6
○くづる	崩頽隕壞……………	4
○くはし	精詳審曲悉委……………	2
○くむ	輒斟酌挹汲掬杯……………	11
○くらし	暗昏昧晦暝幽杳冥濛濛昏瞶……………	1
○くらふ	食喫吃嚙嚼咀咬哺味飡……………	12
○くるしむ	苦毒困辱窘嗜……………	9
○くるふ	狂顛猖獗……………	10
○くろし	黒玄黦黔緇黓黓黓……………	8

ケの部

○けがる	汗穢褻瀆點浼塵穢……………	1
○けがる	汚穢注凹坳……………	3
○けはし	嶮阻峻峭……………	2
○ける	蹴蹶跌踢……………	4

コの部

○こころよし	快恹恹……………	5
○こたふ	答對報酬酢膺唯愈諾應肯頷……………	8
○ことなり	殊異別特他……………	2
○こながき	糝糝鯁……………	1
○このむ	好嗜熹樂善欲願冀覬希幸庶……………	7

○こぶ	請乞丐……………	9
○こぶ	媚阿諂調……………	6
○こゆ	肥腴豊腴……………	4
○こる	凝凍滯泥澀……………	3
サの部		
○さいはひ	富福……………	5
○さかし	黠狡猾賢佞……………	7
○さかふ	逆忤……………	3
○さかん	盛昌隆壯熾藹茂蕃殷阜榮……………	2
○さく	裂圻剖割劈擘綻析殺……………	4
○さぐる	探搜索度……………	9
○さげぶ	號叫嗚啼泣哭啞轉啞……………	13
○さげぐ	獻捧擎奉上……………	10
○ささふ	支拄撐攔遮障礙……………	11
○さす	指差刺插挾夾掖摺……………	12
○さとし	智哲睿敏慧穎聰……………	6
○さむ	覺寤醒……………	14
○さる	去違避除距屏遠……………	8
○さわがし	躁噪譟騷……………	1
シの部		
○しきり	頻荐切……………	5
○しく	布敷播席藉鋪及如若……………	8
○しげる	繁蕃茂稠滋……………	2
○しずか	閑靜靖恬寂寞寥闐舒徐謐……………	1

○したがふ	順從隨循率遵徇沿遜服尾……………	6
○したしむ	親睦好昵暱愛仁德澤化恩惠寵幸嬖慈友……………	12
○したふ	慕戀……………	11
○しづむ	沈湮湮渾鎮湧滄……………	7
○しのぶ	忍耐堪勝任……………	13
○しばしば	數屢……………	4
○しばらく	暫少須臾頃刻俄頃少頃之姑且……………	3
○しばむ	萎爾凋……………	9
○しめす	呈示似視見觀……………	16
○しわむ	嚶嚶……………	15
○しる	知識覺悟喻曉會領解了……………	14
○しろし	白素皎皚皓……………	10

『譯文箋諦』

キの部

1 ○きよし

清 澄 淨 潔 白 爽 廉 (二、廿五号裏)

【清】濁の反対なり。水のすむことなり。「きよし」とよめばとて、淨の義に非ず。「水清む」①「酒清む」②「天氣清む」③「琴清む」④「管絃清む」⑤「四海清む」⑥「月清む」⑦、皆「すむ」と譯してよく聞こえるなり。但し「風清」⑧、「すずし」と譯して通ず。されども涼の字よりは今少し前方なり。「涼風」⑨は夏秋に用いる。「清風」⑩は春夏秋ともに用いる。人の無欲なるを「清」という⑪も、「すずし」「す

「む」にては譯せられず、「きれいな」と譯して通ず。これらは和語漢語の合わぬ處なり。素間に「手足清」⑫とは、ひえることなり。又和語に、飢えるを「胸すむ」といい、事の完るを「すむ」といい、義理の了するを「すむ」という。この譯に混ざることなかれ。

- ① 『詩經』魏風・伐檀「河水清且漣漪、不稼不穡」。
- ② 『禮記』聘義「酒清、人渴而不敢飲也、肉乾、人飢而不敢食也」。
- ③ 王羲之『蘭亭序』「是日也、天朗氣清、惠風和暢」。
- ④ 李白『贈清漳明府姪聿』「琴清月當戶、人寂風入室」。
- ⑤ 孔德紹『觀太常奏新樂』「鈞天金石響、洞庭弦管清」。
- 曹唐『長安客舍敘邵陵舊宴、寄永州蕭使君五首』「葉水繁更漏促、桐花風軟管弦清」。

⑥ 唐太宗『詠風』「勞歌大風曲、威加四海清」。

⑦ 杜甫『吹笛』「吹笛秋山風月清、誰家巧作斷腸聲」。

⑧ 蘇軾『後赤壁賦』「有客無酒、有酒無客。月白風清、如此良夜何」。

⑨ 杜甫『秋雨歎三首』一「涼風蕭蕭吹汝急、恐汝得時難獨立」。

⑩ 『詩經』大雅・烝民「吉甫作誦、穆如清風」。

⑪ 『楚辭』招魂「朕幼清以廉潔兮、注「不求曰清、不受曰廉、不汗曰潔」。

⑫ 『素問』五藏生成論「得之寒濕、與疝同法、腰痛足清頭痛」、注「清、亦冷也」。

【澄】「すむ」「すます」とよむ。「水靜かにして清し」①と注せり。すみきりたることなり。「すます」とよむ時は、いする「うごかない、靜かにすることなり。皆靜の義を帯びる」。

① 『正字通』已集上「激、稱人切、音呈、水靜而清」、「澄、同激」。

【淨】「きよし」とよむ。穢の反對なり。和語の「きれい」なるなり。むさき、きた

なきの反なり。「淨人」①は宦官なり。陰根を去るゆえ、煩惱なき意なり。俗語に「乾淨」カンゼンというは、ものきれいきつぱとしたという意なり。「淨穢」②にかぎらず、ものちをさつぱとあけたことにも用いる。「淨頭」③は髪を剃ることなり。

① 葉夢得『避暑錄話』卷上「余力不能自爲、每求僧或淨人中一二成余誌、未能也」。

② 劉璠『雪賦』「何淨穢之可分、豈高卑之能擇」。

③ 『初刻拍案驚奇』卷三十四「這房頭有個未淨頭的小和尚、生得標緻異常」。

【潔】「いさぎよし」とよむ。清・淨の二義を兼ねる。穢の反對なり。和語に「いさぎよき」というは、いさむ意を帯びたるようなり、但し「きれいな」と見るべし。

【白】「しろき」というより、清潔の義に用いる①。

① 『易經』說卦「巽爲白」、疏「爲白、取其風吹去塵、故潔白也」。

【爽】「さはやか」とよむ。清明の義なり①。「爽塏」②は高明の地なり。「味爽」③は未明なり。「精爽」④「靈爽」⑤は精靈をいう。「俊爽」⑥「英爽」⑦「健爽」⑧「豪爽」⑨は、人の氣質豪氣ありて、からりとしたことなり。「爽を競ふ」⑩というは、雄を争うことなり。又老子に「五味は人の口をして爽はしむ」⑪「其の徳爽ならず」⑫、皆差忒の義なり。

① 『說文解字』「爽、明也」。

② 『正字通』已集中「爽塏、高明處也」。

③ 『左傳』昭公三年「初、景公欲更晏子之宅、曰、子之宅近市、湫隘囂塵、不可以居、請更諸爽塏者」。

④ 『書經』牧誓「時甲子昧爽、王朝至于商郊牧野」、注「昧、冥、爽、明也」、蔡傳「昧爽、將明未明之時也」。

⑤ 『左傳』昭公二十五年「心之精爽、是謂魂魄、魂魄去之、何以能久」。

- ⑤ 郭璞『江賦』《文選》卷十二「奇相得道而宅神、乃協靈爽於湘娥」。
- ⑥ 『晉書』列傳第五裴楷「楷風神高邁、容儀俊爽、博涉羣書、特精理義」。
- ⑦ 『晉書』列傳第十二王濟「少有逸才、風姿英爽、氣蓋一時」。
- ⑧ 『新唐書』列傳第一百二十八文藝下李華「華文辭綿麗、少宏傑氣、穎士健爽自肆、時謂不及穎士、而華自疑過之」。
- ⑨ 『晉書』列傳第六十八桓溫「溫豪爽有風概、姿貌甚偉、面有七星」。
- ⑩ 『左傳』昭公三年「而嬀將始昌、二惠競爽猶可」。
- ⑪ 『老子』十二章「五味令人口爽、馳騁田獵令人心發狂」。
- ⑫ 『詩經』小雅・南有嘉魚之什、蓼蕭「其德不爽、壽考不忘」。

【廉】「いさぎよし」とも、「きよし」ともよまねども、人の徳行の上にて欲なきことを「廉」という①。清潔の義に近きゆえ、ここに附す。「廉」は元來かどという字なり②。取捨の分別ありて、妄りにもをとらぬことを物のかどに況える。但しすみかどは「隅」なり、「角」なり、「廉」はよこかどなり。又「廉訪」③「廉察」④という語あり、尋ね問いて事情を察することなり。

- ① 『楚辭』招魂「朕幼清以廉潔兮、注「不求曰清、不受曰廉、不汙曰潔」。
- ② 『孟子』離婁下「孟子曰、可以取、可以無取、取傷廉」。
- ③ 『宋史』李大性列傳第一百五十四「會從官送北客、朝命因俾廉訪、具以實聞、遂罷戎帥」。
- ④ 『後漢書』第五鍾離宋寒列傳第三十一「永壽中、以司徒掾清詔使冀州、廉察災害」。

2〇きはむ
極致窮究研綦鞫鞫（三、三十七号）

【極】しごくの義なり。「屋極」①、「むなぎ」と注すれども、横たわれるむなぎに非ず、四方なる堂のむねの寶形なり②。故に「太極」③「皇極」④「極を立つ」⑤「南極」⑥「北極」⑦「民極」⑧など、しんばしらという義にとるべし。「太極」は一理をいう。「天地未だ開けず、混沌未だ分たざるを太極という」⑨こと、漢儒の陋見なり。「皇極」は、天子の位は天下のしんばしらなるゆえにいうなり。「極を立つ」はしんばしらを立てるなり。「南極」「北極」は天の南北の中心の處をいう。又「宸極」⑩「御極」⑪「紫極」⑫「丹極」⑬など、禁中の異名なり。「四極」⑭「八極」⑮は、四方八方のはてなり。老莊の「無極」⑯も、はてなきことをいう。「我をして此の極に至らしむ」⑰は、なりのはてなり。張良傳の「布衣の極」⑱は、平人の到下なり。「五福六極」⑲の極も、はての意なり。その外は多く「至極」⑳と見るべし。「きはむる」というも、しごくをきわめるなり。「極めて知る」などは随分するなり。

- ① 徐顯卿『皇極殿賦』「居有屋極、羣材附而大厦成」。
- ② 『說文解字』「極、棟也」、徐鍇注「極、屋脊之棟也、今人謂高及甚爲極、義出於此」。
- ③ 『易經』繫辭傳上「是故易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦」。
- ④ 『書經』洪範「次五、曰、建用皇極」、注「皇、大、極、中也」。
- ⑤ 杜甫『有事於南郊賦』「所以報本反始、所以慶長立極」。
- 唐高祖『令諸州舉送明經詔』「是以西膠東序、春誦夏弦、說禮敦詩、本仁祖義、建邦立極、咸必由之」。
- ⑥ 『呂氏春秋』本味「餘膾之南、南極之崖、有菜、其名曰嘉樹、其色若碧」。
- ⑦ 『淮南子』墜形訓「自北極、至于南極、二億二萬三千五百里七十五步」。
- ⑧ 『書經』君奭「乃悉命汝、作汝民極」。
- ⑨ 未詳。『易經』繫辭傳上「是故易有太極、是生兩儀」の正義に「太極、謂天地未分之前、元氣混而爲一、即是太初一也」。
- ⑩ 『晉書』志第七律曆中「昔者聖人擬辰極以運璿璣、揆天行而序景曜」。
- ⑪ 『新唐書』列傳第七十九李晟「昔我烈祖、乘乾坤蕩滌、掃隋季荒蕪、體元禦

極、作人父母。」

⑫『晉書』列傳第二十二阮种「方今海内之士、皆傾望休光、希心紫極、唯明主之所趣舍。」

⑬杜甫『寄劉峽州伯華使君四十韻』「翠虛梢鸚鵡、丹極上鷓鴣。」

⑭『爾雅』釋地「東至於泰遠、西至於邠國、南至於濮鈞、北至於祝栗、謂之四極」、郭注「皆四方極遠之國。」

⑮『淮南子』本經訓「含吐陰陽、伸曳四時、紀綱八極、經緯六合。」

⑯『老子』二十八章「常德不忒、復歸于無極。」

⑰『莊子』逍遙遊「大而无當、往而不返、吾驚怖其言、猶河漢而无極也。」

⑱『莊子』大宗師「吾思夫使我至此極者而弗得也。」

⑲『史記』留侯世家第二十五「今以三寸舌爲帝者師、封萬戶、位列侯、此布衣之極、於良足矣。」

⑲『書經』洪範「九、五福、一曰、壽、二曰、富、三曰、康寧、四曰、攸好德、五曰、考終命、六極、一曰、凶短折、二曰、疾、三曰、憂、四曰、貧、五曰、惡、六曰、弱。」

⑲『莊子』逍遙遊「天之蒼蒼、其正色邪、其遠而無所至極邪。」

【致】「極致」①と連用する時、しごとくなり。「中和を致す」②「知を致す」③「致喪」④、皆至極に至る意なり。又魏晉の間の語に、「致めて樂しむに足れり」⑤「致めて玩す可きなり」⑥などは甚の義なり。「いたす」とよむ時のことは「至」の部に見える。

①何休『春秋公羊傳序』「昔者孔子有云、吾志在春秋、行在孝經、此二學者、聖人之極致、治世之要務也。」

②『禮記』中庸「致中和、天地位焉、萬物育焉。」

③『禮記』大學「欲誠其意者、先致其知、致知在格物。」

④『禮記』檀弓上「服勤至死、致喪三年。」

⑤『三國志』王衛「劉傳傳第二十一」「元瑜書記翩翩、致足樂也。」

⑥『水經注』沅水「沅水又東歷三石澗、鼎足均時、秀若削成、其側茂行便娟、致可玩也。」

【窮】「きはむる」「きはまり」「きはまる」。和語の「つむる」「つまり」「つまる」に似たり。但し塞することをいうに非ず、ゆきづまる意なり。極に似て、「極」ははにていう、「窮」の字は先のつかえる意あるなり。「理を窮む」①というも、道理のこれより上はなきといふところまでせんぎしつまることをいうなり。「貧窮」②「陋窮」③「困窮」④「言窮る」⑤「智窮る」⑥「力窮る」⑦「多言は數しば窮る」⑧、皆つめることなり。「途窮」⑨というも、ゆきごまりへ行きつめて先へゆかれぬなり。「日の力を窮む」⑩も、一日の内、もはやこれより上は行かれぬというほどあるきつめるなり。「日は次に窮まり、月は紀に窮まる」⑪というも、臘月「陰曆十二月」のことにて、日月の行りのゆきつまることなり。但し「少有を貧と曰ひ、有る無きを窮と曰ふ」⑫も、貧のつまりなり。故に俗語には貧のことを「窮」という。正書にて「窮通」⑬「窮達」⑭と對用するは、貧賤を合わせ指して言ふ。

①『易經』說卦「和順於道德而理於義、窮理盡性以至乎命。」

②『禮記』月令「天子布德行惠、命有司、發倉廩、賜貧窮、振乏絕。」

③『孟子』公孫丑上「遺佚而不怨、阨窮而不憫。」

④『易經』需「剛健而不陷、其義不困窮矣。」

⑤陸機『文賦』『文選』卷十七「言窮者無隘、論達者唯曠。」

⑥韓愈『送窮文』「凡所以使吾面目可憎、語言無味者、皆子之志也。其名曰智窮。」

⑦杜甫『苦雨、奉寄隴西公、兼呈王徵士』「飯四五起、馮軒心力窮。」

⑧『老子』五章「多言數窮、不如守中。」

⑨顏延年『五君詠・阮步兵』『文選』卷二十一「物故不可論、途窮能無慟。」

⑩柳宗元『故殿中侍御史柳公墓表』「自少耽學、頗工爲文、既窮日力、又繼以

夜。

- ⑪ 『禮記』月令「是月也、日窮於次、月窮於紀、星回于天。」
- ⑫ 『荀子』大略「仁義禮善之於人也、辟之若貨財粟米之於家也、多有之者富、少有之者貧、至無有者窮。」
- ⑬ 『莊子』讓王「古之得道者、窮亦樂、通亦樂、所樂非窮通也。」
- ⑭ 『墨子』非儒下「窮達賞罰、幸否有極、人之知力、不能爲焉。」

【究】「きはむる」なり。至極の義に非ず、終りまで尋ね至る意なり。「究竟」①と使い、又「其の究め」②などというは、おんづめ「物事のゆきつくところ」という意なり。皆終りにかかる文字なり。「學究」③というは、經學の及第の名なり。「老學究」④は訓話の學ばかりにて、何の用にたため儒者をいう。「村學究」⑤は在郷學者なり。

- ① 『漢書』宣元六王傳第五十「承間進問五帝三王、究竟要道、卓爾非世俗之所知。」
 - ② 『易經』說卦「其究爲健、爲藩鮮。」
 - ③ 『新唐書』志第三十四選舉上「而明經之別、有五經、有三經、有二經、有學究一經、有三禮、有二傳、有史料。」
 - ④ 『正字通』午集下「俗儒識訓故、不能經世、曰老學究。」
 - ⑤ 宣鼎『南郭秀才』「昔有村學究、爲東人書聯、有老熊如鶴健之句。」
- 【研】「きはむ」。「理を研む」①など用いる。もと薬研にて物をおろすことなり②。おろしおろし至極細末にする意にて、みがききわめて細微に至ることなり。
- ① 王僧儒『臨海伏府君集序』「與君道合神遇、投分披衿、敷文研理、匪晨伊暮。」
 - ② 『六書故』「研、以椎摩物。」

【纂】古書に多し。「きはむる」「きはめて」とよむ。極致の義なり。

【鞠】「きはまる」とよむ。「鞠凶」①は至極の災なり。「鞠まりて茂草と爲る」②、きわまり盡るなり。又「きはむる」とよむ時、鞠と通ず。畢竟窮の字音轉じて、入聲になりたるものなり。

- ① 『詩經』節南山之什・節南山「昊天不備、降此鞠凶。」
- ② 『詩經』節南山之什・小弁「蹶蹶周道、鞠爲茂草。」

【鞠】「きはむる」とよむ。罪状を問いきわめるなり①。「獄を究む」②などと用いる究の字に似て、「究」は問うことに限らず、廣くせんぎをしきわめること、「鞠」は問う上にていうなり。

- ① 『說文解字』「鞠、窮理罪人也。」
- ② 『舊五代史』志九刑法志「凡居法吏、合究獄情。」

3〇きゆ

消滅 亡 喪 泯 湮 熄 (三、四十九号表)

【消】「きゆる」とよむ。「消滅」①「消亡」②と連用す。「消化」③はきえとけるなり。「金を消して水と爲す」④などということあり。「雪消る」⑤「凍消る」⑥「霧消る」⑦などと用いる。「消渴の病」⑧は、食物或いは水飲にかわきて、何ほどのみ食いしても、直ちにきえることくなり。又「閑を消す」⑨というは、なぐさみなり。但しひまなにこまりてするなぐさみなり。「日を消す」⑩というも、日長き時のなぐさみをいう。「暑を消す」⑪というも、暑さをばわすれる爲に何ぞすることなり。又俗語の助語に「もちゆ」とよむ。「何ぞ消いん」「消いず」の類なり。須の字の意なり。

- ① 『列子』楊朱第七「死則有臭腐消滅、是所同也。」
- ② 『詩經』衛風・氓・序「宣公之時、禮義消亡、淫風大行。」

③『周書』列傳第十五蘇綽傳「使百姓覺、中遷於善、邪僞之心、嗜慾二性潛以消化、而不知其所以然、此之謂化也」。

④『五行大義』論相生「金生水者、少陰之氣、潤澤流津、銷金亦爲水」。

⑤『元史』志第三下五行二「京師童謠云、一陣黃風一陣沙、千里萬里無人家、回頭雪消不堪看、三眼和尚弄瞎馬」。

⑥『勅健淨慈寺志』卷人住持一「戶外凍消春色動、四山渾作木龍吟」。

⑦『舊唐書』志十一音樂四「武舞作第五夷則角」「沙塵驚塞外、帷幄命嫖姚、七德干戈止、三邊雲霧消」。

⑧『史記』司馬相如列傳第五十七「相如口吃而善著書、常有消渴疾」。

⑨高啓『圍棋』「偶與消閑客、圍棋向竹林」。

⑩『宋史』列傳第一百一王巖叟傳「巖叟因侍講、奏曰、陛下退朝無事、不知何以消日、哲宗曰、看文字」。

⑪吳融『和韓致光侍郎無題三首十四韻』「珠佩元消暑、犀簪自辟塵、掩燈容燕宿、開鏡待雞晨」。

【滅】滅盡の義なり。「滅亡」①と連用す。もと火のきえることなり②。「めつする」という和語にてよし。「亡」の字はうしなう義なり。國をうしない、家をうしない、身をうしなうを「ほろぶる」といふ③。死してまた葬らぬ内を「死」といふ、葬りて後を「亡」といふ。「未亡人」④とは、夫死して後に妻の自稱なり。又亡の字去聲の時、「うしなふ」なり。官位を失い、家を失いて他國にゆくをいふ⑤。故に「亡人」⑥とは、出奔したる人をいふ。「逃亡」⑦「連亡」⑧は、かけおちものをいふなり。

①『書經』五子之歌「今失厥道、亂其紀綱、乃底滅亡」。

②『書經』盤庚上「若火之燎于原、不可嚮邇、其猶可撲滅」。

③『正字通』已集上「春秋滅國三十、毀其宗廟社稷曰滅」。

『康熙字典』に「周禮夏官大司馬、九伐之灋、外內亂、鳥獸行、則滅之、註

毀其宗廟社稷曰滅」とあるが、鄭注にはみあたらない。

④『左傳』莊公二十八年「今令尹不尋諸仇讎、而於未亡人之側、不亦異乎」、杜注「夫人既寡、自稱未亡人也」。

⑤『國語』晉語四「晉公子生十七年而亡、卿材三人從之、可謂賢矣」、韋昭注「亡、奔也」。

⑥『左傳』僖公九年「臣聞、亡人無黨、有黨必有讎」。

⑦『管子』輕重乙第八十一「今發徒隸而作之、則逃亡而不守」。

⑧『史記』秦始皇本紀第六「二十三年、發諸嘗通亡人、贅婿賈人、略取陸梁地」。

【喪】「も」の時は平聲なり、「うしなふ」の時は去聲なり。「家を喪ふ」①「國を喪ふ」②「位を喪ふ」③「財を喪ふ」④に皆用いる。

①『史記』孔子世家第十七「然自要以下不及禹三寸、纍纍若喪家之狗」。

②『國語』晉語一「且夫挾小鯁也、可以小戕、而不能喪國」。

③蔡邕『太傅胡廣碑』「自公寢疾、至于薨斃、參與嘗禱、列在喪位」。

④『太平廣記』狐九・咎規「我偶喪財產、今日窮厄失計」。

【泯】消・滅二字の義なり。消滅して迹なきことなり。

【湮】「きゆる」とよむ。「消湮」「湮滅」①と連用す。「字消す」②というは、字の形全くなくなることなり、「字湮す」③というは、きえてことのほか薄くなり、形さだかならぬをいふなり。

①『史記』游俠列傳第六十四「自秦以前、匹夫之俠、湮滅不見、余甚恨之」。

②『西陽雜俎』廣動植之二「烏賊、舊說名河伯度、事小吏、過大魚、輒放墨、方數尺、以混其身、江東人或取墨書契以脫人財物、書跡如淡墨、逾年字消、惟空紙耳」。

③錢謙益『題李伯元修楮家堡公記』「漆版摩娑字半湮、蟲絲鼠跡暗承塵」。

【熄】火のきえるなり①。又埋火をもいう①。

①『説文解字』「熄、畜火也。从火息聲。亦曰滅火。」

4〇きん

截 切 斫 剪 斬（後二、七号裏）

【截】たちきることなり①。刀などにてきることにてはなし。

①『説文解字』「截、斷也。」

【切】きりわり、きりやぶることなり①。

①『説文解字』「切、剗也。」「剗、切也。」

【斫】きつておとすなり①。「首を斫る」②「竹木を斫る」③など用いる。

①『説文解字』「斫、擊也。」

②『大乘蓮華寶達問答報應沙門品第一』「鐵床地獄、耕田地獄、斫首地獄。」

③『宋會要輯稿』食貨六十五免役二「本路州縣輒以採斫竹木、般運鐵炭及以和雇爲名」。

【剪】剪刀にてはさみきること。「たつ」とも用いる。それとはさみきる意なり。「剪彩花」の類に用いる。

【斬①】首をきることなり。斫の字と似たり。

①『説文解字』「斬、截也。」

5〇きん

聽 聞 听 聆 可 肯（後二、廿二号表）

【聽】聞とは違うなり。「聞は耳、聲を受くるなり。聽は耳、聲を待つなり」①と注せり。「耳、聲を受く」とは、きこえるなり、「耳、聲を待つ」とは、きこうと思いつきくなり。それゆえ聽の字は公事沙汰をきくにも用いる②。「政を聽く」③「雨を聽く」④など、皆氣を付けてきくなり。又いかにもと合點することを「聽」という⑤。和語の「ききいれた」という程のことなり。又「まかす」とよむも、それより轉用したるものなり。

①『字彙』未集「聞、耳受聲也。未集「聽、聆也、待也。從也。」

②『禮記』王制「司寇正刑明辟、以聽獄訟。」

③『左傳』昭公元年「君子有四時、朝以聽政、晝以訪問、夕以脩令、夜以安身。」

④韋應物『送顏司議使蜀訪圖書』「山館夜聽雨、秋猿獨叫群。」

⑤『釋名』釋姿容「聽、靜也、靜然後所聞審也。」

【聞】「耳、聲を受くるなり。聽は聞かず」というにて思量すべし。又「かぐ」とよむことあり。和語に「香を聞く」という辭あり。それと同じことなり。詩語に「暗香聞」①などと使う。又疏章に「以て聞す」②というは、上へ申し上ることなり。又「聲、天に聞ゆ」③は、聲の向うへきこえるなり。その時は音問、去聲なり。「令聞」④の時も同じ。

①王夫之『解舍梅（亦與官梅重取湊百題耳）』「被擁黃紬曉睡醺、蜃窗晴送暗香聞」。また唐詩には「暗聞香」という語もあり、その例としては沈佺期『夜遊』「管絃遙辨曲、羅綺暗聞香」などがある。

②『漢書』武帝紀第六「吏民有振救飢民免其扈者、俱舉以聞。」

③『詩經』小雅・鴻鴈之什・鶴鳴「鶴鳴于九臯、聲聞于天。」

④『書經』微子之命「爾惟踐修厥猷、舊有令聞。」

【听】聽の俗字なり。

【聆】聽の字と同意なり。

【可】【肯】二字とも「きく」とよむ。いかにもと合點することなり。「可」はよしとゆるす意なり①、「肯」は「うけがう」とよむゆえ、轉じてききいれることに用いる。耳にてきくにあらず、心に承知することなり。

①『書經』堯典「帝曰、吁囂訟、可乎」。

『廣韻』卷三「可、許可也」。

クの部

1〇くらし

暗 昏 昧 晦 暝 幽 杳 冥 蒙 濛 懵 瞽 瞽 (二、十四号表)

【暗】闇 同字なり。明の反對なり。日月・燭火・道理・心識のくらきに通用す。「暗」①というは、春過ぎ四月になりて、花皆落ち盡くして、綠陰ばかりになりたる時は、景氣くらきようなるをいう。「黒暗」②は犀角なり、「白暗」③は象牙なり。又「そらに」とよむ時は、その事を知らず、おのづから理に合うを「闇」(あん)に合ふ③という。「黙して契かなふ」と同意なり。「暗香」④は、花などのあるは見えずしてその香の聞えるをいう。「闇誦」⑤は書に對せずして、そらによむことなり。「背誦」⑥ともいう。俗語には「背」とばかりいう。皆暗と通用す。又「梁闇」⑦は喪屋なり。「諒陰」⑧にも作る。「亮陰」⑨ともかく。この時は暗の字は用いず。

①温庭筠『寒食日作』「紅深綠暗径相交、抱暖含芳披紫袍」。

②『西陽雜俎』廣動植之一「故波斯謂牙爲白暗、犀爲黒暗」。

③『晉書』列傳第十三山濤「于時咸以濤不學孫吳、而闇與之合」。

④羊士諤『郡中卽事三首』二「紅衣落盡暗香殘、葉上秋光白露寒」。

⑤『三國志』魏書・王衛「劉傳傳「初、粲與人共行、讀道邊碑、人問曰、卿能闇誦乎。曰、能。因使背而誦之、不失一字」。

⑥元好問『中州集』劉昂霄「予識景玄於太原、人有言是家讀廣記半月能背誦者、予未之信」。

⑦『尚書大傳』卷四說命「書曰、高宗梁闇、三年不言。何爲梁闇也、傳曰、高宗居凶廬、三年不言」。

⑧『論語』憲問「子張曰、書云、高宗諒陰、三年不言」。

⑨『書經』無逸「高宗作其卽位、乃或亮陰、三年不言」。

【昏】「ゆうべ」なり、「くるる」なり。轉用して、「くらし」とよむ。暗と同義なり。明の反對なり。但し「闇」はやみ、「昏」はくれるなるゆえ、昏は闇より義輕きかなれば、ひろく用いるなり。「黄昏」①は戌の時をいう。林逋が「暗香浮動月黄昏」②というを、葦航紀談に「戌の時をいうに非ず。水清淺と對するにより、只た夜深けて、月色黄に昏くなりたる時をいう」③といえるは鑿說なり。やはり戌の時なり。「清淺」と對したるは、清の字に彩色明に通じる意あるゆえ、字面を以て借對にするなり。又「昏姻」④は日のくれ時を用いる故、「昏姻」という。後、女傍に従いて婚に作る。

①『楚辭』離騷「日黄昏以爲期兮、羌中道而改路」。

吾邱衍『閒居錄』「堯典定中星以戌爲昏、世俗稱黄昏戌時也、是」。

②林逋『山園小梅』「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黄昏」。

③『葦航紀談』「黄昏對清淺、乃兩字非一字、月黄昏、謂夜深香動、月爲之黃而昏、非汎言人定時也」。

④『正字通』辰集上「昏姻、娶妻之禮、以昏爲期、取陽復陰來之義、別作婚」。

【昧】「くらし」とよむ。明の反対なり。「暗昧」①「昏昧」②「幽昧」③「曖昧」④「愚昧」⑤などと用いる。「草昧」⑥は、洪荒の時、又は國初の時、亂の未だ定まらず、名位政刑の明らかならぬ時をいう。「草」ははしめる意、「昧」はくらき意ゆえなり。「曖昧」⑦は、事のわけの分明ならぬをいう。書經に「昧昧として我之を思ふ」⑧とは、默默として思ふ意なり。又「虚靈不昧」⑨「不昧因果」⑩などは、迷わぬ意なり。又佛語に「三昧」⑪ということあり、「三摩地」⑫ともいう。「正定」⑬と翻す。それを轉用して、詩文諸藝に「三昧」というは、悟り得たる妙處をいう。「詩三昧」⑭「草書三昧」⑮などなり。然るを或る人の文に「詩は聖人遊戲三昧の書なり」⑯とかけり、詩經のことをいへり、意義をなさず、専ら和語を用いたるなるべし。「味爽」⑰は未明をいう。「習爽」⑱ともかけり。

- ①『國語』鄭語「今王棄高明昭顯、而好讒慝暗昧、惡角犀豐盈、而近頑童窮固。」
- ②左思『呉都賦』《『文選』卷五》「歎霧滄溟、雲蒸昏昧。」
- ③屈原『楚辭』離騷「惟黨人之偷樂兮、路幽昧以險隘。」
- ④『晉書』列傳第三十八紀瞻「太極者、蓋謂混沌之時、曖昧未分。」
- ⑤郭璞『虻蟬賦』《『藝文類聚』卷九十七引》「伊斯蝨之愚昧、乃先識而似哲。」
- ⑥『易經』屯「雷雨之動滿盈、天造草昧、宜建侯而不寧。」
- ⑦『後漢書』列傳第五十下蔡邕「若公子所謂觀曖昧之利、而忘昭哲之害。」
- ⑧『書經』秦誓「我皇多有之、昧昧我思之。」
- ⑨『禮記』大學「大學之道、在明明德、在親民、在止於至善、『大學章句』「明德者、人之所得乎天、而虛靈不昧、以具衆理而應萬事者也。」
- ⑩『圓悟佛果禪師語錄』卷第十九・頌古下「丈云、汝問我與汝道。老人遂問、大修行底人還落因果也無。丈云、不昧因果。老人遂悟。」
- ⑪李肇『翰墨志』「翰苑學士每下直出門、相虐謂之小三昧、銀臺乘馬、謂之大三昧、如釋氏之去纏縛而自在也。」
- ⑫『大智度論』卷七「何等爲三昧。善心一處住不動、是名三昧。」
- ⑬『楞嚴經』卷六「彼佛教我、從聞思脩、入三摩地。」

⑬「正定」は迷いのない境地のこと。『慧遠大乘義章』卷十三「心住一緣、離於散動、故名爲定。言三昧者、是外國語。此名正定。定如前釋、離於邪亂、故說爲正。」

⑭許有壬『題林和靖工部帖』「梅花已入詩三昧、工部今如魯兩生。」

⑮『六藝之一錄』卷三百四十三歷朝書譜「又云、紹聖甲戌在黃龍山中、忽得草書三昧、晚年之作、因與少時異矣。」

『唐國史補』卷中「長沙僧懷素、好草書、自言得草聖三昧。」

⑯伊藤仁齋『詩說』「詩の一經は聖人の遊戲三昧の書なり。」

⑰『書經』太甲上「先王味爽不顯、坐以待旦」、正義「昧は晦冥、爽は未明、謂夜向晨也。」

⑱『書經』武成「甲子昧爽、受率其旅若林、會于牧野。」

⑲『漢書』司馬相如傳第二十七下「使疏逖不聞、習爽闇昧得耀乎光明、以偃甲兵於此。」

【晦】「くらし」とよむ。明の反対なり。つもこり「つごもり」という字なるより轉用して、大形昏・暗・昧と同じことなり。但しくらきの甚しきに用いる。明の字、顯の字の反対なり。但し景象の上にも、愚昧の上のことにも用いず、くらましかくす意に多く用いる。易に「晦きに嚮て入りて宴息す」①というは、日くれては休息することなり。詩に「遵養時晦す」②というより、「遵晦」③「用晦」④「時晦」⑤「自晦」⑥「韜晦」⑦、皆つみくらます意なり。

- ①『易經』隨「君子以嚮晦入宴息。」
- ②『詩經』周頌・閔予小子之什・酌「於鑠王師、遵養時晦。」
- ③明・唐順之『書王氏傳家錄後』「豈其翊贊于遵晦之日者、不及乎純熙大介之會。」
- ④『易經』明夷「明入地中、明夷、君子以莅衆、用晦而明。」
- ⑤『舊唐書』列傳第七十九韓滉「尤工書、兼善丹青、以繪事非急務、自晦其能、

未嘗傳之。

⑥『舊唐書』本紀第十八下宣宗「曆太和、會昌朝、愈事韜晦、群巨遊處、未嘗有言」。

【冥】【暝】同字なり。されども後世分用す。「青冥」①は天なり。「玄冥」②は北方水徳の神なり、冬の神なり。冬の異名にも用いる③。「冥冥」④はくらき貌なり。「北冥」⑤は北海なり。或いは溟に作る。「焦冥」⑥は、極小の虫にて、蚊の睫まげに集まる。一に螟に作る。「大冥」⑦は大虚なり。「紫冥」⑧も天なり。「昊冥」⑨、蒼冥⑨、皆天なり。「杳冥」⑩、一に「窈冥」⑪に作る、又「宵冥」⑫に作る。太虚をもいい、又道理にても遠く遙かにてさだかに見えぬ意をいう。「渺冥」⑬も同意なり。「鴻飛びて冥冥たり」⑭というも同意なり。「沈冥」⑮は人の自ら名をくらまして居ることなり。又「幽冥の中」⑯「冥冥の中」⑰など、人の知らずはからぬ處をいう。これより佛書に「冥途」⑱などの語あり。畢竟冥の字の意くらくして、はかりしられぬ意なり。これらには暝の字をかかず、専ら平聲なり。「晦冥し」⑲「晝冥し」⑳など、暝と通用するとき、平去兩聲なり。

①『楚辭』九章・悲回風「據青冥而攄虹兮、遂儻忽而捫天」。

②『禮記』月令「孟冬之月、日在尾、昏危中、旦七星中、其日壬癸、其帝顓頊、其神玄冥」。

③章莊『咏梅詩』「不隨沃艷開、獨媚玄冥節」。

④『詩經』小雅・谷風之什・無將大車「無將大車、維塵冥冥」、集傳「冥冥、昏晦也」。

⑤『莊子』逍遙遊「北冥有魚、其名為鯢」。

⑥『晏子春秋』外篇第八「東海有蟲、巢於蟲睫、再乳再飛而蟲不爲驚、臣嬰不知其名、而東海漁者命曰焦冥」。

⑦『淮南子』本經訓「而萬民莫相侵欺暴虐、猶在于混冥之中」、注「混、大也、大冥之中、謂道也」。

⑧李白『與諸公送陳郎將歸衡陽』「衡山蒼蒼入紫冥、下看南極老人星」。

⑨文天祥『正氣歌』「於人曰浩然、沛乎塞蒼冥」。

⑩『楚辭』賈誼・惜誓「馳驚於杳冥之中兮、休息虛崑崙之墟」。

⑪『淮南子』覽冥訓「深微窈冥、難以知論、不可以辯說也」。

⑫『新語』資質「及隘於山阪之阻、隔於九岘之隄、仆於鬼隼之山、頓於宵冥之溪」。

⑬杜甫『橋陵詩三十韻因呈縣內諸官』「永與奧區固、川原紛眇冥」。

⑭『法言』問明「治則見、亂則隱、鴻飛冥冥、七人何慕焉」。

⑮『法言』問明「蜀莊沈冥、蜀莊之才之珍也」。

⑯『晉書』列傳第三十九周顓「吾雖不殺伯仁、伯仁由我而死。幽冥之中、負此良友」。

⑰『宋史』志第六十禮十吉禮十一「太祖兩朝威靈、相與校強弱于冥冥之中」。

⑱徐霖『綉橋記』別目勸學「我在冥途回轉、尚兀自心頭火燃」。

⑲『史記』龜策列傳第六十八「飄風日起、正晝晦冥、日月並蝕、滅息無光」。

⑳『晉書』列傳第六十四隱逸夏統「合水嗽天、雲雨響集、叱咤謹呼、雷電書冥、集氣長嘯、沙塵煙起」。

【幽】「かすかなり」という訓、沙汰の限りなり。世俗多くはこの訓に迷わされる。深く遠くて人しらぬ意あり、くらき意を主として用いるあり、深き意を主として用いるあり、人しらぬ意を主として用いるあり、遠き意を主として用いるあり。「光六幽を照す」①とは、上下四方の遠處までをも照らすなり。「威徳、八幽に洞る」②など、遠き意を主とせり。「朝陽再びは盛んならず、白日忽ち西に幽なり」③「皇明、幽を燭す」④、暗き意を主とせり。「幽明」⑤というは、人を「明」といい、鬼神を「幽」という。暗くて人しらぬ意なり。「生涯一朝盡き、寂寞として夜臺幽なり」⑥、「夜臺」は墳墓なり。これも幽明の幽の意なり。「禮樂光輝盛んなり、山河氣象幽なり」⑦「未だ銀管の裡に値はず、寧ぞ玉殿の幽に移らんや」⑧、深き意を主とせり。

易の「幽人」⑨は隠者をいう。人知らぬ意を主とす。「禪房、花木深し、竹徑、幽處に通ず」⑩「野寺、江天濶く、山扉、花竹幽なり」⑪「竹細く、野池幽なり」⑫「清江一曲、村を抱いて流る、長夏、江村、事事幽なり」⑬「一鳥鳴かず、山更に幽なり」⑭「伐木丁丁として山更に幽なり」⑮、皆深遠にして人知らぬ趣をいう。又「横ざまに口語を被て、身、北闕に幽る」⑯「文王、姜里に拘はれて、拘幽操を作る」⑰、琴の曲なり。これらは囚の義なり。

①『後漢書』肅宗孝章帝紀第三「朕聞、明君之德、啓迪鴻化、緝熙康乂、光照六幽」。

②曹植『聖皇篇』「九州咸賓服、威德洞八幽」。

③阮籍『詠懷詩八十二首』三十二「朝陽不再盛、白日忽西幽。去此若俯仰、如何似九秋」。

④班固『東都賦』《『文選』卷一》「考聲教之所被、散皇明以燭幽」。

⑤『易經』繫辭上「仰以觀于天文、俯以察于地理、是故知幽明之故」。

『書經』舜典「三載考績、三考黜陟幽明」、注「黜退其幽者、升進其明者」。

⑥儲光羲『陸著作挽歌』「明道俟良佐、惟賢初薄遊、生涯一朝盡、寂寞夜臺幽」。

⑦高適『奉酬睢陽李太守』「禮樂光輝盛、山河氣象幽」。

⑧李嶠『桂』「未殖銀宮裏、寧移玉殿幽、枝生無限月、花滿自然秋」。

⑨『易經』履「九二、履道坦坦、幽人貞吉」。

⑩常建『題破山寺後禪院』「清晨入古寺、初日照高林、竹逕通幽處、禪房花木深」。

⑪杜甫『遊修覺寺』「野寺江天豁、山扉花竹幽、詩應有神助、吾得及春遊」。

⑫杜甫『上牛頭寺』「花濃春寺靜、竹細野池幽」。

⑬杜甫『江村』「清江一曲抱村流、長夏江村事事幽」。

⑭王安石『鍾山即事』「茅簷相對坐終日、一鳥不鳴山更幽」。

⑮杜甫『題張氏隱居二首』一「春山無伴獨相求、伐木丁丁山更幽」。

⑯楊惲『報孫會宗書』「懷祿貪執、不能自退、遭遇變故、橫破口語、身幽北闕、

妻子滿獄」。

⑰『琴操』卷上拘幽操「拘幽操者、文王拘於姜里而作」。

【杳】遠くて深く暗き意を兼ねる。又寂寞の意味もあり。「杳冥」①「杳渺」②「杳杳」③と連用す。窈の字、宵の字、通用す。但し「窈窕」の時は通用せず、深遠の貌なり④。「窈窕として山道深し」⑤「窈窕たり九重の闈」⑥「煙は生ず、窈窕の深きに」⑦「既に窈窕として壑を尋ぬ」⑧、皆是れなり。詩の「窈窕たる淑女」⑨を、王肅が注に「善心を窈と曰ひ、善容を窕と曰ふ」⑩といえるは、誠に牽強の説なるべし。深遠の義より轉用して、上臆のものごとはしたならず、奥ゆかしき體をいえるなり。故に「幽閒貞靜の貌」⑨とも注せり。又女徳に限らず、古樂府焦仲卿が妻の詩に「窈窕として世に雙無し」⑪といえるは男徳をいへり。

①傳毅『舞賦』《『文選』卷十七》「脩儀操以顯志兮、獨馳思乎杳冥」。

②『史記』司馬相如列傳第五十七「紅杏渺以眩澹兮、森風涌而雲浮」。

③王逸『九思』憫上「意道遙兮欲歸、衆穢盛兮杳杳」。

④『說文解字』窈、深遠也」。

⑤曹摅『贈石荊州詩』「轆軻石行難、窈窕山道深」。

⑥喬知之『從軍行』「窈窕九重闈、寂寞十年啼」。

⑦杜甫『長安雜題長句六首』二「煙生窈窕深東第、輪撼流蘇下北宮」。

⑧陶潛『歸去來辭』《『文選』卷四十五》「既窈窕以尋壑、亦崎嶇而經丘」。

⑨『詩經』周南・關雎「窈窕淑女、君子好逑」、毛傳「言后妃有關雎之德、是幽閒貞專之善女、宜爲君子之好匹」。

⑩『詩經』大序「哀窈窕、王肅注《『經典釋文』引》「善心曰窈、善容曰窕」。

⑪『古詩爲焦仲卿妻作』「云有第三郎、窈窕世無雙」。

【蒙】「くらし」とよむ、「かふる」[「くむ」]とよむ。草木など上より生じけり、うち掩おほいてくらき意なり。「蒙を衝く」①とは、草木のしげりて路なき處をつきわけ

て行くことなり。「愚蒙」②「昏蒙」③などと用いる。「雨氣蒙たり」④「煙雨蒙たり」⑤、皆和語にいうもうもくとくらき意なり。轉用して「童蒙」⑥と用いる。童子ははまだ知恵ひらけぬゆえいなり。蒙の一字にても童子になる⑦。無知の意を含みて用いるなり。

①王褒『四子講德論』(文選)卷五十二「衝蒙涉田而能致遠未若遵塗之疾也」、注「向日、衝蒙、謂衝突蒙籠也」。

②『漢書』公孫劉田王楊蔡陳鄭傳第三十六「足下哀其愚蒙賜書、教督以所不及、殷勤甚厚」。

③韓愈『獨孤申叔哀辭』「衆萬之生、誰非天耶、明昭昏蒙、誰使然邪」。

④貫休『別盧使君歸東陽二首』一「雨氣蒙蒙草滿庭、式微吟劇更誰聽」。

⑤高駢『宴犒蕃軍有感』「蜀地恩留馬嵬哭、煙雨蒙蒙春草綠」。

⑥『周易』蒙「亨、匪我求、童蒙求我」。

⑦『周易』序卦「物生必蒙、故受之以蒙」、鄭注「蒙、幼少之貌」。

【濛】蒙と通用す。「雨濛」①「濛陰」②「濛濛」③「煙雨濛たり」④「微濛」⑤「溟濛」⑥などなり。「かする」「かされる」とよまず、童蒙に用いず。但しくらき貌なり。形容字なり。

①『詩經』幽風・東山「我來自東、零雨其濛」。

②王僧孺『從子永寧令誄』「歡無一緒、悲有萬端、濛陰遽戢、扶景易殘」。

③盧綸『江春望三首』二「簫管曲長吹未盡、花南水北雨濛濛」。

④蘇軾『虔州八境圖八首』六「卻從塵外望塵中、無限樓臺煙雨濛」。

⑤『子夜歌四十二首』三十二「驚風急素柯、白日漸微濛」。

⑥『隋書』列傳第二十二盧思道從父兄昌衡「出島嶼之懸邈、犯霜露之溟濛、驚結魚之密網、畏落雁之虛弓」。

【懵】無知の貌なり①。

①『說文解字』「懵不明也」。

【瞽】悶なり。心のもたえくらむなり。

【瞶】目のまいて、心のくらむなり。

2〇くはし

精 詳 審 曲 悉 委 (二、三十一号表)

【精】しらげ米よね「精白した米」という字なり。「精鑿」①「精粲」②など、是れなり。故に「くはしし」とよむ時、「精細」③「精詳」④と連用すれども、吟味をつめて、細かに念の入れたることなり。詳・細の字義と少しく異なり。故に「精確」⑤「精妙」⑥などと用いる。又ものきつすいなることに用いる。故に「精粹」⑦「純精」⑧などと用いる。又ものせいぶんをいう。「天地、精を含み、萬物化生す」⑨「月は陰精、日は陽精」⑩「劍の精」⑪「墨の精」⑫「梅の精」⑬「花の精」⑭など。又これより轉用して、俗語に「成精的」シゲイテといえるは、ものの年月を経てはげものになりたることなり。「狐狸精」⑮「野狐精」⑯、皆はげものなり。「精怪」⑰とも使うなり。又「精神」⑱「精爽」⑲「精靈」⑳、皆たましいなり。又「精神爽ならず」㉑などは、氣持ちのことなり。又「有花無雪不精神」㉒というは、しやうねのあることを「精神」といい、性ねのなきことを「不精神」というなり。又「腎精」㉓なり。醫書にいえる「精神」㉔は、腎精心神なり。又「圓精」㉕は天の異名なり。又「精を勵ます」㉖は精力なり。「精金」㉗は、よく鍛きたえつめてきつすいなるかねなり。しらげ米の意なり。又「目精」㉘はひとみなり。晴の字同じ㉙。

①杜甫『行官張望補稻畦水歸』「秋菰成黑米、精鑿傳白粲」

②『正字通』未集上「米之美者曰精粲」。

③『三國志』吳書・是儀胡綜傳第十七「服不精細、食不重膳、拯贍貧困、家無

- 儲畜。
- ④『後漢書』寶融列傳第十三「融小心精詳，遂決策東向」。
- ⑤江總『攝山棲霞寺碑』「慧振法師，志業該練，心力精確」。
- ⑥謝靈運『擬魏太子鄴中集詩・平原侯植』(『文選』卷三十)「衆寶悉精妙，清辭灑蘭藻」。
- ⑦『漢書』刑法志第三「夫人宵天地之貌，懷五常之性，聰明精粹，有生之最靈者也」。
- ⑧班固『白雉詩』(『文選』卷二)「嘉祥阜分集皇都，發皓羽兮奮翹英，容絜朗兮於純精」。
- ⑨『列子』天瑞「清輕者上爲天，濁重者下爲地，沖和氣者爲人，故天地含精，萬物化生」。
- ⑩『顏氏家訓』歸心「天爲積氣，地爲積塊，日爲陽精，月爲陰精，星爲萬物之精」。
- ⑪『拾遺記』卷十昆吾山「至越王勾踐，使工人以白馬白牛祠昆吾之神，採金鑄之，以成八劍之精」。
- ⑫『陶家瓶餘事』「唐明皇御案墨曰龍香劑。一日見墨上有小道士，如蠅而行，上叱之，即呼萬歲曰，小臣即墨之精，墨松之使者也」。
- ⑬曹鄴『梅妃傳』「後上與妃鬪茶，顧謂諸王，戲曰，此梅精也。吹白玉笛，作驚鴻舞，一座光輝」。
- ⑭『閱微草堂筆記』卷八如是我聞二「童曰公勿怖，我實杏花之精也」。
- ⑮『紅樓夢』第七回「唱戲的女孩子，自然更是狐狸精了」。
- ⑯『景德傳燈錄』慧忠禪師「師叱曰，遮野狐精，他心通在什麼處」。
- ⑰岑參『楊雄草玄臺』「精怪喜無人，睚眦藏老樹」。
- ⑱『莊子』刻意「精神四達並流，無所不極，上際於天，下蟠於地」。
- ⑲『左傳』昭公七年「子產曰，……用物精多，則魂魄強，是以有精爽，至於神明」。

- ⑳左思『吳都賦』(『文選』卷五)「舜禹游焉，沒齒而忘歸，精靈留其山河，翫其奇麗也」。
- ㉑『包公案』第一百則「夫婦倦坐方丈，文煥忽覺，精神不爽，隱几而臥」。
- ㉒方岳『雪梅詩』「有梅無雪不精神，有雪無詩俗了人」。
- ㉓『腎精』は腎の中に貯蔵されている精のこと。『西山群仙會真記』卷三補精「太上玄鏡曰，心炁在腎，腎自生精，腎精不滿，神炁減少」。
- ㉔李光地『榕村集』卷二「腎主精，心主神，肝主血，肺主氣，脾主肉。精神者受命之原也」。
- ㉕『舊唐書』列傳第一・肅宗章敬皇后吳氏「伏惟先太后，圓精挺質，方祇稟秀」。
- ㉖呂溫『張荊州畫像贊并序』「開元初，天子新出艱難，久憤荒政，樂與羣下，勵精致理」。
- ㉗『後漢書』烏桓鮮卑列傳第八十「加以關塞不嚴，禁網多漏，精金良鐵，皆爲賊有」。
- ㉘宋玉『高唐賦』(『文選』卷十九)「玄木冬榮，煌煌燦燦，奪人之目精」。
- 『世說新語』巧藝「顧長康畫人，或數年不點目精」。
- ㉙『正字通』未集上「目中黑粒有光者亦精，今通作睛」。
- 【詳】「つまびらかにす」と訓ず。くわしきことなり。略の反対なり。又「いつはるとよむ時，佯の字と通用す①。各別のことなり」。
- ①『史記』殷本紀第三「箕子懼，乃詳狂爲奴，紂又囚之」。
- 【審】「つまびらかにす」「あきらかななり」とよむ。詳の字と少しく異なり，とくと念を入れ，たしかにすることなり。故に「つまびらかにす」とよむなり。書經の説命に「乃ち厥の象を審にす」①，傳説が形象をたしかにするなり。莊子に「魯君，人をして幣を致さしむ。顔闔曰く，恐らくは聽者の謬りて使者の罪を遺んことを，之を審にせんには若かず」②，其を尋ねたまうは使者のききちがいなるべし，歸り

てたしかにきき直したまえという意なり。後漢の范式が傳に「二年の別れ、千里言を約す、何ぞ相信するの審なる」③、何とてこれほどたしかに信するぞという意なり。唐書の元澹が傳に「局に當る者は迷ひ、旁觀する者は審かなり」④、これも碁の相手になればうろたえ、わきより觀ればたしかにて迷わぬという意なり。書東の返事に「茲に審にす、起居清勝なることを」⑤、御書中にて御息災をたしかに知つたという詞にて、使いかたはただうけたまわるといふ意に用いるなり。この類皆詳の字を用いず、見る可し、詳・審義殊なることを、このようなる處、毫釐の差なり。世人の書を觀るは、皆隔靴搔痒クヒイサウヤなること、この類なり。又射法に「弓を握ること審固」⑥とあり。又「審定」⑦とも連用す。皆たしかなる意なり。

①『書經』說命上「乃審厥象、俾以形旁求于天下」。

②『莊子』讓王「魯君聞顏闔得道之人也、使人以幣先焉。……顏闔對曰、恐聽者謬而遺使者罪、不若審之」。

③『後漢書』獨行列傳「二年之別、千里結言爾、何相信之審邪」。

④『新唐書』列傳第一百二十五儒學下元行沖「當局稱迷、傍觀必審、何所爲疑而不申列」。

⑤蘇軾『與程懿叔二首』「方欲奉書、使至辱教字、且審起居清勝、懿叔才地治

狀」。

⑥『禮記』射義「故心平體正、持弓矢審固、持弓矢審固、則射中矣」。

⑦『史記』張儀列傳第十「故願大王審定計議、且賜骸骨辟魏」。

【曲】「くはしし」「つまびらか」「ひとつひとつ」と訓ず。委の字と同じ意なり。

【悉】「つまびらかなり」「つまびらかにす」とよむ。「ことごとく」という字ゆえ、一一のこまざるごととなり。

【委】「くはしし」とよむ。委曲の義なり。元來「みなまた」とよむ字なり。流れの

曲りめ、よどみなり。入りまかりたる處までのこさぬ意より用いたるなり。

3〇くたく

碎 摧 挫 折 (三、四十六号表)

【碎】「くだくる」「くたく」。訓の如し。「細かに破るるなり」①という注好し。「瑣碎」②「零碎」③などは、くだくだしきことなり。「苛碎」④は政のささいなることなり。

①『廣韻』卷四「碎、細破也」。

②孟郊・韓愈『城南聯句』「竹影金瑣碎、泉音玉琤瑒」。

③白居易『題州北路傍老柳樹』「雪花零碎逐年減、煙葉稀疎隨分新」。

④『後漢書』李翟應霍爰徐列傳第二十八「歲餘、上疏以爲朝政苛碎、違永平、建初故事」。

【摧】竹木、又は家、又は器などを、くだきひしぐことなり。故に「摧破」①「摧折」②「摧損」③などと連用す。人の氣力心志の上に用いては、折れることなり。

①『後漢書』伏侯宋蔡馮趙牟韋列傳第十六「大彤、高胡望旗消靡、鐵脛、五校莫不摧破」。

②『史記』袁盎鼂錯列傳第四十一「陛下素驕淮南王、弗稍禁、以至此今又暴摧折之」。

③『太平廣記』神二十三・鍾離王祠「我鍾離王也。舊有廟在下流十餘里。因水

摧損。今像派流而止」。

【挫】「とりひしぐ」とよむ。くじく、くじけることなり。醫書に「挫閃」①という

は、くじき引きちがえのことなり。「閃」の字ははぶれることなり、骨のつがいはぶれる意にて連用す。「挫折」②「摧挫」③などと連用す。

【挫】「とりひしぐ」とよむ。くじく、くじけることなり。醫書に「挫閃」①というは、くじき引きちがえのことなり。「閃」の字ははぶれることなり、骨のつがいはぶれる意にて連用す。「挫折」②「摧挫」③などと連用す。

- ① 『鍼灸聚英』玉龍賦「當心傳之玄要、究手法之疾徐、或值挫困疼痛之不定」。
- ② 『後漢書』馮岑賈列傳第七「今偏城獲全、虜兵挫折、使耿定之屬、復念君臣之義」。
- ③ 『後漢書』馮岑賈列傳第七「其後蜀復數遣將開出、異輒摧挫之」。

【折】訓のごとし。「曲折」①は委曲なり。「九折」②は路の九曲あるなり。「つづらをり」とよむ。「面折」③は人を覲面に責めることなり。「磬折」④は腰を折ることなり。磬の形の如しとなり。「夭折」⑤はわかじになり。凶・短・折の差別、はむ 内はむに死するを「凶」という、冠せぬ内に死するを「短」という、婚せぬ内に死するを「折」という⑥。「片言、獄を折む」⑦とは、一言にて公事をさばくことなり。この時はものを一つに折ることく、是非を判断することをいえり。

- ① 『史記』魏其武安侯列傳第四十七「夫創少瘳、又復請將軍曰、吾益知吳壁中曲折、請復往」。
- ② 『淮南子』覽冥訓「河九折注於海而流不絕者、崑崙之輪也」。
- ③ 『史記』酷吏列傳第六十二「郅都者、楊人也、以郎事孝文帝。孝景時、都爲中郎將、敢直諫、面折大臣於朝」。
- ④ 『禮記』曲禮下「立則磬折垂佩。主佩倚、則臣佩垂。主佩垂、則臣佩委」。
- ⑤ 『列子』力命「怨夭折者、不知命者也」。
- ⑥ 『書經』洪範「六極、一曰、凶、短、折、正義「鄭玄以爲凶短折、皆是夭枉之名、未卽曰凶、未冠曰短、未婚曰折」。
- ⑦ 『論語』顏淵「子曰、片言可以折獄者、其由也與、子路無宿諾」。

4〇〇くづる

崩 頽 隕 壞 (三三、四十七号裏)

【崩】高き山など、又巖岸などのくづれ落ちることなり①。故に天子の死を「崩」といふ。

という②。

- ① 『說文解字』「崩、山壞也」。
- ② 『禮記』曲禮下「天子死曰崩、諸侯曰薨、大夫曰卒、士曰不祿、庶人曰死」。
- 『春秋』隱公三年「三月、庚辰、天王崩」、『穀梁傳』「高曰崩、厚曰崩、尊曰崩、天子之崩、以尊也」。

【頽】【隕】同字なり。下墜の義ゆえ、「くづる」とよむ。「日西頽」①、おちるなり。「虺隕」②、馬の疲れて病むなり。「摧頽」③はうなだれたる貌なり。「頽然として酔ふ」④なども、酔いたる貌の威儀も廢れたる體なり。

- ① 潘岳『寡婦賦』《文選》卷十六「四節流兮忽代序、歲云暮兮日西頽」。
- ② 『詩經』周南・卷耳「陟彼崔嵬、我馬虺隕」。
- ③ 『北史』列傳第七十一文苑・荀濟「自傷年幾摧頽、恐功名不立」。
- ④ 柳宗元『始得西山宴游記』「引觴滿酌、頽然就醉、不知日之入」。

【壞】くづれ、やぶれることなり。

5〇〇くさる

腐 朽 (三三、四十八号裏)

【腐】【朽】二字同義なり。その内、「腐」はくさりてたわいなき意あり、肉に従う字ゆえなり。「朽」は木に従う字ゆえ、年久しくてくちたる意あり。「腐儒」①と使い、老人の謙退し「老朽」②といえる類、見るべし。文章の評に「庸腐」③ということあり。「庸」はめづらしきことなきことなり、「腐」は人の使いふるして精神なき語をいう。

- ① 『漢書』韓彭英盧吳傳第四「項籍死、上置酒、對衆折隨何、曰腐儒、爲天下安用腐儒哉」。

② 鄭愚『譚州大瀉山同慶寺大圓禪師碑銘』「以耽沈之利欲、投老朽之筋骸」。
 ③ 沈德符『萬曆野獲編』卷二十三「吾鄉則黃葵陽學士、及長公中丞稱莫逆、代筆札、然其才庸腐、無一致語」。

6〇くつがへる

顛覆 翻飄 (三、五十一号裏)

【顛】は倒と同義なり。「倒」はたおれるなり、さかしまなり、「顛」はいただきの下になるをいう。畢竟同意なり。

【覆】は反覆の意にて、ひつくりかえることなり。

【翻】「ひるがへる」とよむ。「翻覆」①「翻顛」②「翻倒」③と連用す。はねかえるなり、とびはねてひつくりかえるなり。

①『後漢書』劉焉袁術呂布列傳第六十五「術既叨貪、布亦翻覆」。

②『新唐書』列傳第一百四十四上突厥傳上「多喪兵士、顛翻大都、則跳身而來」。

③杜甫『喜逢行在所三首』一「喜心翻倒極、嗚咽淚沾巾」。

【飄】「ひるがへる」とよめども、翻と殊なり、風に吹かれてひらひらすることなり。水に従えば「漂」なり、風に従えば「飄」なり。

7〇くだる

降 下落 墮 墜 隕 隕 貶 (五、一号表)

【降】【下】皆「くだる」なり。さまでの差別なし。「下」の字は「くだす」というより轉用して、俗語に軽く助字の如く用いることあり。「放下」①は、「放」ははな

すなり、手をはなして地におくことなり。「排下」②はものを地へならべることなり。「鋪下」③は地へしくことなり。「瀉下す」④「傾下す」⑤、ものを器よりまくことなり。皆助字の如し。又「岳降」⑥とは誕生のことなり。詩經に本づけり。それより「降誕」⑦ともいうなり。「内降書」⑧は内々の宣言なり。「降眞」⑨は仙人をかみおろしすることなり。「降世」⑩も仙佛の人界に生まれることなり。「下世」⑪は死することなり。醫書に「吐・汗・下」⑫というは、病を大便より下すことを「下」といふ。和俗に瀉することを「下る」といふは誤まり。日本紀に吐を「くだる」と訓ず。口より垂れるということなるべし。各別のことなり。

①『後漢書』桓榮丁鴻列傳「夫威柄不以放下、利器不可假人」。

②『莊子』在宥「老聃曰、女慎無撓人心、人心排下而進上」。

③『佛本行集經難陀出家因緣品第五十七上』「作是語已、即於彼店、在魚鋪下、抽取一乘臭菹茅草」。

④徐弘祖『徐霞客遊記』遊天台山日記四月初三日「越一嶺、沿澗八九里、水瀑從石門瀉下、旋轉三曲」。

⑤白居易『郡齋暇日辱常州陳郎中使君早春晚坐水西館書事詩十六韻酬之』「徐傾下藥酒、稍熱煎茶火」。

⑥『詩經』大雅・蕩之什・崧高「崧高維嶽、駿極于天。維嶽降神、生甫及申」。

⑦王建『宮詞』「妃子院中初降誕、內人爭乞洗兒錢」。

⑧『續資治通鑑長編』卷八十五「既別建外院、重寫書籍、彭年請內降書、本選官詳定」。

⑨周邦彥『汴都賦』「飛仙降眞之縹緲」。

⑩貫休『千載降祥』「九天宮上聖、降世共昭回」。

⑪曹植『三良詩』「秦穆先下世、三臣皆百殘」。

⑫「吐・汗・下」は東洋医学における治療法。「吐」は吐瀉、嘔吐のことで、積極的に嘔吐させる方法、「汗」は発汗のことで、積極的に汗を出させる方法、「下」は人為的に排便させる方法。『脈經』卷七病發汗吐下以後證第八「凡

病若發汗、若吐、若下、若亡血、无津液而陰陽自和者、必自愈。」

【落】【墮】【墜】皆おちることなり。さまでの差別なし。但し「落」は艸木の葉のおちるより出でたる字なり①。故に「葉落」②「花落」③「果實落」④に専らに用いる。「墜」の字も同じく用いる。「墮」はくづれ落ちる意あるゆえ、右の品には罕なり。又「墜」は重墜の意あり。華人、扇子を腰にさげるに、絲をつけて、絲の先に玉をつけて帯にはさむなり、その玉を「墜」という。おもりのことなり。醫書に「痰を墜す」⑤など、皆石藥重墜の劑なり。「沈墜」⑥など連用す。車馬船などよりおちるは、二字ともに用いる。大抵同義なり。

- ①『禮記』王制「艸木零落、然後入山林。」
 ②曹問『六代論』『文選』卷五十二「臣聞、公族者國之枝葉、枝葉落、則本根無所庇蔭。」

- ③杜甫『遣意二首』一「一徑野花落、孤村春水生。」
 ④御製詩『靜明園卽事』『皇清文頌』卷首二十三「風度鐘聲來嶺外、鳥啣果實落堦前。」

- ⑤『神農本草經疏』卷五玉石部下品礞石「礞石消積滯墜痰涎誠爲要藥、然而攻擊太過性復沈墜。」

- ⑥『佛說衆許摩訶帝經卷第七』「諸異生等、若不爲說種種妙法、皆趣沈墜。」

【隕】葉などのおちる①にも、星のおちる②にも用いる。高さ處よりおちる意あり③。又死するをも「隕」という④。

- ①『詩經』衛風・氓「桑之落矣、其黃而隕、自我徂爾、三歲食貧。」
 ②『春秋』莊公七年「夏四月、辛卯、夜、恆星不見、夜中、星隕如雨。」
 ③『說文解字』「隕、从高下也。」
 ④『左傳』襄公三十一年「延州來季子、其果立乎。巢隕諸樊、闔戕戴吳、天似啓之。」

【頽】【墮】くづれるなり。「日西頽」「日西墮」「木葉頽」「木葉墮」など、「おちる」と用いる。

【貶】「おとす」とよむ。「褒貶」①「貶損」②「貶抑」③「貶降」④、皆人の名譽官位をおとすことなり。

- ①杜預『春秋序』「吾曰、春秋雖以一字爲褒貶、然皆須數句以成言。」
 ②『春秋公羊傳』桓公十一年「行權有道、自貶損以行權。」
 ③『三國志』蜀書・諸葛亮傳第五「街亭之役、咎由馬稷、而君引愆、深自貶抑、重違君意、聽順所守。」
 ④『後漢書』張王种陳列傳第四十六「而和帝無異葬之議、順朝無貶降之文。」

8〇〇ろし

黒 玄 黦 黔 緇 黹 黻 黼 黷 黷 涅 (五、三十号表)

【黒】「くろし」。訓の如し。

【玄】「くろし」。「六入を玄という」①とて、あかき色よりだんだんに六しほ染めたるを「玄」という。故に黒色の中に赤き色を帯びたるをいうなり②。衣服に「玄黄」③「玄端」④「玄冕」⑤など、皆是れなり。又黒の字のかわりにも用いる⑥。又深遠にして黒暗なることをもいう⑦。ただ深遠なる義にも用いる。「玄幽」⑧「玄微」⑨「玄妙」⑩、皆道理の至極深くして、窺いがたきをいう。又老子「玄之又玄」⑪ということを読きしより、道教を「玄門」⑫「玄宗」⑬「玄教」⑭などという。又天の色は玄、地の色は黄なるゆえ、天のことを「玄」という⑮。「上玄」⑯「重玄」⑰などなり。又揚雄、太玄經を作りしより⑱、「玄經」⑲「玄を草す」⑳といえ、太玄のことになる。又禪宗に臨濟の「三玄」㉑あるより、「玄に參す」㉒といえ

禪のことなり。

- ① 『周禮』考工記・鍾氏「三入爲纁、五入爲緇、七入爲緇、鄭注「凡玄色者、在緇緇之間、其六入者與。」
- ② 『說文解字』「玄、幽遠也、黑而有赤色者爲玄。」
- ③ 『書經』武成「惟其士女、筐厥玄黃、昭我周王、孔傳「言東國士女、筐篚盛其絲帛、奉迎道次、明我周王爲之除害。」
- ④ 『周禮』春官・司服「其齊服有玄端素端。」
- ⑤ 『周禮』春官・司服「祭羣小祀、則玄冕。」
- ⑥ 『小爾雅』廣詁「玄、黔、驪、黝、黑也。」
- ⑦ 『荀子』正名「異形離心、交喻異物、名實玄紐、楊注「玄、深隱也。」
- ⑧ 謝守灝『混元聖紀』卷八「戊午、下詔曰、至道弘深、混成無際、體包空有、理極玄幽。」
- ⑨ 『抱朴子』外篇・廣譬「明者、觀機理於玄微之未形。」
- ⑩ 『呂氏春秋』勿躬「精通乎鬼神、深微玄妙、而莫見其形。」
- ⑪ 『老子』一章「玄之又玄、衆妙之門。」
- ⑫ 駱賓王『於紫雲觀贈道士』「碧落澄秋景、玄門啓曙關。」
- ⑬ 王儉『褚淵碑文』《『文選』卷五十八》「眇眇玄宗、萋萋辭翰、注「翰曰、玄宗、道也。」
- ⑭ 『晉書』志第十二樂上「懷遠燭幽、玄教風颯。」
- ⑮ 『釋名』釋天「天又謂之玄。」
- ⑯ 『周易』坤文言「夫玄黃者、天地之雜也、天玄而地黃。」
- ⑰ 揚雄『甘泉賦』《『文選』卷七》「惟漢十世、將郊上玄、定泰時、李善注「上玄、天也。」
- ⑱ 陸機『漢高祖功臣頌』《『文選』卷四十七》「重玄匪輿、九地匪沈。」
- ⑳ 『漢書』揚雄傳第五十七下「實好古而樂道、其意欲求文章成名於後世、雄以爲經莫大於易、故作太玄。」

⑲ 『後漢書』張衡列傳第四十九「衡善機巧、尤致思於天文陰陽曆筭、常耽好玄經。」

⑳ 『漢書』揚雄傳第五十七下「哀帝時、丁傅董賢用事、諸附離之者或起家至二千石、時雄方草太玄、有以自守、泊如也。」

杜甫『酬高使君相贈』「草玄五岳敢、賦或似相如。」

㉑ 『鎮州臨濟慧照禪師語錄』「師又云、一句語須具三玄門、一玄門須具三要、有權有用。」

㉒ 『參玄』は臨濟が修行者を教導する方法のひとつ。楊炯『王勃集序』「司馬談之晚歲、思弘授史之功、揚子雲之暮年、遂起參玄之歎。」

『永平道元禪師清規』衆寮箴規「謹白參玄人、光陰莫虛度。」

【黠】【黔】【緇】【驪】【黝】皆通用して、「くろし」とよむ。黒なり。「黠」は黒木なり①。「黔」は、「突黔ます」②とは、竈のくろまぬなり。一處に久しく住せぬことなり。「黔首」③は民をいう。冠巾せぬ故、頭髮黒く見える故にいうなり。「緇」は染色のくろきなり④。「驪」は黒馬なり⑤。「黝」は青黒色なり⑥。

① 『說文解字』「黠、黒木也。」

② 班固『答賓戲』《『文選』卷四十五》「是以聖哲之治、棲棲遑遑、孔席不暝、墨突不黔。」

③ 『說文解字』「黔、黎也、秦謂民爲黔首、謂黒色也。」

④ 『說文解字』「緇、帛黒色也。」

⑤ 『禮記』檀弓上「夏后氏尚黒、大事斂用昏、戎事乘驪、鄭注「馬、黒色曰驪。」

⑥ 『說文解字』「黝、微青黒色。」

【黧】「面色黧黒」①とは、面の色のつつくろきをいう。

① 『戰國策』秦策一「羸滕履躡、負書擔橐、形容枯槁、面目黎黒、狀有歸色。」

【**涅**】黒土泥なり①。「くり」「水の底によどむ黒い土」にする」とは、黒くそめることなり。

①『説文解字』「涅、黒土在水中也」。

9〇くるしむ

苦 毒 困 厄 窘 嗜 (五、三十五号表)

【**苦**】「にがし」というより轉用して、「くるしむ」と訓ず。辛苦なり。「苦死して欲す」①とは、死ぬほどほしきなり。「苦だ憶ふ」②とは、うちなげきて、つよくなつかしきなり。「良苦」③「功苦」④は、布帛の地のよきを「良」という、あしきを「苦」という。器物のじやうぶなるを「功」という、そさうなるを「苦」という。「苦悪」⑤とは、何にても器財の下作もの「できのわるいもの」をいう。このとき楷の字と通ず。

①杜甫『送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白』「惜君只欲苦死留、富貴何如草頭露」。

②張繼『寄鄭員外』「經月秋聞雨、新年苦憶君」。

③『周禮』天官・典婦功「凡授嬪婦功、及秋獻功、辨其苦良、比其尖而賈之」。

④『國語』齊語「審其四時、辨其功苦、權節其用、論比協材」。

⑤『管子』度地第五十七「常以朔日始、出貝闕之、取完堅、補弊久、去苦惡」。

【**毒**】「天下を毒す」①、「くるしむ」とよむ。やはり字の如くにてよきなり。

①『易經』師「剛中而應、行險而順、以此毒天下、而民從之」。

【**困**】「へるしむ」「たしなむ」。なんぎすることなり。「人の爲に困めらる」①、人になんぎをさせられることなり。「貧困」②「困乏」③「困窮」④「困倦」⑤、皆はたらく力のなきことに用いる。「酒困」⑥は酒にひしげたることなり。「春困」⑦は

はるけ「春の倦怠」なり。「花柳困」⑧なども花柳の力なきなり。俗語にねむることを「困す」⑨という。

①『閩微草堂筆記』卷二「灤陽消暑錄二」「有戒酒者曰、鬼善幻、以酒之故、至臥而受捶、鬼本人所畏、以酒之故、反爲人所困、沈湎者念哉」。

②『史記』管晏列傳第二「管仲貧困、常欺鮑叔、鮑叔終善遇之、不以爲言」。

③『漢書』昭帝紀第七「乃者民被水災、頗匱於食、朕虛倉廩、使使者振困之」。

④『書經』大禹謨「不虐無告、不廢困窮」。

⑤鄭燧『開元傳信記』「師自遠而來、困倦、欲於何方休息耶」。

⑥『論語』子罕「喪事不敢不勉、不爲酒困、何有於我哉」。

⑦曾鞏『錢塘上元夜祥符寺陪咨臣郎中文燕席詩』「金地夜寒消美酒、玉人春困倚東風」。

⑧黃庭堅『元翁坐中見次元寄到和孔四飲王夔玉家長韻因次韻率元翁同作寄湓城』

「雨罷山澤明、日長花柳困」。

⑨『後漢書』任李萬邳劉耿列傳第十一「世祖明旦與諸將俱至營、勞純曰、昨夜

困乎」。

【**厄**】やくどしの「やく」の如し。さいなんのことなり。「人の爲に厄せらる」、困の字と同じ。

【**窘**】さしつまりて、なんぎすることなり。「窘急」①「窘迫」②。

①『史記』郭解列傳第六十四「適有天幸、窘急常得脫、若遇赦」。

②『晉書』列傳第三十二「劉琨「在晉陽、嘗爲胡騎所圍數重、城中窘迫無計」。

【**嗜**】「たしむ」とよみて、物をすきこのむことなり。世俗に「たしなむ」とよむは非なり。行儀をたしなむは「矜持」①なり。

①鮑照『答客』「愛賞好偏越、放縱少矜持」。

10〇くぐふ

狂 顛 猖 獗 (六、廿六号裏)

【狂】【顛】二字ともに氣ちがうなり。二字同じように通用すれども、元來氣ちがいの陽症を「狂」といふ、陰症を「顛」といふ①。「顛」は言語顛倒し、心志常に異なるまでなり。故に人の性質などの上にも用いても、少しはその意持あるなり。

①『正字通』午集中「方書、癲狂分二症。癲、喜異常、顛倒錯亂也。狂、狂亂不定也。心熱甚則喜而癲、肝熱盛則怒而狂。陰附陽則狂、陽附陰則癲。」

【猖】【獗】二字ともに、猛鳥獸、又は夷狄盜賊などの威勢兇惡にくるいあるくをいうなり。

11〇くむ

斟 斟 酌 挹 汲 掬 杯 (後二、廿八号裏)

【斟】くみとることなり。斗に從う字ゆえ、杓にてくみとる意なり。「斗」は銚子なり。唐土の銚子は柄杓に似たり。仇と通ず。詩經に「賓載ち仇を手る」①。

①『詩經』小雅・甫田之什・賓之初筵「賓載手仇、室人入又」。

【斟】うめあわせることなり。元來「くわえ」「酒をいれる酒器」のことなり。故に酒をくみたまふ意なり。それを「斟宜」、又は「斟酌」①などと連用して、うめあわせることなり。「斟酌」をひかえることにするは倭俗なり。

①『國語』周語上「庶人傳語、近臣盡規、親戚補察、瞽史教誨、耆艾修之、而後王斟酌也。」

【酌】斟と同意なり。くみとる意にも用いる。くみてもつておる意なり。

【挹】酌と同意なり。

【汲】水をくむという字なり。斟・酌・斟は酒をくむなり。

【掬】兩手にてすくいとることなり①。故にくみとることに用いる。

①『左傳』宣公十二年「中軍下軍爭舟、舟中之指可掬也」、杜注「兩手曰掬」。

12〇くらふ

食 喫 吃 嚙 嚼 咀 咬 哺 味 飡 餐 (後三、十四号裏)

【食】ものをくうことなり。「はむ」とも、「くろふ」ともよむ。「シ」の音のときはめしなり。捻じての食物のことを「シ」の音によむは悞りなり。

【喫】これも「くふ」なり①。俗語に多く用いるなり。但し「食」は殊の外ひろき字なり。知行とることをも「祿を食む」②「粟を食む」③といい、今物をくうことをも「食する」というなり。「力を食む」④というは、民の力をこなたの用に立てる意なり。「喫」は今口へ入れてくうことなり。されども又俗語に轉用して「棒を喫す」などと使う。棒をくうというほどのことなり。「一驚を喫す」、きもをつぶすことなり。又「茶を喫す」「酒を喫す」といいて、飲みものにも通じるなり。

①『說文解字新附』「喫、食也」。

②『史記』循吏列傳第五十九「使食祿者、不得與下民爭利、受大者不得取小」。

③『左傳』襄公五年「無衣帛之妾、無食粟之馬」。

④『禮記』曲禮下「問大夫之富、曰有宰食力、祭器衣服不假」。

【吃】元來どもりのことなり。音同じき故に喫と通ず。

【嚙】「かむ」なり。かじかじとかむことなり。虫類などの物をくわうにも用いる。

【嚼】「かむ」なり。これはにちやにちやと音をさせてかむことなり。牛の物をくわうなどに用いる。桓譚新論に「屠門に對して大いに嚼す」①は、屠家の門前にて舌うちして、物をくわうまねをすることなり。「咀嚼」②「啖嚼」③「饞嚼」④などと連用す。

①桓譚『新論』《藝文類聚》卷七十二引「關東鄙語曰、人間長安樂、出門向西笑、知肉味美、則對屠門而嚼」。

②『後漢書』左周黃列傳第五十一「聖造生讒賊廢立之禍、生爲天下所咀嚼、死爲海内所歡快」。

③韓愈『晚秋鄜城夜會聯句』「凶徒更蹈藉、逆族相啖嚼」。

④黃庭堅『次韻荅宗汝爲初夏見寄』「看人取卿相、妄意亦饞嚼」。

【咀】嚼と同義なり。但し口に含んで居りて味わうなり。

①『說文解字』「咀、含味也」。

【咬】齧と同じ。大氏嚙と同じ。但しくいつくという程のことなり。

【哺】哺と同じ。物をくわいて口中にあるをいうなり①。「哺を吐く」②は、口中の食物をはきだすなり。「哺を反す」③は、鳥のおやとりにえはをくいかえずなり。又食物を人にくわせることにもなるなり。又「哺時」④は申の時のことなり。呂覽に「且より食に至る、食より舐に至る、舐より哺に至る、哺より下哺に至る、下哺より日夕に至る」⑤とあり。

①『漢書』高帝紀第一上「漢王輟飯吐哺」、注「師古曰、哺、口中所含食也」。

②『史記』留侯世家第二十五「漢王輟食吐哺、罵曰、賢儒、幾敗而公事」。

③梁武帝『孝思賦』「靈蛇銜珠以酬德、慈鳥反哺以報親」。

④『說文解字』「哺、日加申時食也」。

『史記』呂太后本紀第九「入未央宮門、遂見產廷中。日哺時、遂擊產」。

⑤『呂氏春秋』《康臨字典》「哺の項引」「且至食、食至日舐、舐至哺、哺至下哺至日夕」。

『史記』天官書第五「且至食、爲麥、食至日舐、爲稷、舐至哺、爲黍、哺至下哺、爲菽、下哺至日入、爲麻」。

【味】「あじはふ」。訓のとおりなり。

【飮】【餐】二字とも同義なり。元來熟食を「餐」という①。又湯つけめしを「餐飯」という。又「くろふ」とよむときは、じきにするというほどのことなり。「落英を餐す」③など見つべし。熟食の道理ゆえ、そのままくう意もあるなり。

①『字彙』戊集「餐、熟食也、一日吞食」。

②『古詩十九首・行行重行行』「棄捐勿復道、努力加餐飯」。

③『楚辭』離騷「朝飲木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英」。

嵇含『菊花銘』《藝文類聚》卷八十二「煌煌丹菊、翠葉紫莖、洗說仙神、徒餐落英」。

ケの部

1〇けがる

汗穢 褻瀆 點浼 塵巖 (二、廿七号表)

【汙】汚・汚、同字なり。たまり水という字なり。「濁水流れず」①と注す。左傳に「潢汙行潦の水」②、賈誼が賦に「尋常の汗瀆」③などなり。それより轉用して、「くぼかなり」「くぼんでいるさま」と訓ず。檀弓に「道汚なれば則ち從て汚なり」④、荀子に「埤汚庸俗」⑤、柳宗元が詩に「城を夷げ七族を芟り、臺觀皆焚き汚む」⑥の類なり。又この時、麻の韻にも入れ、窪の字と通用す。禮運に「汚尊して杯飲す」⑦、正字通に「鑿なり」⑧と注せるは非なり。地をくぼめて樽とすることなり。又轉用して、深き意に用いる。左傳序に「盡にして汗せず」⑨。又轉用して、「けがるる」「けがす」とよむ。「よこれ」「よこす」と譯す。穢の字より輕し。孟子に「流俗に同じ、汗世に合ふ」⑩、左傳に「川澤、汗を納む」⑪など。「田を買て自ら汗す」⑫「血、車輪を汗す」⑬「沾汗」⑭「汗穢」⑮「染汗」⑯「舊汗」⑰「塵汗」⑱「貪汗」⑲「泥汗」⑳の類なり。「けがす」とよむ時、澆の字と同義なり。又轉用して、「すすぐ」とよむ。けがれたるを洗うことなり。詩經に「薄か我が私を汚がん」㉑。

- ①『說文解字』「汚、濁水不流也」。
- ②『左傳』隱公三年「僅宮錡釜之器、潢汙行潦之水、可薦於鬼神、可羞於王公」。
- ③賈誼『弔屈原文』《文選》第六十「彼尋常之汗瀆兮、豈能容夫吞舟之巨魚」。
- ④『禮記』檀弓上「道隆則從而隆、道汚則從而汚」。
- ⑤『荀子』非相「好其實不恤其文、是以終身不免埤汗傭俗」。
- ⑥柳宗元『詠荊軻』「慈父斷子首、狂走無容軀、夷城焚七族、臺觀皆焚汚」。
- ⑦『禮記』禮運「其燔黍捭豚、汗尊而杯飲、黃桴而土鼓」。
- ⑧『正字通』已集上「汗、麻韻、音蛙、鑿也」。
- ⑨『左傳』成公十四年「婉而成章、盡而不汗、懲惡而勸善」。
- 杜預『春秋左氏傳序』「四曰、盡而不汗、直書其事、具文見意」。
- ⑩『孟子』盡心下「曰、非之無舉也、刺之無刺也、合乎流俗、合乎汗世」。
- ⑪『左傳』宣公十五年「諺曰、高下在心、川澤納汗、山藪藏疾、瑾瑜匿瑕、國君含垢、天之道也」。

⑫『史記』蕭相國世家第二十三「今君胡不多買田地、賤貨貨以自汗」。

⑬『漢書』雋疏于薛平彭傳第四十一「陛下不聽臣、臣自刎、以血汗車輪、陛下不得入廟矣」。

⑭『傅子』《三國志》魏書一武帝紀第一注引「每與人談論、戲弄言誦、盡無所隱、及歡悅大笑、至以頭沒杯案中、肴膳皆沾汗巾噴、其輕易如此」。

『高僧傳』「釋曇始游化關中、足白于面、跣涉泥水、未嘗沾汗、時稱白足和尚」。

⑮『韓非子』內儲說上・七術第三十「下皮爲縣令、其御史汗穢而有愛妾」。

⑯『漢書』蒯伍江息夫傳第十五「充將胡巫掘地求偶人、捕蠱及夜祠、視鬼、染汗令有處」。

⑰『宋史』列傳一百七十八鄭性之「願陛下明詔百辟、滌去舊汚、一以清白相師」。

⑱李商隱『爲舍人絳郡公上李相公啓』「邁越時流、塵汗中旨、恩渥非次、性分難移」。

⑲『莊子』秋水「不多食乎力、不賤食汚、行殊乎俗、不多辟異」。

⑳『後漢書』逸民列傳第七十三「若伊人者、志陵青雲之上、身晦泥汗之下」。

㉑『詩經』周南・葛覃「薄汗我私、薄澣我衣」。

【穢】「けがれ」「けがす」「けがるる」とよむ。「さしきたなし」と譯す。汚の字より重き字なり。元來田の中に雜草生じて、むさくきたなきこと①なるゆえ、「蕪穢」②「荒穢」③と連用し、それより轉用して、「けがらはし」とよみて、淨・潔の反對なり。不淨をいうなり。「穢德」④「穢行」⑤は、行迹の言語にいわれぬあしきをいう。後世には多く官人の贓罪、或いは不義の好色などに用いる。又糞を「穢」といふ⑥。

- ①『說文解字』「蕪、蕪也、徐鍇注「田中雜草也」」。
- ②『漢書』公孫劉田王楊蔡陳鄭傳第三十六「田彼南山、蕪穢不治、種一頃豆、落而爲箕」。

- ③ 『説苑』 修文「益其地、入其境、土地荒穢、遺老失賢、培克在位、則有讓」。
- ④ 『書經』 泰誓中「朋家作仇、脅權相滅、無辜籲天、穢德彰聞」。
- ⑤ 『晉書』 列傳第三石苞「又以有穢行、徙頓丘、與弟崇同被害」。
- ⑥ 『晉書』 列傳第四十七殷浩「或問浩曰、將位官而夢棺、將得財而夢糞、何也。浩曰、官本臭腐、故將得官而夢尸。錢本糞土、故將得錢而夢糞」。

【褻】「なるる」とよむ。元來膚につけたる衣服をいう①より、至極くつろぎ、心易きことをいう。それより「褻嫚」②「褻瀆」③など、和語にいう尾籠なることに用いる。

- ① 『説文解字』「褻、私服」。
- 『荀子』 禮論「説褻衣、襲三稱、注「褻衣、親身之衣也」。
- ② 『孔子家語』 好生「黼紱袞冕者、容不褻嫚、非性矜莊、服使然也」。
- ③ 『白虎通』 社稷「不置中門内何、敬之示不褻瀆也」。

【瀆】瀆、同字なり。「恩なり」①「重複なり」②と注して、心易たてにして、かるかるしく苦勞をかけることなり。故に「褻瀆」③と連用す。汚・穢と別なり。

- ① 『字彙』 已集「瀆、恩也」。
- ② 『正字通』 已集上「瀆、恩也、重複也」。
- ③ 『論語』 述而「子於是日哭、則不歌」、疏「若一日之中、或哭或歌、是褻瀆於禮容、故不爲也」。

【點】墨にて星を付けることなり①。故に潔白なるものにきずを付ける意に用いて、「けがす」とよむ②、「けがるる」に非ず。

- ① 『爾雅』 釋器「滅謂之點、郭注「以筆滅字爲點」。
- ② 司馬遷『報任少卿書』《文選》卷四十二「適足以見笑而自點耳」、李善注「點、辱也」。

【洩】「けがす」「けがさるる」とよむ。よごす、よごされるなり。「泥洩」「塵洩」①「血洩」「煤塵洩」「汗洩」②などに用いる。汗の字の意なり。又人に用をたのむことをいう。但しその人に對して向いをあがめていう詞なり。瀆の字の意なり。

- ① 齊映『進封章表』「故臣得以盡其管見、塵洩天聽、謹別錄狀同進以聞」。
- ② 李綱『謝親筆劄子』「誣謗並興、流言飛文、汗洩天聽、負憂抱鬻、不敢自明」。

【塵】「ちり」というより、「けがす」と用いる。「けがれ」「けがるる」とはよまず。

【巖】「汚血なり」①と注す。くろぢなり。それより轉用して、「けがす」とよむ。「巖穢」②「汚巖」③などと用いる。「巖口」というは、淫亂びろうなることを口にていうをいうなり。

- ① 『説文解字』「巖、汚血也」。
- ② 蔡襄『乞叙用孫汚狀』「然觀貶降之重及有履巖穢之詞、皆謂孫汚」。
- ③ 『漢書』 文三王傳第十七「汗巖宗室、以内亂之惡披布宣揚於天下」。

2〇けはし

嶮 阻 峻 峭 (四、廿五号裏)

【嶮】險とも同じ。山に従う故、山のけわしきをいう①。畏る可き意、又行き難き意を含めり。

- ① 張衡『西京賦』《文選》卷二「坻嶠鱗沓、棧巖嶮峻」、李善注「棧、峻、皆高峻貌」。

【阻】けわしき義に非ず、せつ所「難所 要害の地」のことなり。阻隔して通路なく、行き難きところを主とす。

【峻】【峭】山のけわしきなり①。きりたてたるようなる、急なるをいう。せつ所の義に非ず。二字の内、「峻」は高き意多く、「峭」は削りたてたる如き意を主とす。

①『正字通』寅集中「峭、山峻拔峭絶也」。

3〇けがる

汚 窳 洼 凹 坳（四、廿七号表）

【汚】「くぼし」。訓の通りなり。窳・洼、同字なり。

【凹】【坳】同字なり。中くぼなり。汚の字との差別は、「汚」はかたくぼにても用いるなり。義廣きなり。

4〇ける

蹴 蹶 跌 踢（後一、十九号裏）

【蹴】けちらす意にもなる。けあげる意にも用いる。又俗語に「一蹴して至る」①は、一とびに至るといふことなり。孟子に「蹴然として之に與す」、趙注に「蹴は踢なり」②とあり。足にてけあげてやるなり。

①張載『李愼同治九年本張子全書序』「則趣益深、理益明、又不容以一蹴而至也」。

②『孟子』告子上「行道之人弗受、蹴爾而與之、乞人不屑也」、趙注「蹴、踢也」。

【蹶】けたおすなり。「唐の嗣業、足を以て石を蹶る」①、又「秦、六國を蹶す」②の類なり。

①『新唐書』列傳第六十三「李嗣業、字嗣業、京兆高陵人。……初、討勃律也、通道葱嶺、有大石塞隘、以足蹶之、抵穹壑、識者以爲至誠所感雲」。

②『漢書』賈誼傳第十八「然并心而赴時、猶曰蹶六國、兼天下」。

【跌】【踢】「ける」とよむ。踢・踈よりかるし。ちよと足さきにてけることなり。踢音唐、踢と混ずべからず。踢音逸、驚動の貌なり①。

①『漢書』楊雄傳第五十七上「河靈躡踢」、注「師古曰、躡踢、驚動之貌」。

コ の 部

1〇こながき

糲 糲 餹（二、四十八号裏）

【糲】「かつる」とよむ。食物にもをまじえることなり。それより「雜糲」①と連用す。

①『國語』楚語下「及少昊之衰也、九黎亂德、民神雜糲、不可方物」。

【糲】「こながき」とよむ。又「かつる」とよむ。米二肉一とて、米を二つ分、肉を一つ分ませたるをいう①。又米を羹の中へませたるをも「糲」という。「徑に糲する楊花、白種を鋪く」②というは、杜子美が句なり。楊花の徑の上に散りたるはふりこめをしたるに似たるをいうなり。

①『禮記』内則「糲取牛羊豕之肉、三如一、小切之、與稻米、稻米二、肉一、合以爲餌、煎之」。

②杜甫『絕句漫興九首』七「糲逕楊花鋪白氈、點溪荷葉書青錢」。

【餽】「ながき」とよむ。「糝なり」①と注せる故なり。又「鼎實」①と注せり。鼎の實なり。鼎の内にて煮たる食物のことなり②。

①『正字通』戌集下「餽、糝也。鼎實也」。

②『易經』鼎「九四、鼎折足、覆公餽。其形渥、凶」。

2〇ことなり

殊異別特他(三、初号表)

【殊】【異】二字「ことなり」とよむ時、譯はべつなり。「ちがふた」「かはりた」などなり。この時、二字同義なり。故に「殊異」①と連用す。「今古殊なり」「今古異なり」「物態殊なり」「物態異なり」「風景殊なり」「風景異なり」「語音殊なり」「語音異なり」「土産殊なり」「土産異なり」「人人殊なり」「人人異なり」「山河殊なり」「山河異なり」の類、皆その義差別なし。但し「同異」といへども、「同殊」といわず、「散殊」といへども、「散異」といわず。異の字は正しく同の字の反対なり、殊の字はもとたえはなれる意より轉用せるものなり②。故に斬刑を「殊死」③という。首身處を異にするゆえなり。又「殊死して戦ふ」④というは、必死に心をきわめて戦うことなり。左傳に「其の木を斬りて殊ず」⑤とは、木をきりはなさぬことなり。史記蘇秦が傳に「人をして蘇秦を刺さしむ、死せず、殊て走る」⑥というは、二つにきりはなされながら逃ることなり。又「殊に悪しし」「殊に美なり」と使う時、特の字と同じ。きれはなれる意ゆえ、すぐれる意になるなり。特の字は「ことに」とよむ時、「ただ」の意に用いることあれども、殊の字はその意には用いず。以上の類、皆異の字を用いず。異の字は奇怪の異に通じるゆえ、差別あるあり。

①『詩經』魏風・汾沮洳「美無度、殊異乎公路」。

②『說文解字』《經典釋文》左傳引「殊、死也、一曰、斷也」。

③『莊子』在宥「今殊死者相枕也、桁楊者相推也、刑戮者相望也」。

④『漢書』高帝紀第二下「今天下事畢、其赦天下殊死以下」、注「韋昭曰、殊

死、斬刑也。師古曰、殊、絶也、異也、言其身首離絶而異處也」。

④『漢書』韓彭英盧呂傳第四「信耳已入水上軍、軍皆殊死戰、不可敗」、注「師古曰、殊、絶也、謂決意必死」。

⑤『左傳』昭公二十三年「武城人塞其前、斷其後之木而弗殊、邾師過之、乃推而蹙之」。

⑥『史記』蘇秦列傳第九「其後齊大夫多與蘇秦爭寵者、而使人刺蘇秦、不死、殊而走」。

【別】こえにてよんで、きこえるなり。「自ら殊なり」「自ら別なり」「古今殊なり」「古今別なり」など。殊の字を「ことなり」とよむと、大形通じるなり。助語に用いる時、「別に好し」とは、好きもようのかわりたるなり。「殊に好し」「特に好し」はとりわけてよきなり。すぐれる意なり。「別に意有り」「殊に意有り」などこれと同じ。「別に意義無し」は、この外には意義なきなり。「殊に意義無し」は、意義のとりわけなきなり。又「別人」は他人なり。されども「他日」を「別日」といわず、「異日」とはいわぬ。書東の語に「別に録す」「別に白す」は、別紙に申すなり。「別に録す」「別に白す」、同じ意なり。この別の字を誤りて別の省字と申う人あり。零の音にて俗字なり。「木別子」を「木另子」という類、通用すれども、「另外」を「別外」とはいわず、「別様」を「另様」とはいわず。「另外」、「リンワイ」とよむ。俗語の各別なり。「另外好」は、かくべつよきなり。「另外差人去」は、別に使いをやるなり。「人別」「戸別」「月別」など、和語の人別にてよくすむなり。

【特】「ことに」とよむ時、とりわけてという意にて、すぐれる意あり。もと獨と義通じて、ひとりの意の字なるゆえなり。右は上に用いるに限る助語の時のことなり。「孤特」①は獨の義なり。「挺特」②「介特」③「奇特」④「秀特」⑤「英特」⑥、皆獨にすぐれる意あり。「特立」⑦も同じ。「獨立」は義廣くて、一人立つ意ばかりにも、又すぐれる意を帯びても用いれども、「特立」はすぐれて一人立つ意なり、獨

に專の意を帯びたり。「特特」⑧はわざわざなり。「特特として来る」「特特に獻じ奉る」、皆わざわざなり。「奇特」⑨はふしぎなり。倭語の「奇特」は「難得」^{ナシテ}なり、混ずべからず。

①『管子』明法解第六十七「故法廢而私行、則人主孤特而獨立、人臣羣黨而成朋。」

②『後漢書』方術列傳第七十二上「竊見鉅鹿太守會稽謝夷吾、出自東州、厥土塗泥、而英姿挺特、奇偉秀出。」

③『後漢書』馬融列傳第五十上「察淫侈之華譽、顧介特之實功、聘馱畝之羣雅、宗重淵之潛龍。」

④『宋書』本紀第一武帝上「及長、身長七尺六寸、風骨奇特。」

⑤任昉『禪位梁王璽書』「加以天表秀特、軒狀堯姿。」

⑥『宋書』本紀第二武帝中「加以龍顏英特、天授殊姿、君人之表、煥如日月。」

⑦『漢書』王莽傳第六十九上「然而折節行仁、克心履禮、拂世矯俗、確然特立。」

⑧歐陽脩『和人三橋三首』三「爲愛斜陽好、迴舟特過。」

⑨任華『寄杜拾遺』「昨日有人誦得數篇黃絹詞、吾怪異奇特借問、果然稱是杜之所爲。」

【他】自の反對なり。「自」はわれを指す、「他」は別人なり。われに對していうは皆「他」なり。但し「別人」「他人」①「外人」、差別あり。「別人」はほかのひとり、ただ言う辭なり。「他人」はわれに對していう。「外人」は内輪に對していう。「異人」は非常の人なり。仙人又は有道の人をいう。孟子に「王、左右を顧みて他を言ふ」②、よのことをいうなり。書に「斷斷として他の技無し」③、ほかの藝なきなり。詩に「死に之るまで、矢くは他靡けん」④、ほかの心なきなり。易に「他の吉有り」⑤、ほかのよきことあるなり。又「他の故無し」⑥、ほかに子細なきなり。これら皆「ほか」と譯して通ず。然れどもこの代りに「外」の字も「餘」の字も用いられず、和漢語脈の異處會すべし。又「他日」⑦「異日」⑧「他時」⑨「異時」、

皆昔にても行末^{ゆくすえ}にてもいう、今日に非ざるを指すなり。ほかの日ということなり。「外日」とはいわれず。「明外日」は明後日なり。「餘日」はまた用いかた別なり。幾日幾日と日を擧げて、この外の日という時、「餘日」というなり。「他郷」⑩「異郷」、皆故郷にてなきをいう。「他國」⑪「他州」⑫「他郡」⑬、みな「本國」「本州」「本郡」に對す。「異國」「異域」「殊域」、皆殊俗の國ということにて、えびす國をいう。「外國」⑭は中國に對して、これもえびす國をいう。「外州」⑮は畿内の州に對して、諸道の州をいう。「外郡」⑯「外郷」⑰、皆本州の郡縣に對していう。「外官」は朝廷官人に對して、畿内にもあれ、とかく州郡の官をいう。「外臺」は内寺に對して、文武官人をいう。

①『詩經』唐風・山有樞「宛其死矣、他人是保。」

②『孟子』梁惠主下「王顧左右而言他。」

③『書經』秦誓「如有一介臣、斷斷猶無他技、其心休休焉、其如有容。」

④『詩經』鄘風・柏舟「之死矢靡他、母也天只、不諒人只。」

⑤『易經』比「初六、有孚比之、无咎、有孚盈缶、終來有它吉。」

⑥『儀禮』士昏禮「某以非他故、不足以辱命、請終賜見。」

⑦『左傳』襄公二十五年「且曰、他日吾見蔑之面而已。」

⑧『史記』趙世家第十三「異日、王飲酒樂、數言所夢、想見其狀。」

⑨『史記』秦始皇本紀第六「他時秦地不過千里、賴陛下神靈明聖、平定海內。」

⑩蔡邕『飲馬長城窟行』「夢見在我傍、忽覺在他郷。」

⑪『孟子』盡心下「去齊接淅而行、去他國之道也。」

⑫韓愈『柳子厚墓誌銘』「觀察使下其法於他州、比一歲、免而歸者且千人。」

⑬范成大『吳郡志』卷三十七「先是、司漕運者轉民歲租、更送他郡。」

⑭『漢書』武帝紀第六「三年春正月、行幸甘泉宮、饗外國客。」

⑮『魏書』廢出三帝紀第十一「詔諸參佐、自三府以下、爰外州、皆不得復加、

常侍及兼兩員。」

⑯『陳書』本紀第一高祖上「內難初靜、諸侯出關、外郡傳烽、鮮卑犯塞。」

⑬『宋史』列傳第一百九十六儒林傳「此惠不過三十里内耳、外鄉遠民勢豈能來、老幼疾患之人必有餒死者。」

3〇〇る

凝凍 滯泥 澀 (五、六号表)

【凝】「こる」。訓の如し。

【凍】「こほる」。訓の如し。「魚凍」は、にこりなり。蒟蒻の根をすりて食料のこんにやくにすることを「凍子となす」といえり。

【滯】「とどこほる」。訓の如し。「滯下」はこしけ「女性性器から出るおりもの」をもう、痢病をもう。後世の醫書には、こしけばかりのこととして滯の字を用いる。

【泥】見解の滯りて道理の通ぜぬことなり。「泥路」は滯りて行かれぬがごとし。

①『南史』列傳第三十一齊宗室新吳侯景先「初武帝少年、與景先共車、行泥路、車久故壞」。

【澀】「しづる」。訓の如し。味のしづきにも用いる。

4〇〇ゆ

肥腴 豐腴 (五、三十二号裏)

【肥】「こゆ」。訓の如し。「家肥」①「國肥」②などと轉用するなり。

①『禮記』禮運「父子篤、兄弟睦、夫婦和、家之肥也」。

②『禮記』禮運「大臣法、小臣廉、官職相序、君臣相正、國之肥也」。

【腴】これも「こゆる」なり。「肥腴」①「豐腴」②、ししづきのよきことなり。又食物に用いるとき、魚鳥のみどころを「腴」という③。「道腴」④は道徳のうまみなり。

①『南齊書』列傳第三十九蠻「有數處不通騎、而水白、田甚肥腴」。

②歐陽脩『祭杜祁公文』「士之進顯於榮祿者、莫不欲安享於豐腴」。

③『禮記』少儀「羞濡魚者進尾、冬右腴、夏右鱗、祭膾。鄭注「腴、腹下也」。

④班固『答賓戲』《文選》卷四十五「委命供己、味道之腴」。

【豐】「こゆる」とはよます。ふくれることなり。「豐下」①は人の形の下ぶくらなるなり。「豐腴」②「豐胖」、皆こえることなり。美人の評に「飛燕は俏、貴妃は豐」③というは、飛燕はすらり、貴妃はふつくりというが如し。「肥瘦」④とさしつけていえば、肥えずぎ瘦せずぎたるようなればなり。

①『左傳』文公元年「穀也豐下、必有後於魯國、杜注「豐下、蓋面方也」。

②歸有光『小福建按察使楊君七十壽』「其貌豐腴而氣愈盛、其年殆未可量」。

③未詳。蘇轍『周昉畫美人歌』に「擁扇執拂知從誰、瘦者飛燕肥玉妃」とある。

④『後漢書』儒林列傳第六十九下甄宇「建武中每臘、詔書賜博士一羊。羊有大肥瘦」。

【胖】「こえふくれたることなり。「肥胖」①「胖大」②などと連用す。

①『三國演義』第八回王司徒巧使連環計 董太師大鬧鳳儀亭「呂布走得快、卓肥胖趕不上、擲戟刺布」。

②『禮記』大學「富潤屋、德潤身、心廣體胖」、疏「心廣體胖者、言内心寬廣、則外體胖大」。

5〇〇(ころよし)

快 快 慊 (五、三十六号裏)

【快】【快】【慊】三字ともに、「ころよし」とよむ。十分に心に満ちたることなり。

「中に快からず」①「意に快からず」②「懐に慊からず」③、どこにやら心にかかることのあるなり。その内、快の字はきびよきに用いる。「爽快」④はさつぱりとしてきびよきなり。「快士」⑤はきびよき男なり。俗語には、はやくことを「快」とい

う。速の字の如し。箸を「快子」⑥という。船中の語なり。船中には禁忌の語あり。箸と住と、聲同じ。「住」とは舟のすわることなり。故に船中にてこれを嫌い、反語して「快子」という。

①『朱子語類』本朝七・盜賊「有不快于中者、輒火十數家、且殺人、因劫之爲首。」

②鄭清之『閒中偶成』「春過日初永、睡餘意未快。」

③王紳『上侯城先生書』「故張籍切切爲言、愈請待五六十、然後爲之紳、未嘗不慊于懷、以爲著書、必待五六十。」

また『孟子』公孫丑上に「行有不慊于心、則餒矣」とある。

④『高僧傳』卷第十三經師第九「釋智宗、姓周、建康人。出家止謝寺。博學多聞尤長轉讀。聲至清而爽快。」

⑤『三國志』蜀書・黃李呂馬王張傳第十三「宣公與諸葛亮書曰、黃公衡、快士也。」

⑥『陔餘叢考』卷四十三「呼箸爲快、俗呼箸爲快子。陸容菽原雜記、謂起於吳中、凡舟行諱住、故呼箸爲快子、幡布爲抹布也。」

6〇〇(いぢ)

媚 阿 諂 諛 調 (六、十八号表)

【媚】「いぢる」とも、「いび」ともよむ。憐れを取るなり、人にかわいがられるよ

うにしかけることなり。故に「媚愛」①とも連用す。「山色媚ぶ」②「花色媚ぶ」③などは、あいきようらしきなり。「媚藥」④はあいきようぐすりなり。「一笑百媚生」⑤、「しほ」「愛嬌、愛らしさ」と譯してもよけん。

①王符『潜夫論』務本第二「人臣者以忠正爲本、以媚愛爲末。」

②王世貞『將至建業大風雨作』「兩儀退歸所、萬象仍悠然。山色媚舉扨、波聲清扣舷。」

③胡應麟『賀良方伯擢晉中左轄』「大邑桐陰流靡宇、重湖花色媚樓船。」

④『太平御覽』蟲多部八・龐降「頌表錄異曰、龐降、生於山野、……人以善價求之、以爲媚藥。」

⑤白居易『長恨歌』「回眸一笑百媚生、六宮粉黛無顏色。」

【阿】「をもねる」とよむ。曲げて人に従うなり。元來阿曲の義より轉用すればなり。

【諂】【諛】【調】二字ともに「へつらふ」なり。訓のごとし。調も諂と同字なり。

7〇〇(このむ)

好 嗜 喜 樂 善 欲 願 冀 覬 希 幸 庶 (六、十九号表)

【好】「このむ」と訓ず。「すく」と譯す。惡・憎の反對なり。「嗜好」①「嗜好」②

「好樂」③と連用す。何れも去聲なり。

①『尹文子』大道下「探人之心、度人之欲、順人之嗜好、而不敢逆。」

②『大寶積經卷第一百二十』廣博仙人會第四十九「常所歡遊園林宮苑鳥聲和雅、是喜好處皆不愛樂。」

③『禮記』大學「有所好樂則不得其正。」

【嗜】「たしむ」とよむ。すくことなり。「嗜好」「嗜愛」①と連用す。好むの甚しきなり。悪・忌の反対なり。食物のすききらいより出でたる字なり。

①『拾遺記』卷四燕昭王「蓋能去滯慾而離嗜愛、洗神滅念、常遊於太極之門」。

【憲】「よろこび」「このむ」なり。

【樂】「このむ」と訓ず。どこともなく心にすくことなり。たのしむより轉用せるものなり。去聲なり。

【善】「よみす」とよむとき、心によきとするなり。「相ひ善す」①「友とし善す」②、中のよきことなり。

①『左傳』襄公二十六年「初、楚伍參與蔡太師子朝友、其子伍舉與聲子相善」。
②『後漢書』儒林列傳第六十九上「曾祖父子建、少遊長安、與崔篆友善」。

【欲】「ほつす」と訓ず。なににてもその事をしたく思うなり。「色を欲す」①「食はんと欲す」②の類。又「ほしき」なり。「貨を欲す」③「酒を欲す」④。又「す」とよむ時は助字なり。將の字の意なり。又死字に用いるときは音にてよむ。「利欲」⑤「人欲」⑥「色欲」⑦なり。心に從いて「慾」に作るとき、古書は一切の「よく」に通ず。後世の書には専ら色欲に限る。

①『禮記』祭義「祀之忠也、如見親之所愛、如欲色然、其文王與」。
②『後漢書』方術列傳第七十二下華佗「體有不快、起作一禽之戲、怡而汗出、因以著粉、身體輕便而欲食」。

③『太平廣記』書二・王羲之「王聊問、比欲貨耶、一枚幾錢」。
④宋伯仁『澆酒巾』「爛醉是生涯、折腰良可嘅、欲酒對黃花、烏紗奚足愛」。
⑤『抱朴子』審舉卷第十五「但其遺其私精、渴其聰明、不爲利慾動、不爲囑託屈」。

⑥『禮記』樂記「人化物也者、滅天理而窮人欲者也」。
⑦『列子』力命第六「汝寒溫不節、虛實失度、病由飢飽色欲、精慮煩散」。

【願】「ねがふ」「ねがひ」「ねがはくは」。訓の如し。「ねがはくは」とよむときは、冀・覬・希・幸・庶と通用す。「ねがひ」とよむときは、「志願」①「願ひの如し」「願ひ多し」「願ひに適ふ」などなり。この時は冀・覬などの字と通じず。「誓願」②は佛書の字なり。俗には「愿」に作る。「許愿」③とは神佛に願だてをすることなり。「情愿」④は「情愿出家」「情愿入宮」「情愿從軍」などとして、心より納得して望むことなり。

①嵇康『與山巨源絕交書』『文選』卷四十三「陳說平生、濁酒一盃、彈琴一曲、志願畢矣」。

②『法華經方便品』「我本立誓願」。

③『醒世恆言』第二十六卷薛錄事魚服證仙「難道就這等坐視他死了不成。少不得要去請醫問卜、求神許愿」。

『鏡花緣』第十二回「凡父母一經得有子女、或西廟燒香、或東菴許願、莫不望其無災無病、福壽綿長」。

④『晉書』列傳第十六劉頌「然人心繫常、不累十年、好惡未改、情願未移」。

【冀】【覬】【希】共になりにくきことを願ひ望む意あり。「こひねがはくは」とよむときは詞字ことばになるなり。なにとぞかくしたきというほどの詞なり。

【幸】「こひねがはくは」と訓じるときは、上に同じ。かくあらば幸いならんと思ふ意ゆえ、義通じるなり。

【庶】「こひねがはくは」とよむとき、近辭なり。

8〇二たふ

答對報酬酢膺唯兪諾應肯領 (後一、廿七号表)

【答】答に作る、同じ。「問答」と連用す。書簡にても、言語にても、皆用いる。さきのいうことを受けて、こたえをすることなり。

①『文心雕龍』封禪第二十一「陳思魏德、假論客主、問答迂緩、且已千言、勞深勩寡、颺缺缺焉」。

【對】「應對」①と連用す。「應」は呼に對す。人の呼ぶにあつとこたえることなり。

【對】は問と對す。人のものを問うに、それはなになにといちいちこたえてこたえるなり、きつとそのわけをこたえるなり。答の字より重し。又書柬にも通じるなり。「答」は應にも通じるなり。「對」はせまし、「むかふ」とよむを以て看よ。きつと問いに對する意あり。

①『左傳』襄公三十一年「事成、乃授子大叔使行之、以應對賓客」。

【報】「むくふる」と訓じて、反報の意なり。むこうへのかえしなり。又詩語に「報を音にて」ほうずる」と使うときは、「つづぐる」というと同じ。つげしらせる意なり。

【酬】「むくふる」と訓ず。報と同義なり。酒もりに「酒獻酬酢」①ということあり。

主人より客へ杯をやるを「獻」という、客より返杯するを「酬」という、主人より又客へやるを「酢」というなり。それより轉用して、何事にも用いる。

①「酒獻酬酢」は未詳。ただ『禮記』仲尼燕居に「子張復問。子曰、師、爾以爲必鋪几筵、升降酌獻酬酢、然後謂之禮乎」とある。本文の「酒」は「酌」の誤りか。

【酢】「むくふる」とよむ。上に同じ。

【膺】應と同じ。但し口にて應じるなり。膺・噫と同じ。

【唯】【兪】二字共にあつとこたえる音なり。「應」の字はあつとこたえることをいう、「唯」「兪」はその直ちにあつとこたえる音なり。「唯」は男のこたえ、「兪」は女のこたえなり①。音のつよきとやわらかなるとなり②。

①『禮記』内則「能言、男唯、女兪」。

②『禮記』曲禮上「父召無諾、先生召無諾、唯而起」、正義「父與先生呼召稱唯、唯也。不得稱諾。其稱諾則似寬緩驕慢。但今人稱諾猶古之稱唯、則其意急也。今之稱猶古之稱諾、其意緩也。是今古異也」。

【諾】こころえましたというほどのことなり。「唯」「兪」はこころえてもこころえずとも、先づ唯とか兪とかへんじする法なり、「諾」は吾が心に合點し、うけがったときにいう辭なり①。

①『禮記』投壺「命弦者曰、請奏狸首、間若一、大師曰、諾、正義「諾、承領之辭也」。

【應】前條に見えたり。元來ひびくことなり。但し聲のひびきにあらざ、聲のひびきは響の字なり。手にひびくことを「手に應ず」①という。この方より呼音にひびきてあつということなり、故に報の字とは違ふなり。「報」は事のうえにいていうなり、「應」の字は意と辭と聲とに通じるなり。

①傳玄『筆賦』「寫文象于紈素、動應手而從心、煥光流而星布」。

【肯】「がえんず」とよむ。「うけがふ」と譯す。合點していかにものみこんだと同することなり。「諾」はこたへの上なり、「肯」はこころのうちなり。「不肯」は「きかぬ」と譯してよし。

【領】「うなづく」とよむ。「をとがひ」という字なるゆえ、おとがいを動かすことをいう。左傳に「衛侯入る、門に逆ふ者之を領すのみ」①の類なり。義之傳に「領を點す」②とあるは、へんじをせず、おとがいをうごかすことなり。

①『左傳』襄公二十六年「甲午、衛侯入、……道逆者、自車揖之、逆於門者、領之而已」、杜注「領、搖其頭、言行驕心易生」。

②『晉書』列傳第五十王羲之には「領を點す」は見あたらない。「領を點す」の例としては程登吉『幼學瓊林』「分甘以娛目、王羲之弄孫自樂。問安惟點領、郭子儀厥孫最多」などがある。

9〇二ふ

請 乞 丐 (後三、廿九号裏)

【請】「こふ」とよむ。情の省に従う。故にまことをもつてねがいもとめる意なり。

向うの様子をうかがいとう意を含むなり。書經に「以て爾の有衆と命を請ふ」①、左傳に「余、帝に請ふを得たり」②、禮記に「業を請へば則ち起り、益を請へば則ち起る」③、又「墓地は請はず」④などなり。

①『書經』湯話「聿求元聖、與之勳力、以與爾有衆請命」。

②『左傳』僖公十年「夷吾無禮、余得請於帝矣」。

③『禮記』曲禮上「先生問焉、終則對、請業則起、請益則起」。

④『禮記』王制「田里不粥、墓地不請」。

【乞】こいもとめるなり。うかがいとう意なし。禮記に「五帝、三王に憲り、言を乞ふ有り」①、史記に「將軍の貸を乞ふも亦已に甚し」②、後漢に「病を以て上書し身を乞ふ」③などなり。「乞食翁」④はこじきおやじなり。

①『禮記』内則「凡養老、五帝憲、三王有乞言」。

②『史記』白起王翦列傳第十三「或曰、將軍之乞貸、亦已甚矣」。

③『後漢書』李王鄧來列傳第五「時天下略定、通思欲避繁寵、以病上書乞身」。

④『太平御覽』卷六六一・道部三・真人下「楚莊公時、市長宋萊子常灑掃一市。久時、有一乞食翁入市」。

【丐】もらいかけてみる意なり。「乞」よりかるし。「丐婦」①はこじきおんななり。

①『元史』志第三下・五行二「汴梁祥符縣市中一乞丐婦人、忽生髭鬚」。

サの部

1〇〇さわがし

躁 噪 課 騷 (二、六号裏)

【躁】「さわがし」と訓ず。又「あかく」とも譯す。急動なり。醫書に「煩渴躁熱」①ということあり。のんどのかわくを「渴」という、湯水をこのまねども、むねの内いきるるを「煩」という、身のあつきを「熱」という、身は冷えたりとも、身もだえをして手足に衣服をかけさせぬを「躁」という。「志躁」②とは心の定まらず、あちこちと變動するなり。「性躁」③とは、かたぎのさわがしく、しつとりとせぬなり。「浮躁」④「輕躁」⑤など、連屬す。靜の字の反對なり。

①『素問』本病論「日久成鬱、即暴熱迺至、赤風邪腫翳、化疫、溫瘴暖作、赤氣瘴而化火疫、皆煩、而躁渴、渴其治之以泄之可止」。

②『南史』列傳第三十八陸琰「琰幼孤、好學、有志躁、州舉秀才」。

③『孔子家語』七十二弟子解「司馬耕、宋人、字子牛。牛爲性躁、好言語」。

④韓愈『薦士』「杳然粹而清、可以鎮浮躁」。

⑤『後漢書』列女傳第七十四「少習儀訓、閑於婦道、而驕淫輕躁、多行無禮」。

【噪】「さはぐ」とよめども、「羣鳴」①と註せる字なり。鳥のむらがりて、聲聲になくなり。「鵲噪」②「鴉噪」③「蟬噪」④などなり。「羣噪」⑤「亂噪」⑥「翔噪」⑦など連用す。

①『說文解字』「噪、鳥羣鳴也」。

②『宋史』列傳第二百二十一方技下「一日、庭鵲噪、令占之。曰、來日晡時、當有寶物至。及期、李全獻玉桂斧」。

③杜牧『秋晚江上遣懷』「蟬吟秋色樹、鴉噪夕陽沙」。

④『南史』列傳第十一王籍「至若邪溪賦詩云、蟬噪林逾靜、鳥鳴山更幽、劉孺見之、擊節不能已已」。

⑤『新唐書』列傳第一百三十七藩鎮盧龍張仲武「好馳獵、往往設置罝罟於道、……後居東都、弋獵愈甚、洛陽飛鳥皆識之、見必羣噪」。

⑥『招隱山志』卷十藝文六「當陰雨冥晦、悲風怒號、林木震驚、羣鴉亂噪」。

⑦『新唐書』列傳第十八李客師「客師……善騎射、喜馳獵、雖老猶未衰、自京南屬山、西際澧水、鳥鵲皆識之、每出、從之翔噪」。

【譟】「さはぐ」とよめども、これは人の聲聲にやかましくわめくことなり。「擾」

①「聒」②と註せり。「車馬譟」③「喧譟」④「聒譟」⑤「鬧譟」と連用す。「鼓譟」

⑥は軍中などにて大鼓をうちたてて、聲聲にのしることなり。

①『說文解字』「譟、擾也」。

②『康熙字典』には『增韻』を引いて「聒也」という。

③『周禮』夏官・大司馬「中冬教大閱、……及所弊、鼓皆賦、車徒皆譟」。

④『隋書』列傳第三十二裴矩「皆令佩玉、被錦罽、焚香奏樂、歌舞喧譟」。

⑤『朱子語類』論語十四・雍也第三「子張較聒、人愛說大話而無實」。

⑥『春秋穀梁傳』定公十年「齊人鼓譟而起、欲以執魯君」、注「羣呼曰譟」。

【騷】「さはぐ」とよむ。騷動することなり。いそがわしくみだれる意なり。「國中騷然たり」①「騷亂」②など連用す。詩經に「徐方繹騷」③というあり。「徐方」は國の名なり、「繹」は絡繹なり、國中さわぎ立て、人の往來たえぬことなり。檀弓に「騷爾」④といえるは、急疾の貌なり。又「騷屑は凄凉なり」⑤といえるは、「蕭瑟」⑥「蕭索」⑦「蕭岑」の聲の轉ずるなり。字義に拘わるべからず。又屈原、離騷を作る、「騷に離る」⑧という意にて名づけり。しかるに屈原は萬古詩賦の祖なるゆえ、詩人のことを「騷人」⑨といい、風雅なることを「風騷」⑩という。字義と各別のことなり。俗語には淫人の風流なるを「風騷」⑪といえり。

①『漢書』嚴朱吾丘主父徐嚴終王賈傳第三十四上「南夷相攘、使邊騷然不安、朕甚懼焉」。

②『南齊書』列傳第三十一・鄱陽王寶夤「百姓數千人皆空手隨後、京邑騷亂」。

③『詩經』大雅・蕩之什・常武「匪紹匪遊、徐方繹騷」。

④『禮記』檀弓上「故騷爾則野、鼎鼎爾則小人、君子蓋猶猶爾」。

⑤『正字通』亥集上「騷屑、凄凉也」。

⑥『楚辭』劉向・九歎・思古「風騷屑以搖木兮、雲吸吸以湫戾」。

⑦『楚辭』九辯「蕭瑟兮草木搖落而變衰」。

⑧『江淹』恨賦「『文選』卷十六」秋曰蕭索、浮雲無光」。

⑨『史記』屈原賈生列傳第二十四「故憂愁幽思而作離騷。離騷者、猶離憂也」。

⑩『正字通』亥集上「屈原作離騷、言遭憂也。今謂詩人為騷人」。

柳宗元『酬曹侍御過象縣見寄』「破額山前碧玉流、騷人遙駐不蘭舟」。

⑩高適『同崔員外綦毋拾遺九日宴京兆府李士曹』「晚晴催翰墨、秋興引風騷」。

⑪杜甫『題柏大兄山居屋壁二首』一「山居精典籍、文雅涉風騷」。

2〇さかん

盛昌隆 壯熾藹茂蕃殷阜榮（一、廿九号表）

【盛】衰の反対なり。訓の通りなり。廣き詞なり。次第によくなりゆくなり。

【昌】次第に明らかになりゆく意より、盛の字と同意に用いる。「百昌」①は萬物のことなり。

①『莊子』在宥「今夫百昌、皆生於土、而反於土、」『經典釋文』莊子首義「司馬云、猶百物也。」

【隆】土のこんもり高くなることなり①。それより盛の字の義にも用いる②。汚の反対なり。「汚」はくぼかなるなり。又夷の反対なり。「夷」は平地なり。「隆準」③は鼻すぢの高きこと、「穹隆」④は中高にそりたることなり。「憑隆」⑤は高大なること、「棟隆なり」⑥とは棟の中高なること、「豐隆」⑦は雷神なり。

①『爾雅』釋山「宛中隆、疏」言山形中央纏聚而高者名隆。

②『禮記』檀弓上「道隆則從而隆、道汙則從而汙、」『經典釋文』「盛也」。

③『史記』高祖本紀第八「高祖爲人、隆準而龍顏、美須鬚、左股有七十二黑子。」

④『太玄經』太玄告「天穹隆而周乎下、地旁薄而白乎上、人蒼蒼而處乎中。」

⑤左思『吳都賦』文選卷五「島嶼懸邈、洲渚憑隆、李善注「憑隆、高貌」。

⑥『易經』大過「九四、棟隆、吉、有它、吝、象曰、棟隆之吉、不桡乎天下也。」

⑦屈原『楚辭』離騷「吾令豐隆鑿雲兮、求宓妃之所在。」

【壯】右の盛・昌・隆、下の熾・蕃・茂など、大抵通用して、壯の字獨り別なり。

ものづよきことなり。故に「雄壯」①「壯健」②「壯勇」③などと連用す。壯・衰と反対するも、「衰」を衰老の意に用いてのことなり。三十を「壯」という④、氣力たくまじき時なればなり。「少壯」⑤「丁壯」⑥「老いて益ます壯なり」⑦、これより用いる。「肉を割ること何ぞ壯なる」⑧、又後漢書に「羣帥、其餘壯を賈ふ」⑨は、軍に勝ちたる餘威にのることにて、皆壯勇の義なり。「聲悲壯」⑩というは、筆策の聲、又は實盛兼平などの謠の音聲のようなることなり。「壯髮」⑪は、髮の額を

侵して生えたるなり。灸一つを「一壯」という⑫。醫書に灸の數を定むるに、三十ばかりの人の位を以て數を定め、老人又小兒は次第に減少するゆえなり。

①『三國志』蜀書・關張馬黃趙傳第六「初、飛雄壯威猛、亞於關羽。」

②『史記』田叔列傳第四十四「仁以壯健爲衛將軍舍人、數從擊匈奴。」

③『史記』白起王翦列傳第十三「李將軍果勢壯勇、其言是也。」

④『禮記』曲禮上「三十曰壯、有室、」『易經』「大壯」『經典釋文』「大壯壯亮反、

威盛強猛之名、鄭云、氣力浸強之名、王肅云、壯盛也。」

⑤『漢書』武五子傳第三十三「少壯、詔受公羊春秋、又從瑕丘江公受穀梁。」

⑥『史記』項羽本紀第七「楚漢久相持未決、丁壯苦軍旅、老弱罷轉漕。」

⑦『後漢書』馬援列傳第十四「丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯。」

⑧『漢書』東方朔傳第三十五「受賜不待詔、何無禮也。拔劍割肉、壹何壯。割

之不多、又何廉也。」

⑨『後漢書』吳蓋陳臧列傳第八「戎羯喪其精膽、羣帥賈其餘壯。」

⑩『後漢書』文苑列傳第七十下「衡方爲漁陽參摺、蹀躞而前、容態有異、聲節悲壯、聽者莫不慷慨。」

⑪『漢書』外戚傳第六十七下「我兒男也、額上有壯髮、類孝元皇帝、」注「師

古曰、壯髮、當額前侵下而生。」

⑫『正字通』丑集中「醫用艾灸、一灼謂之一壯。陸佃曰、以壯人爲法、老幼羸

弱依法量力減之。」

【熾】火のもえあがる如くに盛んなり。「炭を熾す」①に用いる。「熾盛」②「昌熾」③「熾隆」④などと用いる。「爇熾」⑤「煽熾」⑥などは火のもえ上るなり。「死灰復

熾なり」⑦、同じ。

①『左傳』昭公十年「及喪、柳熾炭于位。」

②『漢書』匈奴傳第六十四下「初、北邊自宣帝以來、數世不見煙火之警、人民

熾盛、牛馬布野。」

- ③『説苑』建本「夫穀者、國家所以昌熾、士女所以姣好」。
- ④潘岳『在懷縣作二首』二『文選』卷二十六「我來冰未泮、時暑忽隆熾」。
- ⑤『詩經』商頌・長發「如火烈烈、則莫我敢曷」、鄭箋「其威勢如猛火之炎熾、誰敢禦害我」。
- ⑥潘岳『馬汧督誅』「聲勢沸騰、種落煽熾」。
- ⑦明・馬中錫『陳言封事』「夫稂莠不除、終能害穀、死灰復熾、猶可燎原、臣所謂滋蔓之虞者」。

【藹】盛多貌なり①。形容字なり。詩經に「藹藹として王に吉士多し」②、文選に「春霧朝暉藹藹たり」③、繁茂の貌。「春藹」④「明藹」⑤「香藹」⑥「芳藹」⑦など用いる。

- ①『爾雅』釋訓「藹藹、濟濟、止也」、郭注「皆賢士盛多之容止」。
- ②『詩經』大雅・卷阿「藹藹王多吉士、維君子使、媚于天子」、毛傳「藹藹猶濟濟也」。
- ③鮑照『紹古辭七首』七「春風夜嫵娟、春霧朝暉藹」。
- ④陸龜蒙『酬襲美見寄海蟹』「骨清猶似含春藹、沫白還疑帶海霜」。
- ⑤韓愈『秋雨聯句』「庭翻樹離合、牖變景明藹」。
- ⑥劉長卿『長沙館中與郭夏對雨』「香藹江天外、空堂生百憂」。
- ⑦曹植『洛神賦』『文選』卷十九「微幽蘭之芳藹兮、步踟躕於山隅」、注「善曰、芳藹、芳香暉藹也」。

【茂】上に見える。

【蕃】上に見える。

【殷】盛多の義なり①。「憂心殷殷たり」②「禮樂彌いよ殷なり」③「師旅方に殷な

- り」④「富殷」⑤「阜殷」⑥「民殷なり」⑦などなり。又「殷勤」⑧は念の入りに、ねんごろなることなり。人のあしらいに用いる。又詩などには、くり返して言うことなり。「殷懃」にも作る。「殷懃に好く去れ、武陵の客」⑨という句、人多く懐會す。「好去」とは、別れに臨んでの辭なり。常にようごされというと同じ。「好去好去」とくりかえしているということも、「殷懃好去」といいたるなり。又去聲の時、雷のなる聲なり⑩。又刪山の韻に入りて、「アン」の音の時、赤色なり、血色なり⑪。

- ①『說文解字』「殷、作樂之盛稱殷」。
- ②『詩經』邶風・北門「出自北門、憂心殷殷」。
- ③『晉書』志第十二樂上「炎漢中興、……濟濟焉、皇皇焉、有足觀者、自斯厥後、禮樂彌殷」。
- ④『新唐書』列傳第八十二陸贄「今師旅方殷、瘡痛呻吟之聲未息」。
- ⑤『後漢書』宣張二王杜郭吳承鄭趙列傳第十七「王丹、字仲回、京兆下邳人。……邑聚相率、以致殷富」。
- ⑥張衡『西京賦』『文選』卷二「徒以地沃野豐、百物殷阜」。
- ⑦『後漢書』杜欒劉李劉謝列傳第四十七「夫欲民殷財阜、要在止役禁奪、則百姓不勞而足」。
- ⑧『史記』樂書第二「上自朝廷、下至人民、得以接歡喜、合殷勤」。
- ⑨陳羽『伏翼西洞送夏方慶』「洞裏春晴花正開、看花出洞幾時迴、殷懃好去武陵客、莫引世人相逐來」。
- ⑩『詩經』召南・殷其雷「殷其雷、在南山之陽」、毛傳「殷、雷聲也」。
- ⑪『左傳』成公二年「余折以御、左輪朱殷」、杜注「朱、血色、血色久則殷、殷音近煙、今人謂赤黑爲殷色」。

【阜】厚大なる丘をいうより、盛んなるに用いる。隆に似て高の意なし。「蕃阜」①「阜盛」②など用いる。

- ①『宋史』志第九十樂十二「百物蕃阜、四方順成、通其八蠶、合乃嘉平」。

②王融『奉和竟陵王郡縣名』、『藝文類聚』卷五十六「往食曲阜盛、今屬平臺遊」。

【榮】「さかゆ」とよめども、もと花さくという字なり①。「艸木榮く」②「百花榮く」③「木欣欣として以て榮くに向ふ」④。又「榮枯」⑤「榮衰」⑥と反對す。又花のことに用いる。「四皓、榮を南山に采る」⑦「睡として春の榮の若し」⑧「顔、若の榮の若し」⑨の類なり。又轉用して、「榮」「は」辱の反對なり、その時はもの規模なること、外聞のよきことをいう。「辱」は外聞あしきことなり。「其の生るときは榮」⑩「安富尊榮」⑪「恩榮」⑫「軒冕の榮」⑬「錦を衣るの榮」⑭の類なり。又韓非子に「仲尼、政を魯に爲す。齊、女樂を哀公に遺て、以て其の志を驕榮にす」⑮というは、その心をおごらせ、餘勢めかせることなり。少しく異なるようなれども同意なり。これ皆艸木花さけば、人賞翫し、花の色あたりにてりかがやくによりて、外聞餘勢の意に轉用したるなり。ただ「さかゆる」と訓にては通じず。又人の身に「榮衛」⑯あり。「榮血衛氣」にて、血は人の色をよくする徳あるゆえ、花さく意にとりて、「榮氣」⑰というなり。又「東榮」⑱はひがしのきなり。

- ①『爾雅』釋草「木謂之華、草謂之榮」。
- ②『荀子』王制「聖賢良主之制也、草木榮華滋碩之時、則斧斤不入山林、不夭其生、不絕其長也」。
- ③魏收『喜雨詩』「神山千葉照、仙草百花榮」。
- ④陶淵明『歸去來辭』、『文選』卷四十五「木欣欣以向榮、泉涓涓而始流」。
- ⑤『後漢書』馮岑賈別傳第七「軼本與蕭王首謀造漢、結死生之約、同榮枯之計」。
- ⑥孟郊『罪松』「天令設四時、榮衰有常期」。
- ⑦『漢書』揚雄傳第五十七下「夫蘭先生收功於章臺、四皓采榮於南山」。
- ⑧曹植『與吳季重書』、『文選』卷四十二「睡若春榮、瀏若清風」。
- ⑨『史記』趙世家第十三「美人榮榮兮、顏若若之榮、命乎命乎、曾無我贏」。
- ⑩『論語』子張「其生也榮、其死也哀」。
- ⑪『孟子』盡心上「君子居是國也、其君用之、則安富尊榮」。

⑫杜甫『端午日賜衣』「宮衣亦有名、端午被恩榮」。

⑬李白『經亂離後天恩流夜郎憶舊遊書懷贈江夏韋太守良宰』「試涉霸王略、將期軒冕榮」。

⑭『北史』列傳第五十五令狐整子熙「以公勳望、應得本州、但朝廷藉公委任、無容遠出。然公一門之內、須有衣錦之榮」。

歐陽脩『書錦堂記』「二介之士、得志當時、而意氣之盛、昔人比之衣錦之榮也」。

⑮『韓非子』六微第三十一「仲尼爲政於魯、道不拾遺。齊景公患之。犁且謂景公曰、去仲尼、猶吹毛、君何不迎之以重祿高位、遺公女樂、以驕榮其志」。

⑯『正字通』辰集中「榮衛、人之一身、榮、血也、衛、氣也、血勝則色榮」。

⑰『素問』熱論「五藏已傷、六府不通、榮衛不行、如是之後、三日乃死」。

⑱『禮記』喪大記「士妻以稅衣、皆升自東榮」、注「榮、屋翼、升東榮者、謂卿大夫也」。

3〇さかふ

逆忤（二、六十号裏）

【逆】順の反對なり。ものの順ならぬをいう。「横逆」①「舛逆」②などと連用す。重く用いる時は、「叛逆」③「逆亂」④など。又「大逆無道」⑤。「大不敬」⑥は、漢の法に罪惡の次第を分かつ名なり。佛書に「五逆十惡」⑦あり。又「逆生」⑧は、さかさまにはえること、又女の産をするに、子のさかさまに生まれることなり。「逆鱗」⑨は、龍の領の下に下より逆にはえたる鱗あり、これにさわもの死するを、君の怒りにふれるに喩える。「逆上」⑩「逆流」⑪など。又「むかふる」とよむ。來るものあるに、この方よりさかからいて、その方へゆく意ゆえ、「むかふる」とよむ。

「女を逆ふる」⑫は親迎のことなり。「目逆」⑬とは、目にてみむかえることなり。又「覆逆」⑭というは、下より奏聞する上書を「復」といい、それをうけとるを「逆」という。「莫逆の交」⑮とは、心の合いたる友をいう。莊子に出づ。

①『孟子』離婁下「有人於此、其待我以橫逆、則君子必自反也。」

②『漢書』賈誼傳第十八「本末舛逆、首尾衡決、國制搶攘、非甚有紀、胡可謂治。」

③『史記』平津侯主父列傳第五十二「今諸侯有畔逆之計、此皆宰相奉職不稱。」

④『史記』吳王濞列傳「逆亂之萌、自其子興。」

⑤『史記』高祖本紀第八「今項羽放殺義帝於江南、大逆無道。」

⑥『漢書』昭帝紀第七「太常及廟令丞郎吏、皆劾大不敬、會赦。」

⑦『觀無量壽經』「五逆十惡、具諸不善。」

⑧『論衡』奇怪「禹高逆生、闔母背而出。」

⑨『韓非子』說難「夫龍之蟲也、柔可狎而騎也。然其喉下有逆鱗徑尺、若人有嬰之者則必殺人。人主亦有逆鱗、說者能無嬰人主之逆鱗、則幾矣。」

⑩『晏子春秋』內篇・問下・叔向問正士邪人之行如何晏子對以使下順逆「邪人則不然、用于上則虐民、行于下則逆上。」

⑪『管子』七法「不明於決塞、而欲毆衆移民、猶使水逆流。」

⑫『春秋』隱公二年「九月、紀裂繻來逆女。」

⑬『左傳』桓公元年「宋華父督見孔父之妻于路、目逆送之、曰、美而豔。」

⑭『正字通』申集下「官府吏文之申請于上者、曰申、曰覆。」

『周禮』天官・宰夫「諸臣之復、萬民之逆、鄭注「自下而上曰逆、逆謂上書。」

『周禮』夏官・太僕「掌諸侯之復逆」、注「鄭司農云、復謂奏事也、逆謂受下奏」。

⑮『莊子』大宗師「四人相視而笑、莫逆于心、遂相與爲友。」

【忤】心にさからうことなり。「客忤」①は、小兒の知らぬ人を見て、それより煩うをいう。

①孫思邈『備急千金要方』第五上少小嬰孺方上客忤第四「少小所以有客忤病者、是外人來氣維其息忤之、一名中人、是爲客忤也。」

4〇ㄨ

裂 坼 剖 割 劈 擘 綻 析 殺 (三、四十六号裏)

【裂】ひろき字なり。大きくさけるも、少しひびわれるも、この字なり。

【坼】もと土の早にひびわれるをいう①。又「背坼て生まる」②などということあり。裂の字と同用。

①『禮記』月令「仲冬之月、……氷益壯、地始坼。」

②『史記』楚世家第十一「吳回生陸終。陸終生子六人、坼剖而産焉、『集解』「干寶曰、……若夫前志所傳、修己背坼而生禹、簡狄胸剖而生契、歷代久遠、莫足相證。」

【剖】さき開く義なり。「腹を剖き腸を出す」①などといえり。「竹を剖く」②「木を剖く」③など用いる。皆わかることなり。わかるにも、さけるには用いず。「理を剖く」④「義を剖く」、分開の義なり。

①『晉書』列傳第二十一皇甫謐「若黃帝創制於九經、岐伯剖腹以觴腸。」

②『史記』趙世家第十三「襄子齊三日、親自剖竹、有朱書。」

③『金樓子』志怪第十一「王大怒、欲誅優師、優師大怖、乃剖木以示王。」

④黎遂球『易史』自序『經義考』卷六十三引「昔仲尼至聖作春秋紀二百四十年之事、於易作十翼。蓋書三絶其章編云、夫數所以剖理也、所以成理也。」

【割】「さく」とよめども、きり取ることなり。右の割の字は「剖開」①と連用し、これは「割去」②「割取」③と連用す。「耳を割く」④「首級を割く」⑤「勢を割く」⑥「股肉を割く」⑦、皆きりとることなり。又「割斷」⑧と連用して、決斷することにも用いる。「割捨」⑨は思いきることなり。

①『西遊記』屍魔三戲唐三藏 聖僧恨逐美猴王「好猴王、他在馬前橫擔著棒、剖開山路、上了高崖、看不盡」。

②『白虎通德論』五刑「宮者、女子淫、執置宮中、不得出也。丈夫淫、割去其勢也」。

③『金匱要略』雜療方「雄雞冠割取血、管吹內鼻中」。

④『北史』列傳第七十九列女・鄭善果母崔氏「寧當母割耳剪髮、以明素心」。

⑤『明史』列傳第一百二十六・如松「明旦、如松下令諸軍無割首級、攻圍缺東面」。

⑥『晉書』志第二十刑法「劉頌請復肉刑表曰、亡者刑足、無所用復亡、盜者截手、無所用復盜、淫者割其勢、理亦如之」。

⑦『莊子』盜跖「介子推至忠也、自割其股以食文公」。

⑧『後漢書』循吏列傳第六十六「爲太守陳寵功曹、當職割斷、不避豪右」。

⑨『殺狗記』第二十齣「只聽結義相調引、割捨背義忘恩」。

【劈】斧にて打ちわることなり。「薪を劈く」①「山を劈く」②。「劈初頭」③はてへんよりということ、「劈面」④はてきめんの意なり。

①明・羅圯『晚耕爲謝邦碩父作』「乞火燒畚到鹽竈、劈薪借斧走東鄰」。

②顧況『廬山瀑布歌送李顓』「火雷劈山珠噴日、五老峰前九江溢」。

③『朱子語類』大學一・綱領「如中庸之書、劈初頭便說天命之謂性」。

④楊萬里『日斜再行宿烏山』「日已衰容去、風仍劈面來」。

【擘】手にてひきさくことなり。「擘を擘く」①「橙皮を擘く」「餅を擘く」などな

り。「擘窠」③というのは、大字を書する時間つもりをして書くことなり。

①韓愈『晚寄張十八助教周郎博士』「晴雲如擘絮、新月似磨鎌」。

②『掃迷帚』第六回「妓訝其太速、甲以母言告、卽擘餅令啖」。

③顏真卿『乞御書天下放生池碑額表』「緣前書點畫稍細、恐不堪經久、臣今謹據石擘窠大書一本、隨表奉進」。

【綻】ほころぶるなり。衣服に用いる。又花のつぼみのはつれたることに用いる。又事のほころびて露あわれることにも「破綻」①と用いる。

①『三國演義』渡瀘水再縛番王 識詐降三擒子孟獲「吾知子獲頗曉兵法、吾以兵馬糧草炫耀、實令孟獲看吾破綻、必用火攻」。

【析】「さく」。「薪を析く」①など。「骨を析きて爨ぐ」②は、骨を薪にすることなり。又分析の義、ものをわけることなり。「家産を析る」③、身代をわけることなり。

「理を析る」④「疑を析る」⑤。

①『詩經』齊風・南山「析薪如之何、匪斧不克」。

②『史記』宋微子世家第八「析骨而爨、易子而食」。

③黃庭堅『曹侯善政頌序』「其二女析其父家産之半而業」。

④『晉書』列傳第十三樂廣「尤善談論、每以約言析理、以厭人之心、其所不知、默如也」。

⑤陳夢雷『送官子之蓋州序』「余設塾、官子從余授一經、……與語輒領悟、析疑問難、或發余所未及者」。

【殺】「サイ」の音にて、豊の反對、隆の反對なり。竹などを切りそぎにするは「批」なり、ものをそぎとる、そぎすつるは「割」の字なり、鳥の羽をそぐは「鍛」の字なり。この「そぐ」はその類に非ず。次第劣り、だんだんぼそにすることなり。袖なりなどを裁つようになることをいう。「降殺」①「滅殺」②などと連用す。

- ①『左傳』襄公二十六年「子產辭邑，自上以下，降殺以兩，禮也」。
 ②『晉書』列傳第三十四・武十三王・琅邪悼王煥「凶荒殺禮，經國常典，既滅殺而猶過舊，此爲國之所厚惜也」。

5〇やごはひ

富 福（五、三十一号表）

【富】「とむ」。訓の如し。ぶげん「分限、金持ち」なり、しんだいよしなり。「春秋

富」①とは、年のわかきことなり。轉用して「學富む」②「材富む」③。

- ①『史記』呂太后本紀第九「今高后崩、而帝春秋富、未能治天下、固恃大臣諸侯」。

②岑參『冀州客舍酒酣贈王綺寄題兩樓』「學富贍清詞、下筆不能休」。

③『新唐書』列傳第一百二十六文藝上崔信明「及長、強記、美文章。鄉人高孝基嘗語人曰、崔生才富、爲一時冠、但恨位不到耳」。

【福】和語に「フク」というを富の字のように覺える、非なり。「福」は果報くわんごうよきなり。富に限ることに非ず。洪範の「五福」①にて知るべし。

- ①『書經』洪範「五福、一曰壽、二曰富、三曰康寧、四曰攸好德、五曰考終命」。

6〇やごし

智 哲 睿 敏 慧 穎 聰（六、四十二号裏）

【智】「さとし」と訓ず。愚の反對なり。理の明らかなる人なり、分別者なり、ものしりなり。世にいうりこう、りはつのことには非ず。

【哲】「さとし」と訓じ、「ものしり」と訓ず。愚の反對なり。理の明らかなるを「智」

といい、事の明らかなるを「哲」というという説あれども、鑿説なり。但し「智」は心に具する徳なり、「哲」は智の明らかなるをいう。故に「有智」①「無智」②「大智」③「小智」④といえども、哲の字にはさよりの連屬なきなり。

- ①『漢書』霍光金日磾傳第三十八「安上字子侯、少爲侍中、惇篤有智、宣帝愛之」。

②『莊子』人間世「聞以有知知者矣。未聞以无知知者也」。

③『禮記』中庸「舜其大知也與、舜好問而好察邇言」。

④『史記』屈原賈生列傳第二十四「小知自私兮、賤彼貴我」。

【睿】「さとし」と訓ず。「思に睿と曰ふ。睿は聖と作る」①といえり。思慮して通じずということなきをいうなり。天子を尊んで「聖」と稱する②ゆえ、「睿慮」③「睿思」④「睿覽」⑤「睿藻」⑥などという詞あり。皆天子の上をいう。明朝には天子に「聖」の字を用い、親王に「睿」の字を用いる。

- ①『書經』洪範「思曰睿、恭作肅、從作叡、明作哲、聰作謀、睿作聖」。
- ②『史記』秦始皇本紀・會稽刻石「秦聖臨國、始定刑名、顯陳舊章」。
- ③李德裕『諫敬宗搜訪道士疏』《舊唐書》列傳第一百二十四李德裕「儻陛下睿慮精求、必致眞隱」。

④顏延之『車駕幸京口侍遊蒜山作』《文選》卷二十二「睿思纏故里、巡駕匪舊垧」。

⑤錢起『蓋地圓賦』「廣豎亥之遐步、資重華之睿覽」。

⑥柳宗元『爲京兆府請復尊號第三表』「道德純備、禮樂興行、宸翰動於三光、睿藻窮於六義、此文之備也」。

【敏】「さとし」とも、「とし」とも訓ず。才知徳行の上にて、敏速なることをいう。大抵は才知の上を用いる。されども「事に敏し」①「行に敏し」②などと用いる。「不敏」③は謙詞なり。鈍の反對なり。

①『論語』學而「敏於事而慎於言、就有道而正焉。」

②『論語』里仁「君子欲訥於言、而敏於行。」

③『儀禮』士冠禮「賓對曰、某不敏、恐不能共事、以病吾子、敢辭。」

【慧】「さとし」「かしこし」とよむ。細かなる智のかしこきをいう。故に智に對すれば小さきなり。小人女子の智に多く用いる。

【穎】「さとし」と訓ず。禾ののぎなり①。知のはしかきことなり。「穎利」の義より用いるなり。「穎悟」②「穎敏」③の類なり。

①『說文解字』「穎、禾末也。」

②『晉書』列傳第十三王戎「戎幼而穎悟、神彩秀徹、視日不眩。」

③『元史』列傳第二十二「達禮麻識理」「幼穎敏、從師授經史、過目輒領解。」

【聰】「さとし」と訓ず。耳のさときなり。聞きて通じのはやきことなり。

7〇さかし

黠 狡 猾 賢 佞 (六、四十二号表)

【黠】「さかし」「こざかし」と訓ず①。こりこうなることなり。痴の反對なり。智とは別なり。

①『揚子方言』「黠、慧也。趙魏之間、謂之黠。」

【狡】【猾】共に「さかし」と訓ずれども、ひすらこきことなり、わるさなることなり。「狡兒」①「猾兒」②はわるさをする小兒をいう。「猾吏」③「狡吏」④はいたづらをする役人をいう。皆奸智をいうなり。

①鄭善夫『送司徒孫公歸安陸五十韻』「黔首殲金氣、旄頭直玉墀、豈惟餘狡兒、

遽使有鴟夷。」

②『金瓶梅』第七十六回春梅嬌撒西門慶 畫童哭躲溫葵軒「今日前邊恁擺酒、俺們都在這裡定果盒、忙的了不得、他到落得在屋裡躲猾兒。」

③『後漢書』酷吏列傳第六十七「朝廷不以長不肖、使牧黎民、性讎猾吏、志除豪賊且勿相識。」

④蕭仿『蕪州謝上表』「必使獄絕冤人、巷無橫事、峻法鈐轄於狡吏。」

【賢】「さかし」とよむ。聖の次なり。又人にまさることなり。又「賢孝」とは賢良科孝廉科の省言にて貢士をいう。「賢書」①は貢士にあげられるをいう。

①沈德符『敝帚軒剩語』汪徐相仇「汪歸應試、卽以是年登賢書。」

【佞】「さかし」とよむ。口のききたることなり。「奸佞」①「佞惡」②などいうは、口のききたる人は必ず小人なる故なり。されども古はよきことになりたる故、自ら謙退して「不佞」③という。

①『漢書』翟方進傳第五十四「皆知陳湯姦佞傾覆、利口不軌。」

②『後漢書』朱樂何列傳第三十三「專心公朝、割除私欲、廣求賢能、斥遠佞惡。」

③『左傳』成公十三年「寡人不佞、其不能以諸侯退矣。」

8〇さる

去 違 避 除 距 屏 遠 (後一、十号表)

【去】來の反なり、在の反なり。「去來」「往來」と似たるようなれども、「往」はかしこにゆくなり、「去」はこをさるなり。語のたてようちがいあるなり。又俗語にはなはだ軽く使うことあり。「吃を去る」は、くてのけたということ、「罷を去る」、やめてのけた、「手を開き去る」は、手を離してのけたというほどのことなり。

【違】「よむ」ともよむ①。元來はなれることなり。今はなれるに用いることあり、もとはなれたるに用いることあり。論語に「之を違て一邦に之く」②は、今はなれることなり。中庸の「忠恕、道を違ること遠からず」③は、忠恕と道との間がもたら遠ざかりてないということなり。これは違の字をもちからはなれたるに用いるなり。

- ①『禮記』表記「事君三違、而不出境、則利祿也」、注「違、去也」。
②『論語』公冶長「違之一邦」。
③『禮記』中庸「忠恕違道不遠、施諸己而不願、亦勿施於人」。

【避】辟・僻、相通し用いる。「よむ」とも、「さける」ともよむ。「よける」と譯してよくきこえるなり。この方よりよけにげるなり。俗に「川避」「水避」などのよけに用いるはあしし。それはこの方よりよけさせる意なり。論語の「世を辟」「よける」「地を辟」「よける」①、禮記に「一咄を辟て之に詔く」②、史記に「廉頗を望見して、車を引きて避匿」「よけかくる」す③の類なり。

- ①『論語』憲問「賢者辟世、其次辟地」。
②『禮記』曲禮上「負劔辟咄詔之則掩口而對」。
③『史記』廉頗藺相如列傳第二十一「已而相如出、望見廉頗、相如引車避匿」。

【除】「よむ」とも、「のぞく」ともよむ。はらいさるなり。わきへかたづけしてしまふ意なり。書經に「惡を除」「はら」い本を務む①、左傳に「蔓草、除」「はらふ」る可からず②、詩經に「日月其れ除らん」③、又「風雨の除く所」④の類なり。

- ①『書經』泰誓下「樹德務滋、除惡務本」。
②『左傳』隱公元年「蔓草猶不可除、況君之寵弟乎」。
③『詩經』唐風・蟋蟀「今我不樂、日月其除」。
④『詩經』鴻鴈之什・斯干「風雨攸除、鳥鼠攸去、君子攸手」。

【距】「よむ」とも、「こゆる」ともよむ。のきあいておることなり。「海を距」「のきをよむ」ること幾里①などなり。海とおのきておることなり。

- ①白居易「自蜀江至洞庭湖口有感而作」「導岷既艱遠、距海無咫尺」。

【屏】屏の俗字なり。元來「しりぞく」とよむゆえ、「よむ」ともよむなり。外へとりかたつけておく意なり。書經に「壁と圭を屏」「とりかたつけ」ん①、禮記に「之を遠方に屏」「しりぞく」る②の類なり。

- ①『書經』金縢「爾不許我、我乃屏壁與珪」。
②『禮記』王制「不變、屏之遠方、終身不齒」。

【遠】①

①題目にはあげているが、本文にはない。「遠」は「とほし」の項にあり。

9〇さへる

探 索 度（後一、廿五号表）

【探】向うのようすのしれぬものを、さぐりもとめるなり。うかがいさぐる意なり。易經に「頤を探り隱を索む」①、穀梁傳に「已に先君の邪志を探る」②、前漢に「春秋は深く其の本を探る」③、又「湯を探る」④「虎口を探る」⑤の類なり。

- ①『易經』繫辭傳上「探賾索隱、鈎深致遠、以定天下之吉凶、成天下之亹亹者、莫大乎蓍龜」。
②『穀梁傳』隱公元年「已探先君之邪志、而遂以與桓」。
③『漢書』董仲舒傳第二十六「春秋深探其本、而反自貴者始」。
④『論語』季氏「見善如不及、見不善如探湯」。
⑤『史記』酈生陸賈列傳第三十七「足下起糾合之衆、收散亂之兵、不滿萬人、欲以徑入強秦、此所謂探虎口者也」。

欲以徑入強秦、此所謂探虎口者也。

【搜】控と同じ。あつたもののみえぬをさぐりとするなり。前漢に「三輔騎士を發して、大いに上林を控る」①、韓文に「旁く控て遠く紹ぐ」②の類なり。

- ①『漢書』武帝紀第六「冬十一月、發三輔騎士大搜上林、閉長安城門索。」
②韓愈『進學解』「尋墜緒之茫茫、獨旁搜而遠紹。」

【索】【瘦】二字とも、「さぐる」とよむ。搜と同義なり。周禮に「室を索めて疫を毆る」①、前漢に「私の屠沽を瘦索す」②の類なり。すべて家のうち、筥はの内などのしれぬものをさぐるに多く用いる。「搜索」③「霑索」④と連す。

- ①『周禮』夏官・方相氏「帥百隸而時難、以索室毆疫。」
②『漢書』趙尹韓張兩王傳第四十六「直突入其門、瘦索私屠酤、椎破盧囂。」
③『春秋繁露』五行逆順「閉門問、大搜索、斷刑罰、執當罪、飭關梁、禁外徙。」
④『宋史』本紀第二十九高宗六「金國使來、盡割河南陝西故地、通好于我、許還梓宮及母兄親族、餘無霑索。」

10 ○さぶ

献 捧 擊 奉 上 (後一、廿九号裏)

【献】獻と同じ。目うえにさしあげることなり。故に貴人へものを贈るを「献す」といふなり①。宗廟のことに多く用いる。

- ①『爾雅』釋詁「享、獻也」、疏「致物於尊者曰獻。」

【捧】兩手を高くさしあげ、物をうけることなり。元來奉の字なり。奉をひろく用いる故、この字できたるなり。

【擊】高くさしあげてもつなり。

【奉】捧の字と同じ。又「たてまつる」とよむ。「たてまつる」とは、貴人に物をやることなり。彼は貴く吾れは賤しき間、手を高くさしあげる意なり。物をやる時には吾が手がふせるなり。物を手に(手に)のせたる形は、手仰げて物をうける形なり。故に元來手を高くさしあげて物をうけるという字を、たてまつることに用いる。但し「奉謁」①「奉和」②「奉陪」③などの奉の字を「たてまつる」とよむはあしし。これはただつけ字と意得べし。「うくる」というが、向うをあげる辭なり。又やしないのことを「奉美」と連屬す。衣食の類、吾が身をうける物なれば、「俸祿」④の俸も元來奉の字なり。又「君を奉ず」⑤などは君をもちたてるなり。

- ①『水經注』卷六・汾水「跪曰、管涔王使小臣奉謁趙皇帝。」
②杜甫『奉和賈至舍人早朝大明宮』「五夜漏聲催曉箭、九重春色醉仙桃。」
③『桃花扇』第五出訪翠「老漢無事、便好奉陪。」
④『後漢書』左周黃列傳第五十一「有志操者、加其俸祿。」
⑤『左傳』襄公二十三年「桓子曰、奉君以走固宮、必無害也。」

【上】元來「下」の字と對するなり。ものうえにする意なり。それより「あぐる」とも、「たてまつる」ともよむ。奉疏書簡などに多く用いる。

11 ○ささぶ

支 拄 撐 攔 遮 障 礙 (後一、三十号裏)

【支】はりありておることなり。「支持」①などと用いる。

- ①『淮南子』本經訓「標株構樞、以相支持。」

【拄】【撐】つきはることなり。杖をつくことを「杖を拄く」①という。杖はつつはりてつくものなればなり。

①魏武帝『陌上桑』「食芝英、飲醴泉、拄杖桂枝佩秋蘭。」

【攔】「さなぶ」とよむ。元來關に從う字ゆえ、しきりをして、それより外へ出ださぬようにさなえたるなり。

【遮】「さえぎる」とよむ。横合いよりふせぎとめる意なり。『漢王を遮り説く』①、又「兵を伏して撃を遮る」②の類なり。廣き字なり。

- ①『史記』高祖本紀第八「新城三老董公遮説漢王以義帝死故。」
- ②『後漢書』班梁列傳第二十七「超伏兵遮擊、盡殺之持其使者以示謝。」

【障】「さなゆる」とよむ。「さえぎる」ともよむ。ものの中にはいり、立ちふさがつてさえぎるなり。へだてをする意なり。

【礙】「さなぶ」とよむ。さわりになり、じやまになつてふせぎとめる意なり。

12〇さす

指 差 刺 挿 挾 扱 夾 掖 搯

【指】ゆびさすなり。さしづをするに用いる。「指畫」①「指示」②「指麾」③「指使」④など連用す。「頤指」⑤は、おとがいでさしづをすることなり。前漢にあり。

- ①『禮記』玉藻「凡有指畫於君用笏。」
- ②『漢書』蕭何曹參傳第九「夫獵、追殺獸者狗也、而發縱指示獸處者人也」、注「師古曰、指示者、以手指示之。」
- ③『荀子』議兵「拱挹指麾、而彊暴之國、莫不趨使。」
- ④『禮記』曲禮「六十曰耆、指使」、注「指事使人也。」

⑤『漢書』賈誼傳第十八「今陛下力制天下、頤指如意、注一如淳曰、但動頤指麾、則所欲皆如意。」

【差】「使なり」①と注す。元來「さなぶ」とよむ字なり。それよりこれがよいとさしづをすることに用いる。故に「さす」と訓ず。唐宣宗詔に「凡役事委令輪差す」

- ②。初篇（卷六）「あやまる」の項にくわし。
- ①『正字通』寅集中「皆韻、音釵、使也。」
- ②『康熙字典』工部・差「韻會、差、使也。唐宣宗詔、凡役事委令輪差。」

【刺】「さす」とよむ。とげのたつことなり。針をさすにも用いる①。又人をさしころすにも用いる②。

- ①『廣韻』卷四「針、刺。」
 - ②『爾雅』釋詁「刺、殺也。」
- 『春秋』僖公二十八年「公子賈戍衛、不卒戍、刺之、」、『公羊傳』「刺之者何、殺之也。」

【挿】挿、同じ。さしこむなり。「さしはさむ」とよむ。「露檄、羽を挿む」①の類なり。

- ①『漢書』高帝紀下第一下「吾以羽檄徵天下兵、未有至者、今計唯獨邯鄲中兵耳」、師古注「魏武奏事云、今邊有警、輒露檄挿羽。」

【挾】ふたつあるものにてはさむなり。

【夾】挾と同じ。

【扱】指のまたにてしめることなり。

【掖】わきはさむなり。

【搢】さしはさけるなり。

13〇さげぶ

號 叫 鳴 啼 泣 哭 嘒 轉 哢 (後二、三十八号)

【號】「叫」二字とも、さげぶよばれることなり。「號」は大音にてよばれるなり①、

「叫」はきわどくよばれるなり。二字ともによぶことにも用いる。叫の字をよぶこととするは俗語ばかりなり。二字ともひろき字なり。人物禽獸にかぎらず、何にも使うなり。

①『詩經』大雅・蕩之什・蕩「式號式呼、俾晝作夜」。

【鳴】「なく」とよむ。秋嘆してなくことにはあらず。元來「なる」とよむ字なり。

艸木金石、一切無情のものにても、聲さえあれば「なる」というなり①。有情の内にも、聲に節のなきは「なる」というなり。又「世に鳴る」などは、その名の世間になりわたることなり。

①『正字通』亥集中「増韻、凡出聲者皆曰鳴」。

『禮記』學記「叩之以小則小鳴、叩之以大則大鳴」。

【啼】聲をたてて、涙を流さずなくなり。詩家、鳴の字と同じことに用いれども、

連屬の字により、意味格別なり。思量すべし。

【泣】涙をながし、聲をたてずなくなり。

【哭】涙をながし、聲をあげてなくなり。鳥獸の内にも、猿のなくばかりは、わけてあわれなるものゆえ、哭の字を用いる。

【嘒】鳴く聲のほそきなり。虫のなくに用いる①。

①張祜『秋霽詩』「何妨一蟬嘒、自抱木蘭叢」。

【轉】「哢」二字ともに、「さえつる」とよむ。鳥のなくなり。「轉」は圓轉流利とて、音の自由にて、ころころとまわるようなるを「轉」という。「哢」はものをもてあそぶように、聲にきよくのあるをいうなり。

14〇さむ

覺 寤 醒 (後三、三十号表)

【覺】「カウ」の音にて、目のさめることなり①。「一覺」というときは、倭語の一ねざめねたという意なり。夢のさめるにも用いる②。

①『公羊傳』昭公三十一年「叔術覺焉、何注「覺、悟也」。

②『史記』高帝本紀第八「後人至高祖覺」、注「覺、謂寢寐而寤也」。

【寤】^な半ばさめることなり①。左傳の「寤生」②にて會すべし。

①『說文解字』「寐覺而有言曰寤」。

②『左傳』隱公元年「莊公寤生、驚姜氏、故名曰寤生、遂惡之」。

【醒】酒のさめるなり。睡りや夢のさめるにも用いる。

1〇しずか

閑 靜 靖 恬 寂寞 寥 闕 舒 徐 謐 (一、初号表)

【閑】は「ひま」と譯す、又「むだ」と譯す。忙の字の反對なり。張籍が詩に「竹院を過ぎて僧に逢ひて語るに因りて、又浮生半日の閑を得たり」①といえる句を、佛印に對して東坡吟じければ、「佛印曰く、學士は半日を閑了す、老僧は半日を忙了す」②と。又「宋の時、日本國より本國神光寺の記を求む。舍人、工ならずと辭し、學士張君房をして之に代らしむ。張潜かに市樓に飲む。舍人大いに窘(こまる)す。時に种放、司諫を以て華山に歸る。楊大年、閑忙令と爲りていう、世上何人か最閑なりと號す、司諫、衣を拂て華山に歸る。世上何人か最忙しと號す、紫微失卻す張君房と」③。この類にて閑の字の義明らかなり。左傳に「執事の閑ならざる(ひまなき)に逢ふ」④、李白が詩に「且く一壺の酒に對して、淡然として萬事閑なり」⑤、張籍が詩に「公事閑多くして詩更に工なり」⑥。「閑人」⑦は、ひま仁なり、むだものなり、無用の人なり。「閑議論」⑧は、ひまなままのむだせんぎなり、無用の論なり。「閑官」⑨「閑職」⑩はひまな役なり。晉書に「郗愔、徐亮一州の刺史爲り。其の子超爲に賤を作りて、老病を陳し、閑地を乞ひて自ら養ふ」⑪といえるも、公用少なき國の守護を願いたることなり。又主なきあき地をも「閑地」⑫といふ。俗語に「空閑」はひまなることなり。「貴閑」は御ひまという詞なり。「空閑の地」⑬というは、主なくて人のかまわぬ地をいう、「散(いらぬ)地」の意なり。閑・散の二字、義もとより通用す。韓文に「投閑置散」⑭といえるは、前後の意、官職のことをいえるによりて、閑官散職に投置れることなり。古より閑の字を「しづかなり」と訓ず。勿論ひまなというは、しづかなるというは、俗語通用することもあれども、しづかなるというは意廣き詞なるゆえ、親切ならず。且靜の字などとも混ざる失を招く、味わうべし。「閑雲」⑮「閑鷗」⑯「鳥聲閑」⑰「儀靜體閑」⑱「野興閑」⑲「幽閑貞靜」⑳など、靜の字と同意のようにてまがわしきなれども、「閑雲」

は雲の風にまかせて東西に來往し、一處につながられとまらぬ體を、公用世事のなき閑人の、去住心にまかせるに準えていえる詞なり。「閑鷗」も同じ。「鳥聲閑」というも、鳥の聲ののどやかに何の忙しきこともなきありさまをいう。「儀靜體閑」とは、威儀のしんべうに落ちつきたるを「儀靜」といいて、形の忙しげなく、ゆうなるさまを「體閑」という。「野興閑」というも、野外の興ののどやかに、世事の忙しきさまなきをいう。「幽閑貞靜」は窈窕の字の註にて、上臈の物ごとに言い盡さず、あからさまならず、奥ゆかしきさまを「幽」といいて、はしたなくせわせわしく忙しげなるさまのなきを「閑」ということなり。靜の字と同意に心得る時は、意味の深長なるところを得ず。この外は類推すべし。又「儉閑」の二字、古來「あからさまなり」と訓ずれども、的切ならず、忙しき中に於て、暫時のひまを樂しむことなり。「儉」というは、いそがわしき場にて、人知らず、ひとりこの樂しみを受用するゆえ、「ぬすむ」といえるなり。山谷が「九衢塵裏儉閑」⑲、程明道の「將謂儉閑學少年」⑳といえる類なり。又「等閑」は「なをざり」と訓ず。なにともしなき意なり。「尋常なり」と註せる字なれども、意少しく替りあるべし。「瀟湘底事等閑歸」㉑「等閑識得東風面」㉒の類なり。又「消閑」㉓はなぐさみなり。「閑寂」㉔は、さびしきことにて、閑寂を消除する意なり。「閑行」㉕「閑歩」㉖はむだあるきなり。「閑往」㉗「閑來」㉘は、なにの用もなきに往來するなり。「閑思雜慮」㉙は、やくにたたぬ思慮のむざと起るをいう。「野鬼閑神」㉚は、祭る人なき鬼神、民を護し災を除くなどの職分なき鬼神をいうなり。又俗語に「ひま」といえる詞に、閑の字の意に非ざるあり。女房の夫にひまをとるは、「去らんことを求む」「離異せんことを求む」、俗語には「求休」という。ひまをやるは「休了他」「把他休」なり。主人にひまをとるも「求去也」、俗語にては「求退要退錢糧」なり。當坐のひまをもらうは「急を乞ふ」「暇を乞ふ」なり。當坐のひまをやるは「暇を賜ふ」「告を予ふ」なり。閑の字とは各別のことなれども、新譯に就きて混ざる嫌いあるゆえ、ここに附す。總じて譯は漢語を觀るに、この譯にて解すべし。この譯を以て漢語を作るべからず。

①李涉『題鶴林寺僧舍』『終日昏昏醉夢間、忽聞春盡強登山。因過竹院逢僧話、

又得浮生半日閑。」

②『詩林廣記』卷十李涉「登山、終日昏昏醉夢間、忽聞春盡強登山。因過竹院逢僧話、又得浮生半日閑。談數云、東坡一日訪佛印于竹寺、印歎之。坡因誦李涉詩云、因過竹院逢僧話、又得浮生半日閑。印曰、學士閒了半日、老僧忙了半日。相與發一大笑。」

③『湘山野錄』卷上「祥符中、日本國忽梯航稱貢、非常貢也、蓋因本國之東有祥光現、其國素傳中原天子聖明、則此光現。真宗喜、勅本國建一佛祠以鎮之、賜額曰神光朝辭日。上親臨遣、夷使回乞令詞臣撰一寺記。時當直者雖偶中魁選、詞學不甚優贖、居常止以張學士君房代之、蓋假其稽古才雅也。既傳宣、令急撰寺記。時張尚為小官、醉飲於簪樓、遣人徧京城尋之不得、而夷人在閣門翹足而待、又中人三促之、紫微大窘。後錢楊二公玉堂暇日改閑忙令、大年曰、世上何人最得閑、司諫拂衣歸華山。蓋神放得告還山養藥之時也。錢希白曰、世上何人最號忙、紫微失卻張君房。時傳此事為雅笑。」

④『左傳』襄公三十一年「逢執事之不問、而未得見。」

⑤李白『春日獨酌二首』二「我有紫霞想、緬懷滄洲間、且對一壺酒、澹然萬事閑。」

⑥張籍『送楊尹赴滿城』「公事況閑詩更好、將隨相逐上山行。」

⑦許渾『贈王山人詩』「賈酒攜琴訪我頻、始知城市有閑人。」

⑧『朱子語類』陸氏「子靜說、此是閑議論。某曰、閑議論不可議論、合議論則不可不議論。」

⑨白居易『答夢得秋庭獨坐見贈』「應是天教相暖熱、一時垂老與閑官。」

⑩『後漢書』鄭孔荀列傳第六十「及退閑職、賓客日盈其門。」

⑪『晉書』列傳第三十七郗超「乃遷愔都督徐兗青幽揚州之晉陵諸軍事、領徐兗二州刺史、假節。(中略)超取規、寸寸毀裂、乃作牋、自陳老病、甚不堪人問、乞閑地自養。」

⑫許渾『下第寓居崇聖寺感事』「東門有閑地、誰種邵平瓜。」

⑬『三國志』吳書·吳主五子傳第十四「登或射獵、當由徑道、常遠避良田、不踐苗稼、至所頓息、又擇空閑之地、其不欲煩民如此。」

⑭韓愈『進學解』「動而得謗、名亦隨之、投閑置散、乃分之宜。」

⑮李山甫『方干隱居』「問人遠岫千重意、對客閒雲一片情。」

⑯法振『題天長阮少府湖上客歸』「臥對閑鷗戲、談經稚子賢。」

⑰王維『戲贈張五弟諶三首』一「窗外鳥聲閑、階前虎心善。」

⑱曹植『洛神賦』《文選》卷十九「環姿豔逸、儀靜體閑。」

⑲孟浩然『遊鳳林寺西嶺』「壺酒朋情洽、琴歌野興閑。」

⑳『詩經』周南·關雎「窈窕淑女、君子好逑」、集傳「見其有幽閒貞靜之德、故作是詩。」

㉑黃庭堅『子瞻繼和復答二首』二「炷煙中得意、九衢塵裏偷閑」

㉒程明道『春日偶成』「時人不識予心樂、將謂偷閑學少年。」

㉓錢起『歸雁』「瀟湘可事等閒回、水碧沙明兩岸苔。」

㉔朱熹『春日』「等閑識得東風面、萬紫千紅總是春。」

㉕鍾惺『章章甫詩序』「居都讀書作詩文、不以為玩物適景、而以為消閑習苦之助。」

㉖『南史』列傳第二十五顧顛之「顛之御繁以約、縣用無事。為山陰令、晝日垂簾、門階閑寂。」

㉗『史記』項羽本紀第七「四人持劍盾步走、從酈山下、道止陽閒行。」

㉘曹植『七啓』《文選》第三十四「雍容閑步、周旋馳燿」、注「翰曰、閑、緩也。」

㉙『史記』劉敬叔孫通列傳第二十九「孝惠帝為東朝長樂宮、及閑往、數蹕煩人、酒作復道、方築武庫南。」

㉚陸龜蒙『奉和襲美茶具十詠·茶人』「閑來北山下、似與東風期。」

㉛『朱子語類』訓門人六「人須打疊了心下閑思雜慮。」

㉜姬志真『妄作』「閑神野鬼爭呈幻、走骨行屍自作魔。」

【靜】は「しづかなり」と訓ず。動の字の反對なり。されば「靜かなり」とは、動かぬことなり。「しづか」という倭語を以て解せば誤りあるべし。又躁の字の反對にもなるなり。その時はさわがしからぬことなり。「聲の容は靜」①といい、「人となり沈靜」②といい、「退靜」③といえる類、皆さわがしからぬなり。又「白日靜」④といい、「晩色靜」⑤といえ、景氣のものしづかなるなり。俗語にさびしきことを「冷靜」といふ。又「習靜」⑥といふは、靜坐坐禪などの修行をいふ。總じて靜の字は作用の文字に連屬せず。「靜言」といふ字などあれども、それは「靜なれば言ひ庸ふれば違ふ」⑦とありて、「靜なれば則ち能く言ひ、用ふれば則ち理に違ふ」という意にて、間に「則」の字を入れて看るなり。又「靜觀」⑧は心を靜かにしてみるなり、「閑看」⑨はなにの用もなきに、なんとなくみるなり、「徐視」⑩はそろそろとみるなり。

①『禮記』玉藻「足容重、手容恭、目容端、口容止、聲容靜、頭容直」。

②『漢書』霍光金日磾傳第三十八「光爲人沈靜詳審、長財七尺三寸、白皙、疏眉目、美須」。

③『南史』列傳第六十一伏徵「唯性儉素、車服粗惡、外雖退靜、內不免心競、故見譏於時」。

④杜甫『題省中院壁』「落花遊絲白日靜、鳴鳩乳燕青春深」。

⑤杜甫『夏日李公見訪』「水花晩色靜、庶足充淹留」。

⑥何遜『苦熱詩』「習靜闕衣巾、讀書煩几案」。

⑦『書經』堯典「帝曰、吁、靜言庸違、象恭滔天」、蔡傳「靜言庸違者、靜則能言、用則違背也」。

⑧王維『酬諸公見過』「靜觀素鮪、俯映白沙」。

⑨王建『雨過山村』「婦姑相喚浴蠶去、閑看中庭梔子花」。

⑩『六韜』文韜「故人主之道、如龍之首、高居而遠望、徐視而審聽」。

【靖】は安靜なり。靜の字に安の字の意を添えて見るべし。然れども元來立に従う字にて、その位に安んじ立つところなるゆえ、詩經に「爾の位を靖(其)〔共〕す」①といい、説命に「自ら靖んじ、自ら先王に獻せん」②といえり。されども音同じく義近きゆえ、靜の字と通用することもあり。漢書蕭何が傳に「其の清靖を載せ、民以て寧一なり」③というを、「清靜」にも作る。史記の何れの世家やらん、「靜公」といえるは靖公なり④。諡法に「靜」なし⑤。又「愼親王」は愼靖王なり⑥。賈生が文に「澹乎として深淵の靚の若し」⑦といえるは、靜と靚と通ぜり。古書皆かくのごとし。又「亂を靖んず」⑧「難を靖んず」⑨など、皆靖の字を用いて、靜の字はまれなり。このようなることは熟字を考ふるべし。

①『詩經』小雅・谷風之什・小明「靖共爾位、正直是與」。

②『書經』微子「自靖、人自獻于先王、我不顧行遜」。

③『漢書』蕭何曹參傳第九「蕭何爲法、講若畫一、曹參代之、守而勿失、載其清靖、民以寧壹」。

④『史記』晉世家第九「二十七年、孝公卒、子靜公俱酒立」。

⑤『獨斷』卷下「帝諡、……柔德好衆曰靖」。

⑥『史記』周本紀第四「四十八年、顯王崩、子愼親王定立。愼親王立六年、崩」。

⑦賈誼『鵬鳥賦』《文選》卷十三「澹乎若深泉之靜、泛乎若不繫之舟」。

⑧『左傳』僖公九年「齊侯不務德、而勤遠略、……君務靖亂、無動于行」。

⑨『後漢書』鄭孔荀列傳第六十一「融負其高氣、志在靖難、而才疎意廣、迄無成功」。

【恬】は驚の字の反對なり。「風恬」①は「風驚」と對し、「波恬」②は「波驚」と對す。「風驚かず」「波驚かず」と做してみるべし。皆風波の息いて、心のきよきよとせぬ意なり。「恬淡虚無」③なども、心に念慮の驚動せぬことなり。「恬として之を省せず」④「恬然たり」⑤などいふも、珍らしからぬことに思ひ驚かず、動轉せぬなり。

① 宋之問『洞庭湖』「風恬魚自躍、雲夕雁相呼」。

② 『金樓子』興王篇一「行途未遠、便波恬風息」。

③ 『莊子』胠篋「而悦夫役役之俛、釋夫恬淡無爲、而悦夫嗥嗥之意、嗥嗥已亂天下矣」。

④ 楊榮『送浙江按察副使江至堅赴任序』「以察察爲明、苛刻爲務、民受其弊、恬不之省、斯皆何足取哉」。

⑤ 『荀子』彊國「觀其朝廷、其閒聽決百事不留、恬然如無治者、古之朝也」。

【寂】【寞】【寥】【闐】の四字、大形同意なり。靜の字の下に「晩色靜」「白日靜」などいえる靜の字の意にて、物しづかなることをいい、さびしく物音のなきことに多くは用いる。その内、「寞」の字、「寥」の字は多くは諛語にて、「寂寞」①「寂寥」②と用いる。單用するときも、皆形容字にて、「寞として」「寞たり」「寥として」「寥たり」などと用いる。又は下に乎の字、然の字、如の字などを付けるなり。

「寂」は喧の字の反對にて、物音なくひそとしたることより取り用いて、靜の極みをいうなり。故に「寂然不動」③などといえり。靜の字より義狭し。「寞」は漠と同じ字なり、はてしもなく意あり。「沙漠」④「大漠」⑤、又「沙幕」⑥「大幕」⑦にも作る。匈奴國の地は沙はらにて、渺渺としたるをいう。「渺漠」⑧も遠くしてはてしもなく意あり。「幽漠」⑨「冥漠」⑩は幽冥鬼神のことなどに用いる。「幽冥」⑪は目に見えぬことにて、目にも見えず、そこもしれぬ意なり。「雲漠漠」⑫「雪漠漠」⑬、皆どこがきわと知られず、はてしもなく義なり。「冲漠」⑭は、「冲」は虚なり、空虚にてそこもしれぬことなり。「寥」には虚濶の義あり、「闐」は全く寂の字の義なり。その内に「闐」は專音なきことをいい、「寂」は義廣し。畢竟は四字大槩相似たり。大抵このようなる形容字は、倭語に譯しがたし。倭語にも「りん」として「しやんとして」などいふようなる形容の語、亦漢語に寄しがたきがごとし。

① 『楚辭』遠遊「山蕭條而無獸兮、野寂寞其無人」。

『漢書』揚雄傳第五十七下「然京師爲之語曰、惟寂寞、自投閣、爰清靜、作

符命」。

② 『楚辭』九辯「寂寥兮收潦而水清」。

③ 『易經』繫辭傳上「易、无思也、无爲也、寂然不動、感而遂通、天下之故」。

④ 『後漢書』烏桓鮮卑列傳第八十「若亡畔爲大人所捕者、邑落不得受之、皆從逐於雍狂之地、沙漠之中」。

⑤ 『後漢書』竇融列傳第十三「遂陵高闕、下鷄鹿、經積鹵、絶大漠、斬温禺以鼙鼓、血尸逐以染鏑」。

⑥ 『漢書』傅常鄭甘陳殷傳第四十「近漢有郅都、魏尚、匈奴不敢南鄉沙幕」。

⑦ 『漢書』衛青霍去病傳第二十五「先是、比年遣大將軍衛青、霍去病攻祁連、絶大幕、窮追單于、斬首十餘萬級」。

⑧ 葛洪『關尹子序』「茫茫乎若履橫杖而浮乎大海之渺漠」。

⑨ 孫綽『大平山銘』「肅形枯林、映心幽漠」。

⑩ 顏延之『拜陵廟作』『文選』卷二十三「衣冠終冥漠、陵邑轉葱菁」。

⑪ 張衡『思玄賦』『文選』卷十五「親所睇而弗識兮、矧幽冥之可信」。

⑫ 長卿『破遇雨、宴前主簿從兄子英宅』「破石雲漠漠、東風吹雨來」。

⑬ 白居易『落花』「桃飄火焰焰、梨墮雪漠漠」。

⑭ 張協『七命』『文選』卷三十五「冲漠公子含華隱曜」。

【舒】【徐】の二字、「徐」は「おもむろなり」という訓、的當なり。言行動作する上のしづかなることなり。「舒」にはのべる意あり。「舒」は迫の字の反對にて、のびやかなる意あり、「徐」は疾の字の反對にて、ゆるやかなる意あり。「徐」は「徐に言ふ」「徐に視」「徐に聴く」「徐にして之を察す」「徐歩」などと多く用いる字なり。「言徐なり」「行徐」なども用いる。大學に「之を用いること舒かなり」①といえるは、財を用いる上にて、あとから逐われるようになく、ゆるのあることなり。畢竟のべるの義多し。あひるを「舒鳧」という②。徐歩するものなるゆえなり。これらは徐の字の意に通じりなり。

- ①『禮記』大學「生之者衆、食之者寡、爲之者疾、用之者舒、則財恒足矣」。
②『爾雅』釋鳥「舒鳧、鶩」。

【謚】寧靜の義なり。無聲（こころ）を兼ねる。「國家靜謐」の類、安靜にてやかましき取り沙汰もなき意なり。

20しげる

繁 蕃 茂 稠 滋 (一、廿八号表)

【繁】簡の反對なり。多くして文采の入り雑まじえたる意あり。故に「繁雜」①は事多くて、まぎらわしき意あり。「繁を厭いとふ」②「其の繁に勝へず」③、皆この意なり。

「禮數繁」④「文辭繁」⑤「花木繁」⑥「魚鳥繁」⑦「星繁」⑧「雨繁」⑨「翠繁」⑩「春色繁」⑪「繁麗」⑫「繁縟」⑬など、皆文采の意あり。書經の「寔に繁くして徒有り」⑭、詩經の「既に庶もつちにして且つ繁あり」⑮などは、文采なけれども、繁雜の義に目まぎらわしき意あるゆえ、極めて多き意に用いたり。

- ①『隋書』列傳第十四牛弘「性寬厚、篤志於學、雖職務繁雜、書不釋手」。
②『綱目分注拾遺』綱目分註拾遺原序「又廣雜收紀傳、或惡密而喜疎、具述說詞、或厭繁而就簡、或志成敗而不原其繇來」。
③『新唐書』志第四十七藝文一「其後傳注箋解義疏之流、轉相講述、而聖道粗明。然其爲說、固已不勝其繁矣」。
④『韓非子』解老第二十一「由是觀之、禮繁者實心衰也」。
⑤『後漢書』光武十王列傳第三十二「夫文繁者質荒、木勝者人亡」。
⑥韋應物『始夏南園思舊里』「夏首雲物變、雨餘草木繁」。
⑦杜甫『暮春陪李尚書、李中丞過鄭監湖亭泛舟、得過字韻』「春日繁魚鳥、江天足芰荷」。
⑧左思『蜀都賦』《文選》卷四「賄貨山積、纖麗星繁」。

- ⑨杜甫『秦州雜詩二十首』十「雲氣接崑崙、滄溟塞雨繁」
⑩王維『寓言二首』一「曲陌車騎盛、高堂珠翠繁」。
⑪徐溥『紅梅花』「玉壺新賜金莖露、醉愛一庭春色繁」。
⑫『唐書』列傳第四十一韋嗣立「伏見營立寺觀、累年不絕、鴻侈繁麗、務相務勝、大抵費常千萬以上」。

- ⑬馬融『長笛賦』《文選》卷十八「繁縟駱驛、范蔡之說也」。
⑭『書經』仲虺之誥「簡賢附勢、寔繁有徒」。
⑮『詩經』大雅・生民之什・公劉「既庶既繁、既順迺宣、而無永嘆」。

【蕃】艸のしげり盛んなるなり①。ふえる意あり、多き意あり。「蕃殖」②は、ものふえて澤山になることなり。「其の後必ず蕃る」③は、子孫の繁昌することなり。されども繁の字と音同じきゆえ、「繁蕪」「蕃蕪」④「繁庶」「蕃庶」⑤など通用す。文采の雜わる意の處へは用いず。

- ①『說文解字』蕃、艸茂也。
②『國語』周語上「財用蕃殖、于是乎始、敦龐純固、於是乎成」。
③『左傳』宣公三年「今公子蘭、媿甥也、天或啓之、必將爲君、其後必蕃」。
④『後漢書』班彪列傳第三十下「百穀蕃繁、庶卉蕃蕪」。
⑤『國語』周語上「民之蕃庶、於是乎生、事之供給、於是乎在」。

【茂】艸のしげるなり①。多き意なし、盛んなる意なり。故に「蕃」は衆艸の上にていい、「茂」は一艸一木の上にていう。「蕃」は艸に限り、「茂」は木に通ず。盛んなる意あるゆえ、才德の上にも用いる。左傳に「茂哉茂哉」②は、懋の字と通じて別義なり。

- ①『說文解字』茂、艸豐盛。
②『正字通』申集上「左傳、茂哉茂哉、與懋同」。
『春秋繁露』同類相動「尚書大傳言、周將同之時、有大赤馬銜之種、而集王

屋之上者、武王喜、諸大夫皆喜。周公曰、茂哉茂哉、天之見此以勸之也。『漢書』董仲舒傳第二十六「詩曰、夙夜匪解、書云、茂哉茂哉、皆彊勉之謂也」。

【稠】しげるに密の意あり。艸と艸との間のつき合いて、厚く生じしげるなり。稀の反対なり。「稀」は間のまばらなることなり。「稠人叢」①というは、人ごみのことなり。又一義、俗語に、粥や糊や、或いは痰唾などのこときを「稠」といふ。「稠粘」②はこくねばきなり。これも稀の字と對す。「稀」はうすきなり、色味のうすきは「淡」なり、色味のこきは「濃」なり、紙などのうすきは「薄」なり。

- ①『太平廣記』虎人・王行言「時自於道左而出、於稠人叢中捉行言而去」。
 ②『太平惠民和劑局方』卷一治傷寒「肢體半疼、胸膈滿悶、痰涎喘滿、涕唾稠粘」。

【滋】蕃と似たり。「蕃」は數のふえる意あり、「滋」はひろがる意あり、水の物を浸して潤いのひろがる意より用いたるなり。「滋蔓」①など、是れなり。又「孽」の字と音同じ、通用するなり。「孽」は畜類の子をうみてふえることなり。又「潤潤」②と連用して、うるおいのことに用いる。「潤滋」③「滋を含む」④「雨を帯びて滋ふ」⑤「煙を帯びて滋ふ」⑥「帝澤」⑦など、是れなり。「丹滋」⑧「綠滋」⑨「碧滋」⑩「紅滋」⑪「苔滋」⑫「景物滋」⑬などは、「しげる」と「潤ふ」と、兩意を含めり。又「滋味」⑭というときは、味のこきなり。一字にて味になることあり。

- ①『後漢書』楊震列傳第四十四「張角等遭赦不悔、而稍益滋蔓」。
 ②『論衡』是應「土地滋潤、流濕萬物、洽沾濡薄」。
 ③朱熹『次韻劉彥采觀雲之句』「萬點隨飄零、百嘉潛潤滋」。
 ④『宋書』志第十九符瑞下「甘露春凝、禎稔秋秀、含滋匪烈、嗣歲仍富」。
 ⑤陸深『忻州試院雨中閱卷』「江南五月黃梅雨、帶雨滋花向晉陽」。

⑥未詳。『佩文韻府』卷四下滋の項の「摘句」に「周原種吐帶烟滋」の句を引く。

- ⑦蘇頌『奉和聖製送張說上集賢學士賜宴得茲字』「下濟天光近、中來帝渥滋」。
 ⑧楊素『贈薛播州十三』「山河散瓊蘂、庭樹下丹滋」。
 ⑨張協『雜詩』三『文選』二十九「寒花發黃采、秋草含綠滋」。
 ⑩江淹『效華離情』『文選』卷三十一「庭樹發紅彩、闌草含碧滋」。
 ⑪李白『書情寄從弟邠州長史昭』「懷君芳歲歇、庭樹落紅滋」。
 ⑫劉言史『題十三弟竹園』「繞屋扶疏簪翠莖、苔滋粉漾有幽情」。
 ⑬杜審言『望春亭侍遊應詔』「萬壽禎祥獻、三春景物滋」。
 ⑭『禮記』月令「薄滋味、毋致和」。

3〇しばらく

暫 少 須臾 頃刻 俄頃 少之 頃之 姑 且 (二、四十三号表)

【暫】「しばらく」とよむ。久の反対なり。

【少】「少時」①にて、「しばらく」なり。處によりて「少」の一字にても「しばらく」なり。それはやはり「すこし」という語なり。和語にても「すこし」といってしばらくの意になることあり。それと同じことなり。少の字にしばらくの義なし。故に下に何ぞ字をつけたる時ならでは、しばらくには用いず。

- ①『資治通鑑』晉紀三十二「安帝、隆安二年、……大人親非骨肉、義非君臣、雖共事少時、意好不協、今日討之、於情義何有、胡注「少時、言不多時也」。
 【須臾】片時の間なり。暫と異なり、「暫」は廣き字なり。五日十日も暫なり、一月二月も暫なり、一日二日も暫なり。「須臾」①は片時の間なり。
 ①『禮記』中庸「道也者、不可須臾離也、可離非道也」。

【頃刻①】これも「須臾」と同じなり。

①『三國志』呉書・諸葛藤「孫漢陽傳第十九「嚴畢趨出、犬銜引其衣。恪曰、犬不欲我行乎。還坐、頃刻乃復起、犬又銜其衣、恪令從者逐犬、遂升車。」

【俄頃①】これも片時の間に、忽の意あり。

①『晉書』列傳第十三王戎「籍每適渾、俄頃輒去、過視戎、良久然後出。」

【少之①】【頃之②】「しばらくあつて」とよむ。句頭に置く語なり。

①『金史』列傳第五十完顔合達傳「北騎退走、追奔之際、忽大霧四塞、兩省命收軍、少之、霧散乃前。」

②『資治通鑑』周紀四「赧王中三十六年、頃之、昭王薨、惠王立、胡注「頃之、言無幾何時。」

【姑】【且】二字とも、まあ當分というほどの語なり。詞字なり。下におかれず。

4〇しばしば

數 屢 (二、四十三号裏)

【數】「しばしば」とよむ。「せつせつ」「さいさい」と譯す。疏の反對なり。又速の字と通用して用いたることもあり。

【屢】數の字と同意なれども、詞字なり。「屢來る」「屢問ふ」などと上に置くなり。「其の屢なることを知る」などと使うことはなきなり、數の字は「其の數なることを知る」などと下に使われるなり。又「屢屢たり」と使いては、下にもつかわれるなり。

5〇しきり

頻 荐 切 (二、四十四号表)

【頻】數の字の意と同じ。但しつづきてせつなる意なり。せわしなしというほどの語なり。故に詩經に「國歩斯に頻し」①ということあり、國家のあゆみなりのせわしきなり。されども大抵數の字と同意に用いるなり。平語に「しきり」というは、そぞろなどと同じようなり、字義に叶わず。

①『詩經』大雅・蕩之什・桑柔「於乎有哀、國歩斯頻」

【荐】頻の字と同じ。いやがうえにかさなりつづく意あり。

【切】頻の字と大いに殊なり。「親切」①「確切」②「的切」③、皆道理にしつかりとして、うわつかぬことなり。「剴切」④「迫切」⑤「急切」⑥「激切」⑦「勁切」⑧など連用す。皆言語のしかと徹したることなり。この時、泛の反對なり。「泛」は水にうかびたぶつく「水があふれそうになつてゆれ動く」ことなるゆえ、しつかりとせぬことに用いるなり。「切要」⑨とは「緊要」と同意なり。事の上にも用いる。「切に思ふ」「切に欲す」など、和語の「しきりに」というと近し。又「凄切」⑩「勁切」⑪「緊切」⑫などは、風の寒くて身にしみる意なり。醫家の「望聞問切」⑬は、脈をとることを「切す」という。「按切」と連用して、指にて按じてみることなり。又文字をかえすことを「切」という。又「一切」⑭という詞、ものの長短參差にかまわず、ひとつかみにして寸斗切りたる意にて、總じて何のせんぎなく、おしまくりなることをいう。

①『北史』列傳第四十齊宗室諸王下・蘭陵武王長恭「岳山之捷、後主謂長恭曰、入陣太深、失利悔無所及。對曰、家事親切、不覺遽然。」

②『文心雕龍』銘箴「箴全禦過、故文資確切」。

③司馬光『龐相國清風集略後序』「至於用事精當、偶對的切、雖古人能者殆無以過。」

④『新唐書』列傳第二十二魏徵「凡二百餘奏、無不剴切當帝心者。」

⑤『漢書』文三王傳第十七「疑有所迫切、過誤失言、文史躡尋、不得轉移。」

⑥『後漢書』崔駰列傳第四十二「不彊人以不能、背急切而慕所聞也。」

⑦『漢書』賈鄒枚路列傳第二十一「其言多激切、善指事意、然終不加罰、所以廣諫爭之路也。」

⑧『新唐書』列傳第五十七柳冕「久之、以論議勁切、執政不善、出爲婺州刺史。」

⑨『晉書』列傳第十六劉頌「雖文慚華婉、而理歸切要。」

⑩孟郊『古別曲』「荒郊煙莽蒼、曠野心淒切。」

⑪『魏書』高祖紀第七下「寒氣勁切、杖捶難任。」

⑫『水滸傳』第十一回「林冲踏著雪只顧走、看看天色冷得緊切、漸漸晚了。」

⑬東洋医学においてもっとも重要な診療方法をいう。望診、聞診、問診、切診をいう。「望診」は目で見て診察すること、「聞診」は耳で聞いて診察すること、「問診」は患者にことばでたずねること、「切診」指でさすって診察すること。「難經」に「六十一難曰、經言望而知之、謂之神、聞而知之、謂之聖、問而知之、謂之工、切脈而知之、謂之巧、何謂也」といい、それに続けて各診療法を解説する。

⑭『史記』李斯列傳第二十七「諸侯人來事秦者、大抵爲其主游閒於秦耳、請一切逐客」、注「索隱曰、一切猶一例、言盡逐之也。」

6〇したがふ

順從 隨 循 率 遵 徇 沿 遜 服 尾 (二、六十二号表)

【順】「さかはず」。逆ならぬことなり。逆の反対なり。「柔順」①「和順」②「孝順」③「遜順」④などと連用す。「順德」⑤は、女又は臣下の徳なり。故に叛逆のことを

「順に違ふ」⑥「順に逆ふ」⑦という。官軍に敵待するを「順を拒む」という。官軍に味方して働くを「順を效す」⑧という。又敵の臣のこの方へ降参するをいうなり。又舊主のために忠を盡して、官軍をふせぐを「順に迷ふ」という。皆この方は天下の眞主なるゆえ、舊主を棄てるは逆に似たれども、眞主に従うは却て叛逆に非ざる、道理に迷うという意なり。「順風」⑨、和語の如し。「順便」は和語にいう「ついで」なり。

①『易經』坤・象「柔順利貞、君子攸行」。

②『易經』説卦「發揮於剛柔而生文、和順於道德而理於義」。

③『國語』楚語上「勤勉以勸之、孝順以納之、忠信以發之、德音以揚之」。

④『漢書』淮南衡濟北王傳第十四「厲王以此歸國益恣、不用漢法、出入警蹕、稱制、自作法令、數上書不遜順」。

⑤『易經』升「象曰、地中生木、升、君子以順德、積小以高大」。

⑥『申鑒』雜言上第四「故在上者、必察乎違順、審乎所爲、慎乎所安」。

⑦『周禮』秋官・小行人「其禮俗政事教治刑禁之逆順爲一書」。

⑧錢詡『爲宗正卿請復常膳表』「而後効順立功、報之爵祿、勞心進思、痛在瘡痕」。

⑨『後漢書』文苑列傳第七十下「順風激靡草、富貴者稱賢」。

【從】たがわぬことなり。違の反対なり。違は逆よりかるし。故に従も順より輕し。それについて行くを「從」といい、それをはなれて去るを「違」という。大抵は「つく」という和語、この字によく合うなり。「雲は龍に従ふ、風は虎に従ふ」①「朋は爾の思に従う」②「婦人の三従、幼きときは父に従ひ、嫁しては夫に従ひ、死しては子に従ふ」③「一面まのあたに従う」④「曲まげて従う」⑤「景かげのごとく従う」⑥「事寡ければ従ひ易し」⑦「枝附き葉従う」⑧「萬國率從」⑨「一方急有れば、四面皆従う」⑩の類なりと、筈の吉なるを「従う」といい、凶なるを「違ふ」というは、吾が心に違わぬ義にて、「從」というなり。「一國三公、吾誰にか適從せん」⑪というは、

一國の内、君三人あり、いづれを主として、何れにかつくべきと云ふことなり。「禽えものを従ふ」⑫といふは、狩に鹿などの走り行くにつきて行くことなり。「聽從」⑬といふは、人のいうことをきき入れて、同心することなり。これもつくことなり。文字の偏傍のことに、たとえば「相の字は木に從ひ目に從う」⑭といふも、木の類目の類につく意なり。又「より」とよむ時、自の字の意。又去聲の時、路を行くともものことなり。ともをするをいふ。天子のともまわりを「法從」⑮といふ。百官のともまわりは「騶從」⑯といふ。「扈從」⑰も天子のともをするなり。但し「法從」には儀式の意あり。近臣を「侍從」⑱といふ。坐する時は侍り、行くときは從うゆえなり。遠國の使者に内證にてつき從いて國境を出るを「少從」⑲といふ。「少」は少年なり。「騎從」⑳は騎馬のともなり。母の姉妹を「從母」㉑といひ、伯叔の子を「從兄弟」㉒といふ。いとこ、又いとこなどを總て「羣從」㉓といふ。皆去聲なり。又「從容」㉔を「おもむろ」とよむ。舒緩の貌なり。この時、清音の平聲なり。又上聲の時、「從從爾」㉕といふは、髻の高き貌なり。又縱と通じて、「たて」とよむ㉖。又蹤と通じて、「あと」とよむ㉗。縱と通じて、「ほしひまま」とよむ。明の末の文に、「從」の一字を「從來」の意に用いたることあり。

①『易經』乾「水流溼、火就燥、雲從龍、風從虎」。

②『易經』咸「九四、貞、吉悔亡、憧憧往來、朋從爾思」。

③『儀禮』喪服「婦人有三從之義、無專用之道、故未嫁從父、既嫁從夫、夫死從子、故父者子之天也」。

④『書經』益稷「予違汝弼、汝無面從、退有後言」。

⑤『漢書』趙尹韓張兩王傳第四十六「而阿諛曲從、附下罔上、懷邪迷國、無大臣輔攻之義」。

⑥『漢書』陳勝項籍傳第一「斬木爲兵、揭竿爲旗、天下雲合響應、羸糧而景從、山東豪俊並起而亡秦族矣」。

⑦『說苑』君道「夫事寡易從、法省易因、故省易因、故民不以政權獲罪也」。

⑧陳琳『檄吳將校部曲文』《文選》卷四十四「至於枝附葉從、比白詔書所特禽

疾」。

⑨『書經』文侯之命「越小大謀猷、罔不率從」。

⑩『漢書』嚴朱吾丘主父徐嚴終王賈傳第三十四上「兵事凶事、一方有急、四面皆從」。

⑪『左傳』僖公五年「狐裘彫茸、一國三公、吾誰適從」。

⑫『易經』屯「卽鹿无虞、以從禽也、君子舍之」。

⑬『左傳』昭王十三年「小國言之、大國制之、敢不聽從」。

⑭『說文解字』「相、省視也、从目从木」。

⑮『正字通』寅集下「從天子駕曰法從、扈從、侍從。漢謂隨使出疆者爲少從、言其少年而從使也、亦曰儻從」。

⑯『金史』列傳第五十七完顏婁室「九住出近侍、好自標致、騶從盈路」。

⑰『史記』項羽本紀第七「於是項王乃上馬騎、麾下壯士騎從者八百餘人」。

⑱『爾雅』釋親「母之姊妹爲從母、從母之男子爲從母舅弟、其女子子爲從母姊妹」。

⑲『宋史』列傳第一百一十鄭居中「初、居中自言爲貴妃從兄弟、妃從藩邸進、

家世微、連進擢」。

⑳『晉書』列傳第十九阮咸「羣從昆弟、莫不以放達爲行、籍弗之許」。

㉑『書經』君陳「寬而有制、從容以和」。

㉒『莊子』在宥「從容無爲、而滿物炊累焉、吾又何暇治天下哉」。

㉓『禮記』檀弓上「南宮縚之妻之姑之喪、夫子誨之髻、曰、爾毋從從爾」。

㉔『詩經』齊風・南山「執麻如之何、衡從其畝」。

㉕『漢書』張湯傳第二十九「上問、變事從迹安起、顏注「師古曰、從讀曰蹤」。

【隨】從行之義なり。大抵從の字とかわりなし。「蕭規し曹隨ふ」①「主先し臣隨ふ」②「策を仗て隨ふ」③「錡を荷て隨ふ」④「小童、一錦囊を背にして隨ふ」⑤「夫は倡ひ、嬪は隨ふ」⑥「追隨」⑦など、皆從の字の意なり。「宜に隨ふ」⑧「意に隨

ふ」⑨、皆まかせる意なり。「隨便」⑩は勝手しだいなり。又「隨意」⑪の二字を、詩に一任する意に用いたるあり。「隨意青楓白露寒」⑫というは、楓露意のままに何ほども寒かれ、我はかまわぬとなり。

①『揚子法言』淵騫卷第十一「或問蕭曹。曰、蕭也規、曹也隨。」

②『漢書』司馬遷傳第三十二「儒者則不然、以爲人主、天下之儀表也、君倡臣和、主先臣隨。」

③陳高『同蔣伯威朱德常游育玉山得冷字』「仗策隨諸彦、尋僧訪幽景。」

④『晉書』列傳第十九劉伶「初不以家産有無介意、常乘鹿車、携一壺酒、使人荷鍤隨之。」

⑤『新唐書』列傳第一百二十八文藝下李賀「每旦日出、騎弱馬、從小奚奴、背古錦囊、遇所得、書投囊中。」

⑥『關尹子』三極「天下之理、夫者倡、婦者隨、牡者馳、牝者逐、雄者鳴、雌者應、是以聖人制言行、而賢人拘之。」

⑦『後漢書』黨錮列傳第五十七「馥避不與語、靜追隨至客舍、共宿。」

⑧白居易『自詠』「隨官飲食聊充腹、取次衣裳亦暖身。」

⑨『三國志』魏書・程郭董劉蔣劉傳第十四「官無局業、職無分限、隨意任情、唯心所適。」

⑩『紅樓夢』第五十八回「隨便、有新茶、便供一鍾茶、有新水、就供一盞水。」

⑪『三國志』魏書十四程昱傳「遂令上蔡宮廟、下攝衆司、官無局業、職無分限、隨意任情、唯心所適。」

⑫王昌齡『重別李評事』「吳姬緩舞留君醉、隨意青楓白露寒。」

【循】ものにそいてゆくなり。「從」「隨」は多くは行くものにしたがいて行くなり、「循」は路や牆などの如き、動かぬものにそいて行くなり。「從」「隨」にも道路に用いることあり。「東路に從う」①とは、岐路のあるに、西路をばおきて東路へつきて行くなり。「曲折に隨ひて行く」②とは、路のまがり次第にまかせて行くなり。

この「從」はつく意なり、「隨」はまかせる意なり。「循」の字は「大路に循ふ」③「法度に循ふ」④「牆に循ひて走る」⑤、皆それにそいて行くなり。「性に率ふ、之道と謂ふ」⑥というを、「率は循なり」と注したるも、性にそい従う意なり。「循環」⑦は環をなでるなり。環をなでれば、往來端無し、故に往來端無きことを「循環」という。「めぐる」とよむは字義を失う。「撫循」⑧もなでるなり。それゆえ民をなごめ安んじるに用いる。十四經に經絡の運行をかきたる處に「骨に循ふ」⑨「分肉に循ふ」⑩、皆そのなりにつきて行くことなり。そのなりにつきて行くという意、なでるにかようなり。「持循」⑪は、法度など先例などにしたがいがい、それなりに守ることなり。「因循」⑫はふるぎにまかせて改めぬことなり。又「循吏」⑬は民をよく治める郡守をいう。「循良」⑭というは、循吏良吏を合わせたものなり。「循循」⑮は舒徐にして次第有るなり。「逡循」⑯は「逡巡」と同じ。

①『魏書』列傳第六十八賀拔勝「元顥入洛、勝從東路率騎三百赴行宮於河梁。」

②李復『過彈箏峽』「我來跨官馬、屢渡隨曲折。」

③徐宏祖『徐霞客遊記』卷十二下西南遊日記二十二「從其西麓之坡折、而東上過坳、復西向循大路趨一里、過白石崖西坊。」

④『後漢書』光武十王列傳第三十二「自是後、諸王賓客多坐刑罰、各循法度。」

⑤『左傳』昭公七年「故其鼎銘云、一命而僂、再命而傴、三命而俯、循牆而走。」

⑥『禮記』中庸「天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂教」、鄭注「率、循也。」

⑦『史記』高祖本紀第八「三王之造、若循環、終而復始。」

⑧『漢書』蕭何曹參傳第九「爲上在軍、拊循勉百姓、悉所有佐軍、如陳豬時。」

⑨「十四經」は人体の氣血の運行を十四の經にわたしたもの。『黃帝素問』二十二脈解篇第四十九「病偏虛爲跛者、以其脈循股內後廉、合臆中、下循臑、過外踝之後、循京骨至小指外側也。」

⑩『黃帝內經』靈樞經、脹論「歧伯曰、衛氣之在身也、常然竝脈、循分肉、行有逆順、陰陽相隨。」

⑪『漢書』賈誼傳第十八「此業壹定、世世常安、而後有所持循矣。」

⑫韓愈『酬裴十六功曹巡府西驛途中見寄詩』「多才自勞苦、無用祇因循」。

⑬『法言』淵騫「或問循吏曰、吏也」。

⑭『北史』列傳第四十三孫肇等傳論「房謨忠勤之操、始終若一。恭懿循良之風、可謂世有人矣」。

⑮『正字通』寅集下「循循、舒徐有次第也」。

⑯『漢書』游侠傳第六十二「章遂循甚懼、其後京兆不復從也」。

【率】遵・循と同義なり。「祖訓に率ふ」「法度に率ふ」①「大路に率ふ」「性に率ふ」②などなり。又「ひきゆる」とよむ。以上、帥の字と通用す。又「大率」③は大略なり。「民に軍功有る者は、皆率を以て爵を受く」④「諸將、首箇の率に中りて、功を以て侯と爲る者多し」⑤「燭を刻みて詩を作り、一寸を率と爲す」⑥、この率は「數なり、差等なり」⑦と注す。又「眞率」⑧「坦率」⑨「粗率」⑩は、皆かざらずつくろわぬことなり。又「穀率」⑪の時は音律、弓を引く限りをいう。

①方孝孺『異命說』「大者作亂、小者驕淫奢侈、不率法度、禮不得而齊之、德不得而服之」。

②『禮記』中庸「天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂教」。

③『史記』貨殖列傳第六十九「子貸金錢千貫、節駟會、食賈三之、廉賈五之、此亦比千乘之家、其大率也」。

④『史記』商君列傳第八「民有二男以上不分異者、倍其賦、有軍功者、各以率受上爵」。

⑤『漢書』李廣蘇建傳第二十四「諸將多中首虜率爲侯者、而廣軍無功」。

⑥『南史』列傳第四十九王僧孺「竟陵王子良嘗夜集學士、刻燭爲詩、四韻者則刻一寸、以此爲率」。

⑦『正字通』午集上「率、又約數也。綱目、秦衛鞅定變法之令、民有軍功者、各以率受爵、爲私鬪者、各以輕重被刑。正誤云、率、數也、猶差等也」。

⑧『晉書』列傳第十九羊曼「論者以因之豐腆、乃不如曼之眞率」。

⑨『晉書』列傳第四十三庾亮「便據胡牀與浩談詠竟坐。其坦率行已、多此類也」。

⑩『南史』列傳第十七孔顛「庾徽之爲御史中丞、……衣冠器用莫不粗率」。

⑪『孟子』盡心上「大匠不爲拙工、改廢繩墨、羿不爲拙射、變其穀穀率」。

【遵】率・循と同義なり。

【徇】殉と通用す。身を以て物に従うをいう①。身をかえりみずして、それへつくことなり。「欲に徇ふ」②「色に徇ふ」③「財に徇ふ」④類なり。「木鐸を以て路に徇ふ」⑤「車裂して以て徇ふ」⑥は、徇く示すなり。「地を徇ふ」⑦は、地を略し地を巡ると同じ、行視るなり。

①『正字通』寅集下「以身從物曰徇」。

②司馬扎『感古』「祖龍已深惑、漢氏遠徇欲」。

③『書經』伊訓「敢有殉于貨色」、孔傳「殉、求也」。

④『史記』伯夷列傳第一「貪夫徇財、烈士徇名、夸者死權、衆庶馮生」。

⑤『書經』胤征「每歲孟春、適人以木鐸徇于路」。

⑥『史記』蘇秦列傳第九「蘇秦且死、乃謂齊王曰、臣即死、車裂臣以徇於市」。

⑦『史記』陳涉世家第十八「當此之時、諸將之徇地者、不可勝數」。

【沿】流れにしたがいて川下へ行くなり①。「沿襲」②というは、舊きをあらためず、それにしたがうことなり。「沿革」③というは、「因革」と同じ。官制にても、禮法にても、地名にても、舊きままにして改めぬを「沿」とも「因」ともいい、かえるを「革」という。

①『說文解字』沿「緣水而下也」。

②韓愈『讀儀禮』「余嘗苦儀禮難讀、又其行於今者蓋寡、沿襲不同、復之無由」。

③『隋書』帝紀第一高祖上「開皇元年三月庚子、詔曰、……朕應錄受圖、君臨海內、載懷沿革、事有不同」。

【遜】抗の反対なり。はりあわぬことなり。したがうにへる意を兼ねる。「耕す者は畔に遜ひ、行く者は路に遜ふ」①。「位を遜る」②「揖遜」③などは、讓の字と同意なり。「言を危くして言遜る」④は、言語を以て人にはりあわぬことなり。「不遜」⑤は慮外なり。「齊に遜る」⑥「野に遜る」は遁の字の意なり。皆へる意あり。

①『孔子家語』好生第十一「入其境、耕者遜畔、行者讓路」。

②『史記』太史公自序第七十「唐堯遜位、虞舜不台」。

③『申鑒』政體第一「重拱揖遜、而海内平矣」。

④『論語』憲問「子曰、邦有道、危言危行、邦無道、危行言孫」。

⑤『論語』述而「子曰、奢則不遜、儉則固、與其不遜也寧固」。

⑥『春秋』莊公元年「三月、夫人姜氏孫于齊」。

【服】ひれふして、つきしたがうことなり。「力を以て人を服す」①「徳を以て人を服す」①「心服」②「帖服」③「屈服」④「臣服」⑤「賓服」⑥「率服」⑦の類なり。又「衣服」⑧。又衣をきること。又馬の「服驂」⑨、兩服は車の轅の内に在り、兩驂は外にあり、これ駟馬の車なり。又事と訓ず。「服を纂く」⑩「服を嗣ぐ」⑪「厥服を替ること無し」⑫、皆國家の事業をいう。又禹貢の「五服」⑬、周禮の「九服」⑭、皆諸侯の國國、王都を去ることの遠近を次第して、五等九等に分けて名をつけたり。天子の命じたまう職事を諸侯のうけ行うよりいえるなり。されどもこれより「禹服」⑮などといえは、土地のことになる。又事というより、事を行うを「服す」という⑯。書經に「厥の言惟だ服ふ」⑰などの類。又「服膺」⑱は、むねにつけるなり。「佩服」⑲の義より轉用す。又「水土に服さず」⑳、すみなれぬ國にて水にあたることなり。習の義なり。又「扶服」㉑は「匍匐」㉒と同じ。はらばいすることなり。

①『孟子』公孫丑上「以力服人者、非心服也、力不贍也、以德服人者、中心悅而誠服也」。

②『說苑』臣術「否則爾之受罪不久矣。子路心服而退也」。

③李心傳『建炎以來朝野雜記』卷十九「邊防二丁未三開乙卯曳失素之變」餘蠻俱帖服、虛恨蠻族最強善鬪破小路蠻併其地」。

王安石『曹公行狀』後遂帖服、皆爲用」。

④『莊子』大宗師「屈服者、其嗙言若哇、其耆欲深者、其天機淺」。

⑤『書經』康王之誥「今予一二伯父、尚胥暨顧綏爾先公之臣服于先王」。

⑥『禮記』樂記「暴民不作、諸侯賓服、兵革不試、五刑不用」。

⑦『書經』舜典「柔遠能邇、惇德允元、而難任人、蠻夷率服」。

⑧『禮記』王制「衣服飲食不粥于市」。

⑨『詩經』鄭風・大叔于田「兩服上襄、兩驂鷹行」、鄭箋「兩服、中央夾轅者」。

⑩劉禹錫『唐故相國贈司空令孤公紀』「文宗纂服、三年冬、上表以大臣未識天子、願朝正月。制曰、可」。

子、願朝正月。制曰、可」。

⑪『詩經』大雅・文王之什・下民「永言孝思、昭哉嗣服」。

⑫『書經』旅獒「王乃昭德之致于異姓之邦、無替厥服」。

⑬『書經』益稷「惟荒度土功、弼成五服」。

『書經』大禹謨「七旬有苗格」、疏「禹貢五服、甸侯綏要荒、荒最在外」。

⑭『周禮』夏官司馬・職方氏「乃辨九服之邦國、方千里曰王畿、其外方五百里曰侯服」。

⑮『南齊書』志第三樂「太祖高皇帝神室奏高德宣列樂歌辭、……誕應休命、奄有八紘、握機肇運、光啓禹服」。

王儉『樂歌』「握機肇運光啓禹服」。

⑯『論語』爲政「子夏問孝。子曰、色難。有事、弟子服其勞。有酒食、先生饌。曾是以爲孝乎」。

⑰『書經』說命中「王曰、旨哉說、乃言惟服、傳「美其所言皆可服行」。

⑱『禮記』中庸「子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善、則拳拳服膺、而弗失之矣」。

⑲『禮記』中庸「子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善、則拳拳服膺、而弗失之矣」。

⑳『禮記』中庸「子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善、則拳拳服膺、而弗失之矣」。

㉑『禮記』中庸「子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善、則拳拳服膺、而弗失之矣」。

㉒『禮記』中庸「子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善、則拳拳服膺、而弗失之矣」。

之矣」。

①9 韓愈『贈區弘南歸詩』「騰蹋衆駿事鞍轡、佩服服上色紫與緋」。

②0 『漢書』爰盎鼂錯傳第十九「秦之戍卒、不能服其水土、戍者死於邊、輸者償於道」。

②1 『禮記』檀弓下「孔子聞之曰、善哉覘國乎。詩云、凡民有喪、扶服救之」。

②2 『詩經』邶風・谷風「凡民有喪、匍匐救之」。

【尾】あとよりつけて行くことなり。軍などに「尾して之を撃つ」①、又「密に其の適く所を尾す」②、皆つけてゆくことなり。

① 『後漢書』烏桓鮮卑列傳第八十「烏桓復尾擊援後、援遂晨夜奔歸、比入塞、馬死者千餘匹」。

② 張潮『化虎記』「翁心怪。詰旦、三子出、翁密尾、偵其所往」。

7〇しづむ

沈 湏 湏 淪 鎮 溺 滄 (五、四号表)

【沈】「しづむ」「しづむる」。訓の如し。「日沈」①「月沈」②「夕陽沈」③などは、地下に入るを水にしづむに比せり。「深沈」④「沈々」⑤、皆奥深の貌なり。「陸沈」⑥は、州郡の夷狄に取られ、又人のおちぶれたることにいえり。水なくして沈むという意なり。或る人、大水にて陸地の川になりたることをいえり⑦、笑う可し。「世と浮沈す」⑧とは、世間の人なみにして、己が才智德行をあらわさぬことなり。

① 杜甫『八哀詩・贈司空王公思禮』「胸襟日沈靜、肅肅自有適」。

② 戴叔倫『春日早朝應制』「月沈宮漏靜、雨濕禁花寒」。

③ 許渾『寄契盈上人』「鴈來秋水潤、鴉盡夕陽沈」。

④ 謝靈運『晚出西射堂』《文選》卷二十二「連鄣疊嶂、青翠香深沈」。

⑤ 『史記』陳涉世家第十八「夥頤涉之爲王沈沈者」、注「應劭曰、沈沈、宮室深邃之邈也」。

⑥ 『世說新語』輕詆第二十六「遂使神州陸沈、百年丘墟、王夷甫諸人、不得不任其責」。

『莊子』則陽「方且與世違而心不屑與之俱、是陸沈者也」、郭注「人中隱者、譬無水而沈也」。

⑦ 未詳。

⑧ 『史記』游俠列傳第六十四「豈若卑論儕俗、與世浮沈而取榮名哉」。

【湏】「酒に湏む」とは、酒に溺れることなり①。溺れて反らざるを「湏」といふ②。

① 『說文解字』「湏、沈於酒也」。

『書經』酒誥「惟亞、惟服、宗工、越百姓里居、罔敢湏于酒」。

② 『康熙字典』「湏而不反、皆謂之湏」。

『禮記』樂記「慢易以犯節、流湏以忘本」。

【湏】埋と同じ。ふさぐなり。「湏鬱」①は「壹鬱」の音の轉じるなり。「しづむ」とよむは誤りなり。「字湏す」②というは、版行ものの版うまりて字きえたるなり。

① 『左傳』昭公二十九年「若浪弃之、物乃坻伏、鬱湏不育」。

韓愈『原道』「爲之禮以次其先、爲之樂以宣其湏鬱」。

② 錢謙益『題李伯元修楮家堡公記』「漆版摩娑字半湏、蟲絲鼠跡暗承塵」。

【淪】水に没するなり。「淪喪」①は國家の亡びるをいう。「淪胥」②は相與に溺れ沈むなり。「隱淪」③は隱者のことなり。

① 『書經』微子「今殷其淪喪、若涉大水、其無津涯」、傳「淪、没也、殷將没亡」。

② 『詩經』小雅・節南山之什・雨無正「若此無罪、淪胥以鋪」。

③ 謝靈運『入華子崗是麻源第三公詩』《文選》卷二十六「既枉隱淪客、亦棲肥遯賢」、注「向曰、隱淪肥遁、皆幽居者」。

【鎮】訓似て、義全く異なり。「しづむる」とは、重りおもをかけることなり。「鎮壓」①「鎮重」②などなり。「方鎮」③「藩鎮」④などは、古の鎮守府、今の大阪などの如く、都に遠き地に一方のおさえとなる諸侯をいう。

①『晉書』列傳第十二唐彬「今諸軍已至、足以鎮壓内外、願無以爲慮」。
②『三國志』魏書・二公孫陶四張傳第八「若將軍今舍之而去、軍無鎮重、易京之危、可立待也」。

③『晉書』列傳第四十五范寧「又方鎮去官、皆割精兵器杖以爲送故、米布之屬不可稱計」。

④『三國志』蜀書・許巖孫簡伊奉傳第八「公雖臨荒域、不能參與本朝、亦國家之藩鎮、足下之外援也」。

【溺】澆 水に溺れることなり①。澆は俗字なり。水に溺れるばかりに用いる。溺の字は「色に溺る」②「欲に溺る」③など、ひろく用いる。

①『釋名』釋喪制「死於水者曰溺、溺、弱也、不能自勝之言也」。

②元結『七不如七篇』第六「元子以爲人之溺也、溺於聲、溺於色、溺於圓曲、溺於妖妄、不如溺於仁、溺於讓、溺於方直、溺於忠信者爾」。

③『法苑珠林』卷第二十二入道篇第十三欣厭部「住家者溺欲淤泥、出家者出欲淤泥」。

8〇し〜

布敷 播 席 藉 鋪 及 如 若 (五、廿四号表)

【布】【敷】二字ともに、地にものをしくより、「教を布く」①「教を敷く」②「政を布く」③「政を敷く」④などと用いる。みな廣く散じることなり。席筵をしくにも用いる。「雲布く」⑤「雲敷く」⑥「枝葉敷く」⑦「枝葉布く」⑧、通用す。「流

布」⑨「展布」⑩「森布」⑪、皆布列の義なり。藥をつけ、膏藥をつけるを「敷」という⑫。ひろげてつける故なり。

①王儉『郊殷議』「明堂有五室、天子每月於其室聽朔布教」。

②『書經』堯典「帝曰、契、百姓不親、五品不遜、汝作司徒、敬敷五教、在寬」。
『舊唐書』列傳第九十七杜佑「君臣之際、臣有耆艾以求其退、君有優賜以徇其情、乃輟鄧禹敷教之功」。

③『史記』孝文本紀第十「人主不德、布政不均、則天示以菑、以誠不治」。

④『詩經』商頌・長發「敷政優優、百祿是道」。

⑤『漢書』司馬相如傳第二十七下「旁魄四塞、雲布霧散、上暢九垓、下沂八埏」。

⑥『晉書』志第十三樂下「惟大晉、德參兩儀、化雲敷」。

⑦董思恭『詠雲』「帶月綺羅映、從風枝葉敷」。

⑧羅倫『雲峯山水吟并引』「其根盤廣莫、枝葉布寰宇」。

⑨『後漢書』宦者列傳第六十八「及京師大亂、錢果流布四海」。

⑩『左傳』哀公二十年「使陪臣敢展布之」。

⑪左思『魏都賦』《文選》卷六「丹梁虹申以並亘、朱栢森布而支離」。

⑫『閩微草堂筆記』卷十三槐西雜志三「敷藥結痂、竟以漸愈」。

【播】「ほごす」とよむ。施の字の義に非ず。「分播」「播揚」①などと連用して、ひろくいいふらし、いいひろめることなり。布・敷の字に似たり。されども席をし〜くことには用いず。形状の上に用いぬ字なり。

①『左傳』昭公三十年「將焉用自播揚焉」。

【席】【藉】席は「むしろ」というより、「しく」とよむ。「藉」は艸を下にし〜くことなり。下じきのことなり。二字ともに轉用して、「よる」とよむ。因の字の意なり。下じきの上のものをしくゆえ、ものの上臺にする意あり。「勢に席る」①「勢に藉る」②、恃む意なり。

①『唐書』列傳第二十一房玄齡「治家有法度、常恐諸子驕侈、席勢凌人、乃集古今家誡、書爲屏風。」

②『漢書』楚元王傳第六「夫乘權藉勢之人、子弟鱗集於朝、羽翼陰附者衆。」

【鋪】布の字に似たり。門扇のかなものへ金をのべて付けたるを「鋪」といふ。「金鋪」①「銀鋪」②「鋪首」③、是れなり。それよりふとん席などをしくくことにも用ゝる。

①『漢書』揚雄傳第五十七上「排玉戸而颺金鋪兮、發蘭惠與穹窮」、注「李奇曰、鋪、門首也。師古曰、言風之所至、又排門揚鋪、擊動鍤鈕、回旋入宮、發奮衆芳。」

②何晏『景福殿賦』《文選》卷十一「青瑣銀鋪、是爲闈闔。」

③『漢書』哀帝紀第十一「孝元廟殿門銅龜蛇鋪首鳴。」

【及】「しく」とよめども、走るものにあとより追いつくことなり。

【如】【若】「しかず」は及ばぬなり。「しくものなし」とは、及ぶものなきなり。

9〇しほむ

萎 薺 凋 (五、廿五号表)

【萎】「しほむ」。訓の如し。

【薺】しほむ貌なり。「萎薺」①「薺爾」②。

①『宋史』列傳第一百七十八曾從龍「涉獵未精、議論疏陋、綴緝雖繁、氣象萎薺。」

②楊萬里『謝賜衣帶表』「然縣薄多慚、豐雪之香薺爾推頰、第怯萬釘之寶。」

【凋】半傷るるなり①。形のしほむには限らず。

①『說文解字』「凋、半傷也。」

10〇しろし

白 素 皎 皚 皓 (五、三十号表)

【白】「しろし」。訓の如し。轉用して、潔白の意、明白の意に用いる。

【素】「しろし」とよむ。染めぬ帛なり①。それより轉用して、「素樸」②「質素」③、又「平素」④「素常」⑤と用いる。

①『說文解字』「素、白織繪也。」

②『莊子』馬蹄「同乎無知、其德不離、同乎無欲、是謂素樸。」

③『說苑』反質「孔子曰、賁、非正色也、是以歎之。吾思夫質素、白當正白、

黑當正黑。」

④諸葛亮『與子違書』「承知消息、慨然永歎、以存足下平素志素。」

⑤『漢書』薛宣朱博傳第五十三朱博「上知傳太后素常怨喜、疑博、玄承指、即

召玄詔尚書問狀。」

【皎】「皎々」①「皚々」②と連綿字に用いる。白き色を形容する詞なり。

①『詩經』小雅・鴻鴈之什・白駒「皎皎白駒、食我場苗。」

②劉歆『遂初賦』「漂積雪之皚皚兮、涉凝露之降霜。」

【皓】「しろし」。白と同義なり。「皓首」①は白頭なり。又「皓々」②と連用して、形容の詞となる。

①李陵『重報蘇武書』「丁年奉使、皓首而歸、老母終堂、生妻去帷。」

②『詩經』唐風・揚之水「揚之水，白石皓皓」。

11〇したふ

慕 戀（六、二号裏）

【慕】「したふ」と訓ず。「愛慕」①「思慕」②「想慕」③「憐慕」④、皆愛し思い
て忘れぬことなり。又「願慕」⑤「羨慕」⑥とも連用す。羨み願うより、その人そ
の事を愛し思いて忘れぬなり。懷の字に似て、「懷」は心にこめて思ふ義故、わすれ
ぬ意はあれども、愛する意なき字なり。又和語の跡をしいて行くなどは、跡の字、
尾の字なるべし。

①『後漢書』卓魯魏劉列傳第十五「性寬仁恭愛、鄉黨故舊、雖行能與茂不同、
而皆愛慕欣欣焉」。

②『禮記』問喪「故哭泣無時、服勤三年、思慕之心、孝子之志也、人情之實也」。

③『宋史』志第七十五禮二十五凶禮一「想慕慈顏、杳不復見、怨讎有在、朕敢
忘之」。

④『史記』樂書第二「其愛心感者、其聲和以柔、正義「柔、軟也。若外境憐
慕、故己心愛惜、愛惜在內、則樂和柔也」。

⑤『楚辭』九辯「獨耿介而不隨兮、願慕先聖之遺教」。

⑥『後漢書』鄭范陳賈張列傳第二十六「學者皆欣欣慕焉」。

【戀】慕の字と大抵同じ。心のひかれつながれるなり。愛することに多く用いれど
も、それにも限らぬなり。「戀々乎」①などと形容字にも用いる。又醫書に「膈に戀
ふ」②とは、痰などのむねにからまることなり。

①『史記』范雎蔡澤列傳第十九「然公之所以得無死者、以涕袍戀戀、有故人之
意、故釋公」。

②『飲食須知』卷四菓類「石榴 味甘酸澀、性溫。多食令人損肺、傷齒令黑、

戀膈生痰。凡服食藥物人忌之」。

12〇したしむ

親 睦 好 昵 暱 愛 仁 德 澤 化 恩 惠 寵 幸 嬖 慈 友（六、十
五号表）

【親】「したし」「したしむ」。疎の反対なり。又「みづから」「まのあたり」とよむ
ときは、人手にかけず自身することなり。

【睦】親しみて和するなり。

【好】「よしむ」と訓ず。情の親しきなり。「夫婦の好み」①「兩國の好み」②「舊
好」③「總角の好み」④。

①曹鄴『四怨三愁五情詩十二首』其三情「見他夫婦好、有女初嫁人」。

②『左傳』文公十二年「藉先君之命、結兩國之好」。

③『左傳』文公六年「先君愛之、且近於秦、秦舊好也、……難必抒矣」。

④『三國志』吳書・周瑜魯肅呂蒙傳第九引『江表傳』「策令曰、周公瑾備異才、
與孤有總角之好、骨肉之分」。

【昵】【暱】同字なり。「むつぶ」「なつかしんづ」とよむ。親に私の義を兼ねる。公おほやけ

なることにはなくて、各別にとりわけて親しむなり。故に婢妾又嬖臣を近づける
ことに用いる。

【愛】「いつくしむ」と訓ず。かわいがるなり。憎・惡の反対なり。又ひきさうするな
り。「金玉を愛す」①「菊を愛す」②「梅を愛す」③の類。又すきこのむなり。嗜好
の義なり。「愛酒」④「愛酸」などなり。これもすきものをばひきさうして食う故な

り。又愛惜の義、「おしむ」と訓ず。これもひきうして、はなしともながる意なり。惜の字はなくなりて後に、おしむにも、はなしともなかるにも、兩方に通用す。愛の字ははなしともながりすて、ともながるばかりに用いる。「日を愛む」⑤「羊を愛む」⑥の類なり。

①『史記』留侯世家第二十五「今公誠能無愛金玉璧帛、令太子爲書、卑辭安車。」

②黃庭堅『出禮部試院王才元惠梅花三種、皆絕妙、戲答三首』二「舊時愛菊陶彭澤、今作梅花樹下僧。」

③王冕『題月下梅花』「平生愛梅頗成癖、踏雪行穿一雙屐。」

④李白『月下獨酌四首』二「天若不愛酒、酒星不在天。地若不愛酒、地應無酒泉。」

⑤『大戴禮』曾子立事第四十九「君子愛日以學、及時以行、及時以行、難者弗辟。」

⑥『論語』八佾「子曰、賜也、爾愛其羊、我愛其體。」

【仁】「いつくしむ」とよむ。「民を仁する」の類。二編に見える。

【德】「いつくしみあり」とよむときは、仁德のことなり。刑の反對なり。刑法を以て民を治めず、専ら仁慈を以て民を治めるなり。又讎の反對、恩なり。「徳色」①とは、恩がましき顔色なり。「深く之を徳とす」②とは、恩なりと思ふことなり。

①『新書』時變「假父稷鉏杖棼耳、慮憂徳色矣。」

②『三國志』呉書十周泰傳「是日無泰、權幾危殆。策深徳之、補春穀長。」

【澤】「いつくしみ」とは訓ぜねども、恩恵などの類なるゆえ、ここに附す。仁徳・仁恩のよけいの及ぶをいう。「甘澤」①「雨澤」②は雨のうるおいなり。田島のしめりになる方よりいう。又「塗澤」③「釵澤」④というとき、「塗」は女の粉を付けるなり⑤、「澤」は髪に油をぬり⑥、「面に花の露をつけるなり」⑦。「芳澤」⑧も同じ。「手

澤」⑨は、てあぶらなり、「口澤」⑩は、くちあぶらなり。共に死したる人の道具の上にていう。

①『後漢書』循吏列傳第六十六「昔東海孝婦、感天致旱、于公一言、甘澤時降。」

②『禮記』禮器「是故天時雨澤、君子達霽霽焉。」

③『新唐書』后妃傳上則天武皇后「太后雖春秋高、善自塗澤、雖左右、不悟其衰。」

④馮衍『與婦弟任武達書』「唯一婢、武達所見、頭無釵澤、面無脂粉、形骸不蔽、手足抱土。」

⑤白居易『想東遊五十韻』「函宮紅塗粉、菰蒲綠潑油。」

⑥『新唐書』列傳第一百四十七上南蠻上「婦人不粉黛、以蘇澤髮。」

⑦『紅樓夢』變生不測鳳姐潑醋 喜出望外平兒理粧「這是上好的胭脂擰出汁子來、淘澄淨了、配了花露蒸成的。」

⑧『列子』周穆王「簡鄭衛之處子娥媚靡曼施芳澤、正蛾眉、設笄珥、衣阿錫、曳齊紈。」

⑨『禮記』玉藻「父没而不能讀父之書、手澤存焉爾。母没而杯圈不能飲焉、口澤之氣存焉爾。」

【化】「いつくしみ」とも、「めぐみ」ともよむ。政にても、教えにても、そのしるしの自然と人に及ぶをいう。又「化外」①は夷狄の地をいう、中國の政道のわたらぬ處ということなり。「歸化人」②とは、夷狄より中國に來りて居住する人をいう。

①『宋史』志第一百三十八食貨下七阮治「民鑄銅爲佛像、浮圖及人物之無用者禁之、銅鐵不得闌出蕃界及化外。」

②『南史』列傳第二十五顧琛「文帝宴會、有歸化人在坐、上問琛庫中仗猶有幾許。」

【恩】「いつくしみ」とよむ。音にてよみて能く通ず。仇・讎・怨の反對なり。「推

恩侯」①とは分地の大名をいう。

- ① 郝經『續後漢書』卷一・帝紀第一昭烈皇帝「武帝詔諸侯王得推恩侯支庶子弟、靖王百餘子、侯者五人」。

【惠】「めぐみ」「めぐむ」とよむ。訓の如し。大なるを「仁」といい、小なるを「惠」という。又人に物を與えるを「めぐむ」という。

【寵】「いつくしみ」とよむ。君父より餘人に超えたる恩をするをいう。「外寵」①は男色の出頭人なり、「内寵」②は女色の出頭人なり。又「光寵」③「榮寵」④といふときは、外聞よき立身をいう。寵嬖の類に非ざれどもいふなり。

- ① 『左傳』閔公二年「内寵竝后、外寵二政」。
② 司馬遷『報任少卿書』《文選》卷四十二「下之不能積日累勞、取尊官厚祿、以爲宗族交遊光寵」。
③ 『後漢書』李王鄧來列傳第五「時天下略定、通思欲避榮寵、以病上書乞身」。

【幸】功もなく、徳もなく、惠をうけるをいう。「寵幸」①「恩幸」②と連用す。思いがけぬ惠なり。「幸臣」③は出頭人なり。寵の字と似たれども、寵は辱の反對にて、外聞よき意あるゆえ、世にときめく臣なり。「幸臣」は、高官高位にならずとも、菟角出頭する人なり。「天寵」④「天幸」⑤という語にて明らかなり。「天寵」とは、天子が諸侯などになりたるをいう、「天幸」は何事にても、天然の仕合せをいう。婢妾に手を付けるを「幸す」という。これも思いがけぬ仕合せという意なり。君の遊行を「幸」といふ⑥。これも行幸の先々にては、その處の民に物を賜わる故、思いがけぬ仕合せあるゆえなり。

- ① 『後漢書』皇后紀第十下「時太后秉政而梁冀專朝、故后獨得寵幸」。
② 『南史』列傳第六十七恩幸「爰及梁陳、斯風未改、其四代之被恩倖者、今立以爲篇、以繼前史之作云爾」。

③ 『韓非子』姦劫弑臣「必將以曩之合己信今之言、此幸臣之所以得欺主成私者也」。

- ④ 『易經』師「象曰、在師中吉、承天寵也」。
⑤ 『莊子』漁夫「孔子又再拜而起、曰、今者丘得遇也、若天幸然」。
⑥ 『獨斷』上「幸者、宜幸也。世俗謂幸爲僥倖、車駕所至、臣民被其德澤、以爲僥倖、故曰幸也」。

【嬖】「いつくしみ」とも、「めぐみ」ともよまず、寵幸の類なるゆえ、ここに附す。「外嬖」①はごもつ「主人の寵愛を得た小姓」なり、「内嬖」②はめかけなり。「嬖せらる」とは目をかけられるなり、「幸す」といふは、一度にても手を付けられるという詞に用いる。差別あるなり。

- ① 『左傳』成公十七年「晉厲公侈、多外嬖、杜注「外嬖、愛幸大夫」」。
② 『左傳』僖公十七年「齊侯好内、多内寵、内嬖如夫人者六人」。

【慈】「いつくしみ」「うつくしむ」。「仁慈」①「慈愛」②などと連用す。父の子をふびんにすることなり。君上の上にも、その意に用いるべし。一旦の惠に非ず、常々の愛なり。「仁慈」「慈祥」③は德行にていう。

- ① 『漢書』宣元六王傳第五十「楚王囂素行孝順仁慈、之國以來二十餘年」。
② 『禮記』樂記「寬裕肉好順成和動之音作、而民慈愛」。
③ 『儀禮』士相見禮「與衆言、言忠信慈祥」。

【友】「いつくしむ」とよむときは、兄の弟をふびんにするをいう。兄より弟を朋友のごとくする意なり。兄は多くは兄ぶりにて、弟をませぬものなる故、兄たる道をよく行ふを「友」といふ①。

- ① 『書經』君陳「惟孝、友于兄弟、克施有政」。

13〇しのぶ

忍 耐 堪 勝 任（六、廿三号裏）

【忍】「しのぶ」と訓ず。こらえるなり、かんにんするなり。又「忍刻」①「残忍」②などは、心づよく物のあわれを知らぬをいう。平語の「しのぶ」は微行なり、混ざること勿れ。

①『宋史』列傳第九十五司馬光「但如司馬相公者、海内稱其正直、今謂之姦邪、民不忍刻也」。

②『鹽鐵論』褒賢第十九「趙綰王臧之等、以儒術擢爲上卿、而有姦利殘忍之心」。

【耐】【堪】【勝】【任】皆「たへたり」「たふる」とよむ。「久に耐へたり」①「寒に耐へたり」②など、久しきにたたえ、さむきにたたえるなり。忍の字に似て、自然、使然の別あり。「忍」はかんにんしこらえる義ゆえ、使然なり、「耐」は自然とたえるなり、「任」の字は力のたたゆるより出でたり。「力任へず」③「重きに任ふ」④「力堪へず」⑤「力勝へず」⑥、皆同じ。「看るに堪へず」⑦「聞くに堪へず」⑧、むさくて見られぬ、あわれにて見られぬ、聞かれぬなり。「勝へて數へ難きなり」⑨とは、數の多くてかぞえ合わせられぬなり。用いように輕重あれども、皆力の及びてたたる意に用いる。助語の類なり。

①『新唐書』列傳第四十四武平一「日用折平一曰、君文章固耐久、若言經、則敗績矣」。

②杜甫『人日兩詩』二「尊前柏葉休隨酒、勝裏金花巧耐寒」。

③謝靈運『登池上樓』『文選』卷二十二「進德管所拙、退耕力不任」。

④『論語』泰伯「士不可以不弘毅、任重而道遠、仁以爲己任、不亦重乎」。

⑤李白『魯郡堯祠送寶明府薄華還西京』「朝策犁眉騮、舉鞭力不堪」。

⑥『史記』魯仲連鄒陽列傳第二十三「新垣衍曰、先生獨不見夫僕乎、十人而從一人者、寧力不勝而智不若邪、畏之也」。

⑦『新唐書』志第二十五行二「時幽州又有謠曰、舊來誇戴竿、今日不堪看、但看五月裏、清水河邊見契丹」。

⑧武元衡『路岐重賦』「分手更逢江驛暮、馬嘶猿叫不堪聞」。

⑨李煜『書琵琶背』「旣自肩如削、難勝數縷條」。

14〇しる

知識 覺 悟 喻 曉 會 領 解 了（六、四十三号裏）

【知】【識】二字ともに「しる」と訓ず。大抵かわることなく通用す。然れども差別あり。「人を知る」①「己を知る」②など、皆深く知ることなり。「名を識る」③「面を識る」④は見知ることなり。「知名」⑤は名を知られるなり。「某の公の知を受く」「某に知らる」⑥「知らるる」などは、皆知己・知音の義なり。「某の人に識らる」「識らるる」などは、皆みしられたることなり。死字に用いるとき、「知」は去聲になりて智と同じ。「識」はやはり入聲にて、見識なり。「智」は大小淺深あり。全體をいう「識」は、一處深く見付けたる處をいう。又去聲の時、おぼえることなり。又知の字を「知州」⑦「知府」⑧などと用いるときは、「つかさどる」とよむ。和書に「しるよしして」とあるは、知の字に泥ちんでその義の殊なることを知らぬなり。

①『書經』皋陶謨「知人則哲、能官人、安民則惠、黎民懷之」。

②『史記』刺客列傳第二十六「士爲知己者死、女爲說己者容」。

③方幹『遊竹林寺』「得路到深寺、幽虛曾識名」。

④『新五代史』雜傳第四十三崔胤「遭世亂、寓居于滑臺、不遊里巷者十餘年、人罕識其面」。

⑤『禮記』曲禮上「男女非有行媒、不相知名」。

⑥『新唐書』列傳第一百八畢誠「始、誠被知於宣宗、賞許以相」。

⑦『北史』列傳第八十八序傳「朝廷以璵器望兼美、閑於政事、擢爲悅府長史、兼知州務」。

⑧『新唐書』列傳第一百四十四王璠傳「訓以京兆多吏卒、擢爲少尹、知府事、以就其謀。」

【覺】【悟】共に「さとする」なり①。二字ともに、もと眼のさめるなり。轉用して、さとするに用いる。忽ち開明なる義なり。眠りたる内は黑暗なるに、さめれば忽ち明らかなるに比するなり。又覺の字、「おほゆる」とよむときは、なんとなく知るなり。心を用いずして知るなり。記憶の義には非ず。

①『説文解字』「覺、寤也」、「悟、覺也」。

【諭】「さとす」「さとする」と訓ず。「さとす」は、迷える人に説きまかせて悟らしめるなり。「さとする」は、今まで迷えるに、自分と開け明らかなるなり。覺悟の義に似たれども、忽然の義なし。

【曉】「さとす」とよむ。夜の明けけるにたとえる。

【會】「さとする」とはよまねども、「會す」「會得す」「領會す」「解會す」①「會せず」など、みな合點するというほどの語なり。俗語なり。

①木華『海賦』、『文選』卷十二「開合解會、灑灑濕濕」。

【領】「さとする」とはよまねども、「領會」①「領略」②などと用いるときは、のみこむというほどの詞なり。

①向秀『思舊賦』、『文選』卷十六「託運遇於領會兮、寄餘命於寸陰」。

②江淹『張抵尉綽』、『文選』卷二十一「然後君子道、領略歸一致」。

【解】「さとする」と訓ず。ものの繩縛のとけ、固まりのはらはらととけるに用いる字ゆえ、疑を解き、難問を解くに用いる。それより轉用して、軽く用いるとき、義理

をときほどく意なり。「其の解を得たり」「其の解を得ず」とは、その理趣というほどの語に用いる。「見解」①は「見識」に同じ。又「二解」「一解に及ばず」というは、一段ということをも「二解」という②。樂府の一章を「二解」というより出でたり②。

①高攀龍『蒼錢啓新一』「學者先須識仁識得此理、自不作如此見解也」。

②『古今樂錄』「儗歌以一句爲一解、中國以一章爲一解。王僧虔云、古曰章、今日解」。

【了】「さとする」とよむ。「了解」①「了悟」②「明了」③など、明らかに知ることなり。「了々」④は「歴々」と同じ、一々分明なることなり。

①『世説新語』賞譽「鍾士季目王安豐、阿戎了了解人意」。

②『明史』列傳第一百七十一儒林二「要之、居敬二字盡之。自其居敬之精明了悟而言、謂之窮理、即考索討論、亦居敬中之一事」。

③『後漢書』方術列傳第七十二下「魯女生數說顯宗時事、甚明了、議者疑其時人也」。

④『世説新語』賞譽第八「鍾士奇目王安豐、阿戎了了、解人意」。

15〇しわむ

颯 嘖 (後三、廿八号表)

【颯】【嘖】瞶にも作る。同義なり。眉をしわめることなり。「颯蹙」①と連す。

①『玉篇』「颯、颯蹙、憂愁不樂之狀也」。

16〇しめす

呈示似視見觀 (後三、廿八号表)

【呈】「しめす」とよむ。出してみせることなり。「呈露」①と連屬す。故にたてまつる意にもなる。

①曹植『洛神賦』、『文選』卷十九「延頸秀項、皓質呈露」。

【示】人にみせることなり。物を下へさげてみせる意なり。「垂示」①と連す。故に「呈」は我より目上にみせる意なり、「示」は我より目下へみせる意なり。

①蔡邕『琅邪王傳蔡朗碑』「身没稱顯、永遺令勳。表行揚名、垂示後昆」。

【似】【視】示と通ず。

【見】「しめす」とよむときは、呈の字に似てかるし。みさせるといふほどのことなり。故に上下に通ず。

【觀】「しめす」とよむときは、見物させるといふ程のことなり。

(待續)